

絵解き 地図と写真によるドイツ入門

森鷗外のドイツ留学を辿ってみよう

ドイツ アカデミック街道を歩く

丹野義彦 (東京大学教養学部心理・教育学部会)

ドイツ アカデミック街道を歩く

大学歩きの面白さを伝えるために、私はアカデミックツアーとして、ロンドン編、アメリカ編、イギリス編、イタリア編の4部作を刊行してきた(星和書店および有斐閣)。続いて、ドイツ編の「ドイツ・アカデミック街道」に入り、これまで、ハイデルベルク、ライプツィヒ、ミュンヘン、ベルリンをとりあげてきた。ここでは、スピンアウトとして、森鷗外のドイツ留学についてまとめた。

森鷗外のドイツ留学

森鷗外は、1884年(明治17年)に、22歳の若さでドイツ留学を命じられた。目的は陸軍衛生制度の調査と軍陣衛生学研究のためであった。

鷗外のドイツ留学は、①ライプツィヒ時代、②ドレスデン時代、③ミュンヘン時代、④ベルリン時代の4つの時期に分かれる。1884年にはライプツィヒ大学に行き、1885年にはドレスデンに行き、1886年にはミュンヘン大学に入る。1887年には、ベルリンに移り、のちにプロシアの軍の隊務に携わった。丸4年間の留学生活であった。

鷗外は、1888年の9月に帰国した。その後ドイツ人女性が鷗外の後を追って来日したが、弟らが帰国させた。この話は小説『舞姫』のモデルになった。

森鷗外のドイツ留学

1884(明治17)年 22歳	6月 陸軍衛生制度調査および軍陣衛生学研究のためドイツ留学を命じられる	
	8月 横浜から出港	
	10月 ベルリン着 橋本綱常の示唆を受ける	
	10月 ライプツィヒへ行き、ライプツィヒ大学のホフマン教授の指導を受ける	ライプツィヒ時代
1885(明治18)年 23歳	2月 ドイツ語による「日本兵食論」「日本家屋論」を執筆した	
	10月 ドレスデンで軍隊衛生学の研究に従事	ドレスデン時代
1886(明治19)年 24歳	3月 ミュンヘン大学に入り、ベッテンコーフェル教授のもとで研究する	ミュンヘン時代
1887(明治20)年 25歳	4月 ベルリンに移る。北罪柴三郎とともにローベルト・コッホを訪ね、その衛生試験所に入る	ベルリン時代
1888(明治21)年 26歳	3月 ベルリンのプロシア近衛歩兵第2連隊に入り、軍隊医務に従事(～6月)	
	7月 ドイツ発。ロンドンやパリなどを訪問しながら帰る	
	9月 横浜港に到着 陸軍軍医学舎(陸軍軍医学校)教官に任命される	
	9月 ドイツ人女性が来日、弟らが会い、帰国させた(これを扱った『舞姫』を1890年に発表)	

以下では、①ライプツィヒ、②ミュンヘン、③ベルリン時代の鷗外の留学生活と環境について追ってみよう。

これらは私のハイデルベルク編、ミュンヘン編、ベルリン編からの抜粋なので、前後のつながりがわかりにくいことがある。その場合は、ぜひ元のファイルをご参照いただきたい。

<目次>

1章	ライプツィヒの鷗外
2章	ミュンヘンの鷗外
3章	ベルリンの鷗外
3-1	第1の下宿
3-2	第2の下宿
3-3	第3の下宿
3-4	コッホと鷗外

1章 ライプツィヒの鷗外

ベルリンでの橋本綱常からの指示

鷗外は1884年10月にベルリンに着いた。この時に、ベルリンにやっていた軍医監の橋本綱常と会った。ここで橋本から、衛生学を学ぶべきであり、その順序としては①ライプツィヒ大学のホフマン、②ミュンヘン大学のペッテンコーファー、③ベルリン大学のコッホだと言われた。鷗外のその後の日程は、この橋本のプログラムどおりになったのである。当時、ドイツの大学で衛生学教室があったのはこの3つだけであり、その前に留学した緒方正規（前述）もこうしたルートを進っていた。

前述のように、当時の医学の最前線は、コッホの細菌学やペッテンコーファーの衛生学であったから、橋本綱常は世界の医学の最先端を的確につかんでいたことになる。

橋本綱常（1845～1909年）は越前藩医の家に生まれた。橋本左内（福井藩主の松平春嶽につかえて安政の大獄で獄死）の実の弟である。明治維新後は、陸軍の軍医となり、1872～1877年までドイツに留学し、外科と内科を学んだ。帰国後は軍医監となり、東京大学医学部教授を兼ねた。1883年に陸軍卿大山巖の随員としてヨーロッパに行き、赤十字条約加盟のために奔走した。このときにベルリンで鷗外と会ったのである。

このように橋本は自分もドイツ留学の経験があり、世界の医学の動向を的確につかんでおり、鷗外のために研究プログラムをたてることができたと思われる。その後、橋本は陸軍医務局長をへて、日本赤十字社病院長となった。

鷗外は、すぐにライプツィヒに向かった。

森鷗外のライプツィヒ



この地図は、ライプツィヒの鷗外が関係した場所である。

参考資料：金子幸代「ライプツィヒ時代の森鷗外」鷗外、34号、44-63頁、1984年

鷗外の下宿

鷗外の下宿は、タール通り1番地Thalstrasse 1にあった。タール通りは今でもあるが、この下宿の建物は今はない。1884（明治17）年10月の『独逸日記』には次のように書かれている。

二十三日。午後、府の東北隅 タアル街 Thalstrasseなるヲオル Frau Eduard Wohl という寡婦の家の一房を借る。日本の二階にあたるところなり。我が房には机あり、食卓あり、臥床をば壁に傍ひたる処に据えたり。

被衾は羽毛を装満したるものにして、軟にして暖なり。また「ソファ」Sofaあり。倦むとき憩うに宜し。

つまり、鵑外の部屋は2階にあり、部屋には机と食卓とベッドとソファがあった。ソファは、疲れた時に休むにはとてもよいので、鵑外は気に入ったようである。また、掛け布団は羽毛が入っていて、柔らかくて暖かく、これも鵑外は気に入ったようである。

ヨハネス教会

この下宿の近くにヨハネス教会があり、この教会の鐘を鵑外は毎朝聞くことになる。下宿の近くには、前述のグラッシィ博物館がある。

衛生学研究所

リービヒ通り24番地が、衛生学研究所である。毎日、鵑外は下宿から衛生学研究所に通った。歩いたルートは、タール通りではなく、シュテンファン通りを南下したということである。

教授のホフマンの自宅は、現在のフィリップ・ローゼンタールにあった。また、指導してくれた同僚のジョイベの自宅は、その少し西のエミリエン通りにあった。

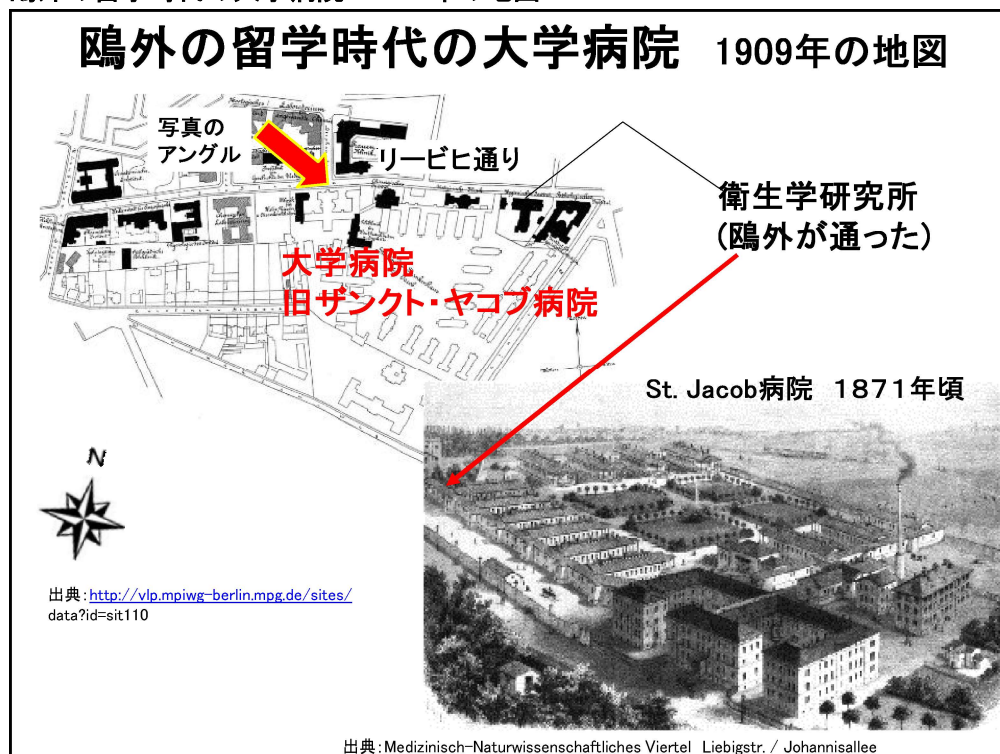
後述のように、鵑外の同僚の送別会がゴーリス地区の小宮殿で開かれ、鵑外は参加した（第4章参照）。

フォーゲル夫人邸

リービヒ通りの西側には、フォーゲル夫人邸がある。ここは、鵑外が毎日食事に通った場所である。タール通りの下宿は食事がつかなかったので、朝と夜に食事を出してくれるフォーゲル夫人を見つけて、毎日通った。このあたりの地区は、空襲で焼けてしまい、今とは通りの様子が全く変わってしまっている（後述）。

鵑外は、フォーゲル夫人の家でその親戚の女性たちと知り合い、水晶宮や劇場、コンサートなど、市内のあちこちの娯楽施設を回った。

鵑外の留学時代の大学病院 1909年の地図



鵑外が学んだ衛生学研究所は、リービヒ通り24番地Liebigstraße 24にあった。

この地図は、1909年のものだが、リービヒ通りの南側には、ザンクト・ヤコブ病院St. Jakob病院が建っていた。この病院は、1785年にライプツィヒ市の西部（現在の動物園のあたり）に作られ、臨床教育がおこなわれた。1866年に、現在のリービヒ通りに移転した。そして、この病院がライプツィヒ大学病院として臨床教育をおこなった。右下の写真のように大きな病院である。鵑外が留学した1884年当時にも建っていた。ザンクト・ヤコブ病院は、1925～1928年に、Johannisallee 32へと移転したため、病院の跡地は、大学の医学部のものになった。第二次大戦で建物は破壊された。

この地図には、鵑外が学んだリービヒ通り24番地の衛生学研究所がでている。右下の写真の左上には、衛生学研究所（当時は病理学研究所）の建物が小さく映っている。



鷗外が学んだ衛生学研究所は、リービヒ通り24番地Liebigstraße 24にあった。

この建物は、1871年に病理学研究所の新しいビルとして建てられた。

この中に病理化学研究室があり、その主任はホフマンであった。1878年に、衛生学講座が開設され、ホフマンが教授に任命された。おそらくこの病理学研究所の中の一部に衛生学講座が間借りしていたのだろう。鷗外が留学したのは、1884年である。

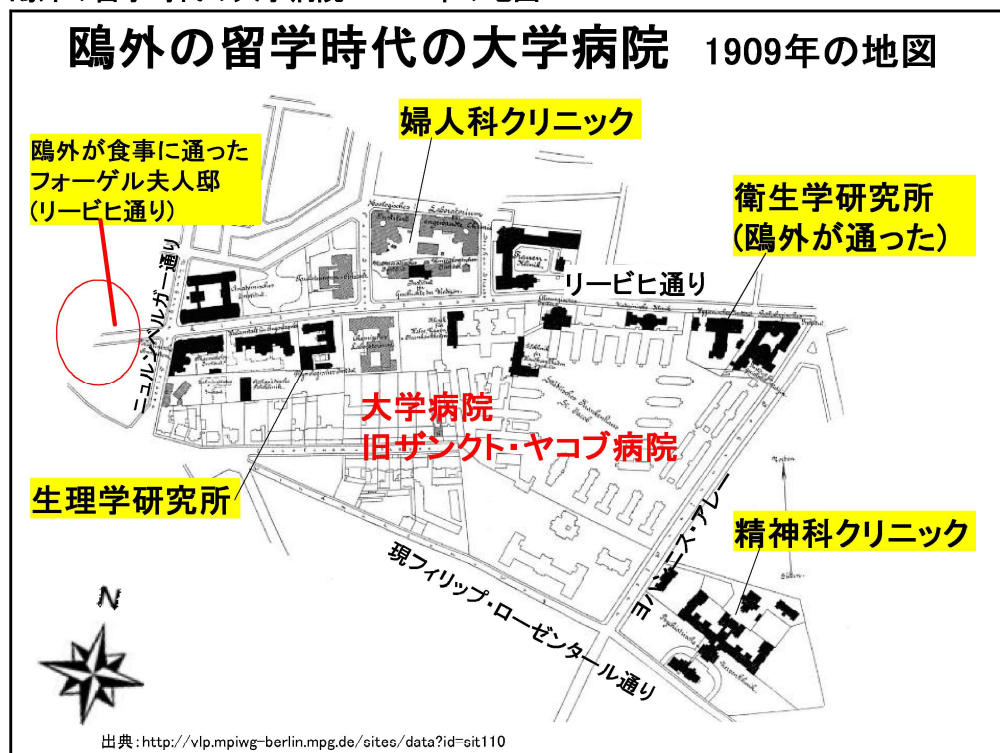
1906年には、病理学研究所は、東隣りのリービヒ通り26番地Liebigstraße 26に新しい建物を作って移動したので、リービヒ通り24番地の建物が衛生学研究所として新たに出発した。

1945年に、この建物は爆撃で大きな被害を受けた。

1953年に再建されて、医学微生物学・疫学研究所として使われた。

今もこの建物は現存している。右上の写真のように古い建物である。私が2012年に行った時は、表札には「リービヒ通り24番地 病理学研究所（神経病理学部）」と書かれてあった（右下の写真）。

鷗外の留学時代の大学病院 1909年の地図



1909年の大学病院の地図を見ていると、いろいろなことがわかって興味深い。

まず、鷗外が食事に通ったフォーゲル夫人邸である。鷗外が毎日の食事のまかないを受けるために通ったフォーゲル夫人邸は、リービヒ通りにあった。現在のリービヒ通りは、ニュルンベルガー通りで行き止まりになっているが、当時のリービヒ通りは、ニュルンベルガー通りを突き抜けて、西側に達していた。たしかに、1909年にはこのようになっていた。1945年の空襲で、この一帯は焼けてしまい、通りの様子が一変してしまったことがわかる。

また、リービヒ通りの西側に生理学研究所があった。それが後にこの通りの北東の場所へと移動した。

婦人科クリニックは、当時はリービヒ通りの北側にあったが、現在では、前述のように南側にある。

また、敷地の東南の場所に、精神科クリニックがある。ヨハンニス・アレーと現フィリップ・ローゼンタール通りの角に立っていた。現在の化学・鉱物学部と物理学・地球科学部の敷地である。これについては精神科のところで述べる（第2－3章）。

森鷗外のライプツィヒの関係者（ベルツ、ホフマン、ショイベ）

森鷗外のライプツィヒ時代の関係者

ベルツ



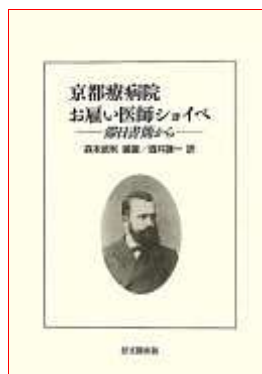
出典: wikipedia

ホフマン

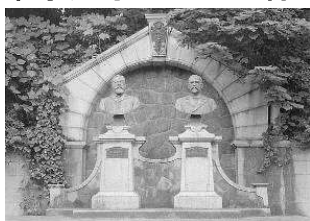


出典: ライプツィヒ大学

ショイベ



東京大学のベルツ像



鷗外をライプツィヒ大学のホフマンに紹介したのは、お雇い外国人として来日していたベルツである。

エルヴィン・フォン・ベルツ（1849～1913年）は、ライプツィヒ大学医学部内科教授のヴンダーリヒのもとで下で内科を学んだ。1875年に、ライプツィヒ大学病院に入院していた日本人留学生・相良元貞をたまたま治療することになり、日本に関心をいだくようになった。

ベルツの来日のきっかけになった相良元貞の悲劇

相良元貞（1841～1875年）は佐賀藩出身の医師で、東京医学校（のちの東京大学医学部）につとめ、ライプツィヒ大学医学部に留学していた。しかし、臨床実習中に解剖メスで自分の手指を傷つけ、そこから細菌が感染し肺病を患ってしまう。その主治医となったのが26歳の若きベルツである。相良元貞の病気は治らず、帰国して1875年には、35歳の若さで亡くなった。東京医学校でお雇い医師を捜していることを知った相良元貞は、帰る直前に、ベルツを推薦し、その推薦が実現して、1876年にベルツは来日したのである。来日した時は、すでに相良は亡くなっていた。

日本近代医学の父ベルツ

ベルツは、1876～1902年まで26年間東京医学校の教師をつとめ、医師の教育にあたった。東京大学の本郷キャンパスには、ベルツの像が建っている（右下の写真）。医学校退官後は、皇室の侍医を務めた。草津温泉を再評価したことで知られている。

ベルツは日本人と結婚し、1905年にドイツに夫婦で帰国した。長男の徳之助は11歳で両親とともに渡独した。彼は、父親の遺した『ベルツ日記』（真中下の写真）をのちに出版し、当時はドイツでもっとも有名な日系ドイツ人となったという。

ベルツの紹介でホフマンのもとへ

日本陸軍は、ドイツの衛生学を調査するにはどこがよいかについて、日本にいたベルツに相談をした。ベルツは、母校のライプツィヒ大学の衛生学研究所を勧めた。軍は、この研究所へ留学させる人材を捜し、ドイツ語に堪能で優秀な22歳の森鷗外を選んだ。ライプツィヒ大学はベルツの母校であるし、また同じヴンダーリヒ門下で来日経験もあるショイベとベルツは知り合いだったので、勧めやすかっただろう。こうして衛

生化学研究所のホフマン教授のもとで鵜外は仕事することになった。

ベルツは、1884年には一時ライプツィヒに帰っていたので、鵜外が留学した直後に、ライプツィヒ大学にやってきた（というよりは、ベルツの帰国に合わせて鵜外の留学時期が決まったというほうが正確だろう）。そして、ベルツはホフマンやショイベを訪ねて、鵜外を交えて会食した。この4人は、ライプツィヒ大学医学部における日本人脈と言ってよいだろう。その後、もう一度、ベルツは大学を訪れて4人と会食している。それだけベルツは鵜外のことを気にかけていたことになる。

ホフマンのもとで研究

鵜外を引き受けたのは、衛生学研究所の教授ホフマンである（中上の写真）。フランツ・ホフマン（Franz Hofmann 1843～1920）は、ミュンヘン生まれで、ミュンヘン大学で医学を学んだ。1872年に、ライプツィヒ大学の病理化学実験室の主任教授となり、1878年に衛生学研究所の主任教授となった。当時は、衛生学の講座を持っていたのはミュンヘン大学とライプツィヒ大学だけであった。1884年から何回か医学部長をつとめた。鵜外が行った時も、ホフマンは医学部長の要職にあった。

鵜外が初めてホフマンに会いに行ったのは1884年10月23日のことで、『独逸日記』には、簡単に書かれている。「ホフマンの許に行く。この人瘦長にして態度沈重なり」

この文面だとホフマンへの第一印象はあまりよくなかったようである。しかし、ホフマンが鵜外を自宅に招待したのは、計12回にも及ぶ。それだけホフマンが鵜外を大事にしていたということである。

鵜外は、この研究所では、化学分析の基礎を身につけた。オリジナルな化学研究ができるだけの研究技術はまだなかったようだ。文献研究はさかんにおこない、ライプツィヒではドイツ語による「日本兵食論」「日本家屋論」を執筆した。

同僚のショイベに指導を受けた

ホフマンとともに、医師のショイベ（右の本の表紙の写真）も鵜外の世話をした。ハインリッヒ・ショイベ（1853～1923年）は、鵜外より9歳年上である。ショイベは、後述のように、1877～81年に日本に滞在し、京都府の療病院（のちの京都府立医大）でお雇い外国人として医学教育に携わっていた。日本でのショイベについては、『京都療病院お雇い医師ショイベ：滞日書簡から』（森本武利編、思文閣出版）が出ている。

（右の写真）。来日中に、日本の女性と結婚して1女をもうけたが離婚したという。日本人の栄養状態の調査も行った。ショイベは、1882（明治14）年に契約期間が切れて帰国した。

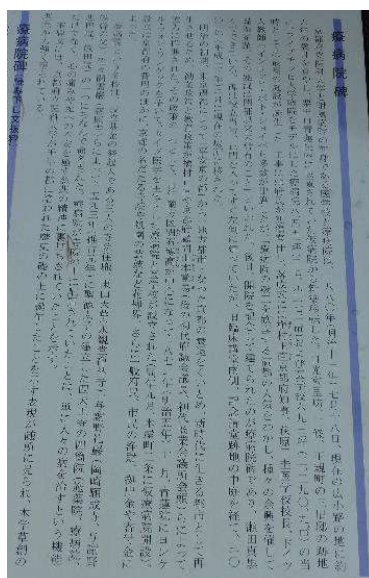
ショイベは、1881年に契約期間が切れて、ライプツィヒ大学に戻り、医学部の講師となり、ホフマンの指導も受けて研究していた。ショイベは、1885年には大学を去って、市・郡医として活躍した。

鵜外がライプツィヒに行った1884年は、ショイベがドイツに帰って3年後ということになる。鵜外は日本に通じているショイベを心強く思ったことだろう。ショイベは、内科教授のヴンダーリヒのもとで学んだので、ベルツと同門である。鵜外が『日本兵食論』を書くに当たって、ショイベに相談し、彼から多くの本を借りたりしている。

京都府立医科大学とライプツィヒ大学

京都府立医科大学とライプツィヒ大学

大学正門前の療病院碑



ショイベの日本での活躍は興味深い。

京都府立医科大学の正門には、療病院碑がたっているが、それによると、京都府立医科大学の前身となる

医学校と病院は、ライプツィヒ大学をモデルにして作られたという。

明治時代初期には、首都が東京に移り、京都はさびれていったため、活性化のために、京都府知事の榎村正直や京都府顧問の山本覚馬は、西洋式の病院と医学校を独自に作ろうとした。1872（明治5年）、ライプツィヒ大学から推薦されたヨンケル医師（A. F. Junker von Langegg）を雇い入れて、医学教育を始めた。わが国初の精神病院（仮癲狂院）を作ったのもヨンケルである。

ちなみに山本覚馬は、新島襄を支援して、同志社大学創設を果たした（「同志社」という名前をつけたのは覚馬といわれる）。覚馬は、後に新島襄の妻になる八重の兄である。NHKの大河ドラマ『八重の桜』では、覚馬を西島秀俊、八重を綾瀬はるか、襄をオダギリジョーが演じていた。覚馬は、初代府議会議長や初代商工会議所会頭をつとめた。京都の大学や教育を調べていると、あちこちで覚馬の名前を目にする。京都東側の若王子山に「同志社墓地」があり、そこに覚馬は新島襄や八重とともに眠っている。

ヨンケルが帰国した後は、オランダ人医師マンスフェルト（G. C. van Mansvert）、その後はライプツィヒ大学出身の医師ショイベ（H. B. Scheube）を雇った。1877年に、24歳のショイベは来日した。ショイベを紹介したのはベルツである。ベルツは、ライプツィヒ大学のヴンダーリッヒ門下で、1876年からお雇い外国人として東京医学校（のちの東京大学医学部）の教師をしていた。

1880（明治13年）には、医学校と療病院の建物が完成した。これが現在の府立医科大学と府立医科大学病院の前身である。療病院は、ライプツィヒ大学病院をモデルにして作られた当時としては最新式の施設であった。落成式にはショイベも参加した。この病院を作るためにショイベの指導があっただろう。

1881（明治14）年に契約期間が切れて、ショイベが帰国した医学校と療病院は、日本人スタッフが医学教育と診療をおこなった。

助手兼軍医ヴェルツラー

衛生学研究所で鷗外の面倒をみたのは、助手のヴェルツラーWürzlerだった。ヴェルツラーは、衛生学研究所助手とともに、ザクセン王国第八歩兵連隊一等軍医もつとめていた。鷗外は、ヴェルツラーに誘われ、ライプツィヒやドレスデンを見物したり、ドレスデンでの軍事演習に参加したりしている。鷗外の留学の目的は、研究というよりは、陸軍衛生制度の調査ということであるから、軍の仕事を知るには、軍医ヴェルツラーとの交際は大いに役に立った。

森鷗外とアウアーバッハス・ケラー

森鷗外とアウアーバッハス・ケラー

店内の絵



当時の鷗外



ファウスト

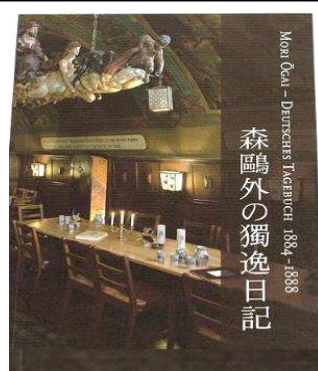


井上哲治郎



メフィストフェレス

晩年の鷗外



森鷗外の獨逸日記

アウアーバッハス・ケラー出版の本

出典：アウアーバッハス・ケラーのホームページ

鷗外は、ライプツィヒにあるアウアーバッハス・ケラーというレストランを訪れている。ライプツィヒにいた井上哲治郎（のちの東京大学哲学科教授。号は巽軒）とともにアウアーバッハス・ケラーに立ち寄ったのである。

1885年（明治18年）12月27日の『独逸日記』に鷗外は次のように書いており、とても興味深い。

夜井上とアウエルバハ窟Auerbachskellerに至る。ギョエテの「ファウスト」Faustを訳するに漢語体を以てせば如何杯と語りあひ巽軒は終に余に勧むるに此業を以てす。余も戯に之を諾す。

ここで鷗外が当時読んでいた『ファウスト』の話になり、鷗外は思いつきで「『ファウスト』を漢語体で訳したら面白い。どうだろうか？」と言ってみた。すると井上は、「それは面白い。ぜひ君が訳してくれ」と言った。そこで鷗外は「ぜひやろう」とたわむれに答えた、というのである。

一時の思いつきだったのだが、鷗外はその後本格的に翻訳に取り組み、ついに28年後の1913年に『ファウスト』の日本語訳を発表した。ただし、漢語体ではなかった。この鷗外訳は、後の訳にも大きな影響を与え、またそれ自身が読み継がれていくことになる。

つまり、アウアーバッハス・ケラーでの鷗外と井上の戯れ言は、文学史上の大事件であったことが、あとでわかるのである。

アウアーバッハス・ケラー内の鷗外と哲治郎の絵

アウアーバッハス・ケラーの中は、『ファウスト』に関する絵の博物館のようになっている。その中には、鷗外と井上を描いた3.16メートル×1.8メートルの壁画がある（左下の絵）。これは2009年に、ライプツィヒ派の画家ポーレンツが描いたものである。

絵の左から、メフィストフェレス、当時の軍服姿の鷗外、ファウスト博士、井上哲次郎、晩年の鷗外をあらわしている。ひとつの絵に2人の鷗外がいるのは不思議であるが、よく見ると、右端の鷗外のすぐ左には煙のようなものが上から下へと流れていて、晩年の鷗外が若き頃を回想しているシーンであることがわかる。だからファウストもメフィストフェレスも同じ画面にいる。鷗外の後ろのネクタイ姿の人は現代のこの店の人であり、現実と空想、過去と未来が混在したマンガのような絵である。『ファウスト』を訳した鷗外を讃えた絵だというのが、日本人観光客のウケを狙って描いたもののようにも思える。

このレストランは日本人観光客が多く、店内では森鷗外の日記の小冊子『森鷗外の独逸日記』も売っていたし（右の写真）、店のホームページにも日本語のページが作ってある。とはいえ、ドイツ語や英語のページにも、日本の作家森鷗外がここに来たことがきっかけで『ファウスト』を訳したという日独の交流を述べており、そのことを素直に誇っている。

1885 at that time Mori Ōgai (1862-1922) was working as a military hygienist in Germany. Together with his friend Inoue Sonken who studied philosophy in Heidelberg, he paid a visit to Auerbachs Keller. Later he wrote in his diary that they both had been considering whether it were possible to translate "Faust" into Japanese. And, indeed, in 1913 his translation of the "Faust" drama was published in Japan. Until today it is valid as authorized translation and has given a decisive impetus to the interest of Japanese people in German culture.

グルメとか買い物とか感覚を楽しませるだけの海外旅行よりは、こうした文化的な交流に触れる海外旅行にお金を使うほうがずっとましだろう。

近代日本哲学の父 井上 哲次郎

鷗外とアウアーバッハス・ケラーを訪ねた井上哲治郎（1856～1944年）はスケールの大きな学者である。東京開成学校から東京大学文学部に入学し、文学部の第1回卒業生となった。卒業後は、文部省御用掛となり、「東洋哲学史」を編纂した。1882年には、東京大学助教授となる。1882年には、外山正一、矢田部良吉と『新体詩抄』を刊行し、新体詩運動をおこした。

1884年に、28歳で、文部省からドイツ留学を命じられた。ベルリン大学を中心として、ハイデルベルク、ライプチヒ、ハレ、イエナ、フランクフルトなどのドイツの大学や、パリの大学にも行った。著名な教授の著書を読み、講義を聴き、自宅を訪ねて議論した。3年の予定を過ぎて期間延長を申し出たが、認められなかった。そこで、官費ではなく私費滞在に切り替えた。後半の3年間は、ベルリン大学の附属東洋語学校の講師をしながら費用を作った。帰国したのは1890年であり、留学は約7年にもわたった。

帰国後は、東京帝国大学文学部の哲学科の教授となった。官費を私費に切り替えるということは、退職することなので、帰国したらポストはなくなっているのが普通である（だから現代の留学生は、いくら留学を続けたくても、泣く泣く帰国するのである）。これだけ長いわがままが許され、帰国してそのまま元のポストに戻れたということは、よほど文部省から彼が高く評価されていたか、当時の大学制度がいかげんだったかのどちらかだろう。井上は日本人初の哲学の教授だという。のちに東京帝大文科大学学長（といっても文学部長のこと）となった。

井上と鷗外のアウアーバッハス・ケラー訪問

鷗外は、井上よりも6歳年下であるが、留学したのは同じ1884年であった。

鷗外は、1884年10月から1885年10月11日までライプツィヒに滞在し、10月11日にはドレスデンに移動した。一方の井上は、ベルリンやハイデルベルクを回っていたので、ライプツィヒに滞在したのは1885年9月5日から1886年4月3日までであった。前述のように、1885年10月からの1学期にヴントの講義を聞いたと思われる（意外にも、鷗外とヴントがわずかのところですれ違っていたのである）。

したがって、2人が同時にライプツィヒにいたのは1885年の9月5日から10月11日までの1月ほどにすぎず、この間に会うことはなかった。2人がアウアーバッハス・ケラーを訪ねた1885年12月には、鷗外はドレスデンからライプツィヒに遊びにきていた。正月の休めで、鷗外はライプツィヒのフォーゲル夫人宅に遊びに来ており、その時に、ライプツィヒにいた井上とともにアウアーバッハス・ケラーに立ち寄ったのである。

ちなみに、入口のファウスト像が作られたのは1913年のことなので、1886年に訪ねた鷗外と井上はこの像を見ていない。

井上哲次郎のヨーロッパ留学

井上のヨーロッパでの軌跡を下の表に示す。この表を見ると、ベルリン、ハイデルベルク、ライプツィヒとドイツ国内を半年～1年ごとに移動している。ドイツだけでなくパリの大学にもいき、さらに大学だけでなくヨーロッパ各地を旅行したり、学会に参加している。官費留学から私費留学に替えたことといい、このアクティビティといい、スケールの大きさを感じる。

そういえば鴎外も、ライプツィヒ、ドレスデン、ミュンヘン、ベルリンと大学間を移動している。明治・大正時代のヨーロッパ留学生は、あちこちの大学を渡り歩くのがスタイルだったようである。これに対して、現代の留学は、1カ所に滞在して、じっくり腰を据えて勉強・研究することが多く、あちこちの大学を渡り歩くことは少ない。

私の「ドイツ アカデミック街道を歩く」の発想はこうした明治・大正時代のヨーロッパ留学生たちである。

井上哲次郎のヨーロッパ留学の軌跡

1884年4月	ベルリン着。下宿開始。個人教授で哲学・語学を学ぶ。
1884年8月	ハイデルベルグに移動。ミュラー教授宅に下宿。10月大学入学。
1885年9月	ライプツィヒに移動。10月大学入学。
1886年4月	ベルリンに移動。4月大学入学。9月ウィーンの万国東洋学会に出席。
1887年3月	パリに移動。ソルボンヌ大学で受講。
1887年9月	ベルリンに移動。ベルリン大学付属東洋語学校講師となる。
1888年8月	ロンドンに滞在。パリ・ジュネーブ・ベルン・ルツェルン・ミュンヘン・ウィーン・ドレスデンを旅行。
1889年8月	ストックホルムとクリスチャニア（現オスロ）の万国東洋学会に出席。
1890年8月	ベルリンを出発し、帰国

出典：真田治子「井上哲次郎の欧州留学と『哲学字彙』第三版の多言語表記」埼玉学園大学紀要、第7号、2007年

2章 ミュンヘンの鷗外

<目次>

1章	ライプツィヒの鷗外
2章	ミュンヘンの鷗外
3章	ベルリンの鷗外
3-1	第1の下宿
3-2	第2の下宿
3-3	第3の下宿
3-4	コッホと鷗外

森鷗外とミュンヘン



ミュンヘン中央駅のあたりは、1886年に森鷗外が留学したところである。

この地図は、鷗外が関係した場所である。

1886年に3月にミュンヘンに来た鷗外が、最初に泊ったのはHotel Deutscher Kaiserである。中央駅のすぐ北にあたる。現在は、写真のような高層ビルになっている。

また、鷗外の下宿と勤務先は、中央駅から500メートルほど南に行ったところにある（後述）。

参考文献

『軍医森鷗外のドイツ留学』武智秀夫、思文閣出版、2014

「森鷗外のミュンヘン地誌」W・シャモニ、鷗外第28号41-52頁、1981年

『軍医鷗外森林太郎の生涯』浅井卓夫、教育出版センター、1986。

鷗外の下宿と衛生学研究所跡



鷗外の下宿

鷗外は、1886年3月11日に、ホイ通り16番地4階に下宿を決めた。現在のパウル＝ハイゼ通り35番地にあたる。この場所は、左の地図に示すように、中央駅から南に500メートルほど南に行ったところにある。パウル＝ハイゼ通りとペッテンコーファー通りの交差点のあたりである。

右の地図に示すように、交差点から東北に2軒目の建物の4階である。

下の写真では、黒い屋根の建物のあたりである。ミュンヘンは大戦中に空襲を受けたので、昔の建物は残っていない。

衛生学研究所

鷗外が通った衛生学研究所は、パウル＝ハイゼ通りをはさんで、西向かいにある。パウル＝ハイゼ通りとペッテンコーファー通りの交差点の北西の角である。今は衛生学研究所はなく、企業のビルになっている。

鷗外の下宿から見たバヴァリア女神像

バヴァリア女神像



出典Wikipedia



出典: Bingmap



鷗外の下宿からは、有名なバヴァリア女神像が見えた。1886年（明治19年）3月17日の『独逸日記』には次のように書いている。

十七日。早起。仕女窓を開き雀を飼ふ。余偶然戶外を望めば、晴日テレジア牧Theresienwiese の緑を照し、拜焉神女 Bavaria の像半空に屹立す。・・・余初め此家を僦す。曾て此奇観あるを慮らず。自ら迂濶を笑ふなり

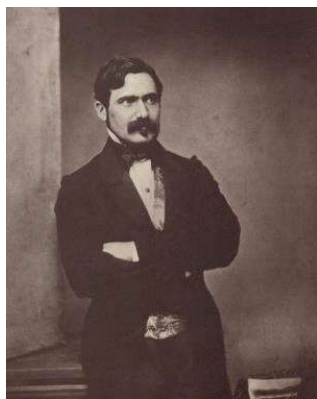
つまり、「朝窓を開けたら、テレジアの草原の向こうにバヴァリア女神像がたっているのが見えた。ここに下宿して1週間もたつのに、こんな面白い景観が見えるとは知らなかった。うかつだった」というのである。

鷗外が見たバヴァリア女神像は、1850年に完成した18メートルもある巨大なものである。ルートヴィヒ1世が作らせたもので、ギリシャのアテネのアクロポリス神殿にあるような像を作らせたのである。しかし、この像が完成する2年前の1848年にルートヴィヒ1世は退位していた。この像は今でも見ることができる。

テレジアの草原（テレージエンヴィーゼ）は、写真に示すように、広大な草地で、毎年9月に開かれるビール祭り（オクトーバーフェス）の会場となる。

鷗外を指導した研究者

マックス・ペッテンコーファー



鷗外の孫
眞章(マックス)氏



レーマン



ペッテンコーファー教授の波乱の人生

鷗外は、衛生学研究所で、教授ペッテンコーファーのもとで1年間研究した。

マックス・フォン・ペッテンコーファー (Max Josef von Pettenkofer, 1818~1901年) は、波乱に富んだ人生を生きた人であった。貧しい家に生まれて、身を立てるために薬剤師となった。その後、医学も勉強し、医学者として多くの業績をあげた。ミュンヘン大学は、彼のために、ドイツ初となる衛生学講座を作り、その初代教授として迎えた。そして、「近代衛生学の父」とか「実験衛生学の父」と呼ばれる有名な衛生学者となった。バイエルンを代表する大科学者とたたえられた。前述のように、鷗外の下宿の南側の十通りは、彼をたたえてペッテンコーファー通りと命名された(鷗外の頃はFinding通りと呼ばれていた)。

ところが、コッホが細菌学を打ち立て一世を風靡すると、ペッテンコーファーの衛生学は時代遅れのように見られ始めた。コッホはコレラ菌を発見すると、ペッテンコーファーはこの細菌はコレラの原因ではないと主張し、みずからコレラ菌を飲んで発病しないことを証明しようとした。結果的に彼はコレラを発病しなかったが、社会はコッホを支持するようになった。ペッテンコーファーは、晩年はうつ病となつてしまい、ピストル自殺をとげた。

鷗外はペッテンコーファー教授を敬愛した。最初の孫には、彼の名前をとって森眞章(マックス)と名づけた。しかし、鷗外は、ミュンヘンの後、ベルリンに行き、そこでコッホのもとで研究をした。陸軍からそう命令されてきたのだが、結果的には、コッホとペッテンコーファーの論争において、鷗外は二股をかけたことになる。

ビールの利尿作用の研究

鷗外は、ミュンヘンの衛生学研究所で「ビールの利尿作用」について研究をした。

参考文献：『軍医森鷗外のドイツ留学』武智秀夫、思文閣出版、2014

『軍医鷗外森林太郎の生涯』浅井卓夫、教育出版センター、1986.

ミュンヘン人はとにかくビールを飲む。鷗外はドイツ人のアルコールの強さに驚いていた。例えば、彼がライプツィヒにいた1885年6月に同僚の送別会で、ドイツ人の同僚はひとり25杯のビールを飲んだと日記に書いている。25杯とは12.5リットルである。鷗外は3杯しか飲めず、ドイツ人にからかわれたという。確かにドイツ人はビールを飲みすぎる。鷗外がミュンヘンでビールの生理学的作用についての研究したのも、こうした体験があったからかもしれない。

また、同じく、ミュンヘン人のビールの飲み過ぎを批判して、アルコールの害について研究したのが前述のクレペリンである。

鷗外の研究を指導したのはレーマンという講師だった。カール・レーマン (Karl Bernhard Lehmann, 1858~1940年) のちにヴュルツブルク大学の教授となった。日本人も何人かヴュルツブルク大学で指導を受けた。

鷗外のミュンヘン時代の日本人

横山又次郎

森林太郎
(鷗外)

岩佐 新

濱田玄達



加藤照麿

原田直次郎

丹波敬三

参考文献『軍医森鷗外のドイツ留学』武智秀夫、思文閣出版

鷗外が留学した当時、ミュンヘンに何人かの留学生在いた。

この写真は、丹波敬三がミュンヘンに来たときの記念に、撮ったものらしい。明治19年にヨーロッパの一都市にこれだけ多くの日本人留学生在いたことに驚かされる。

岩佐新は医学者であり、横山又次郎は地質学者で後に東京大学教授。濱田玄達も医学者で後に東京大学教授となった。

原田直次郎と鷗外

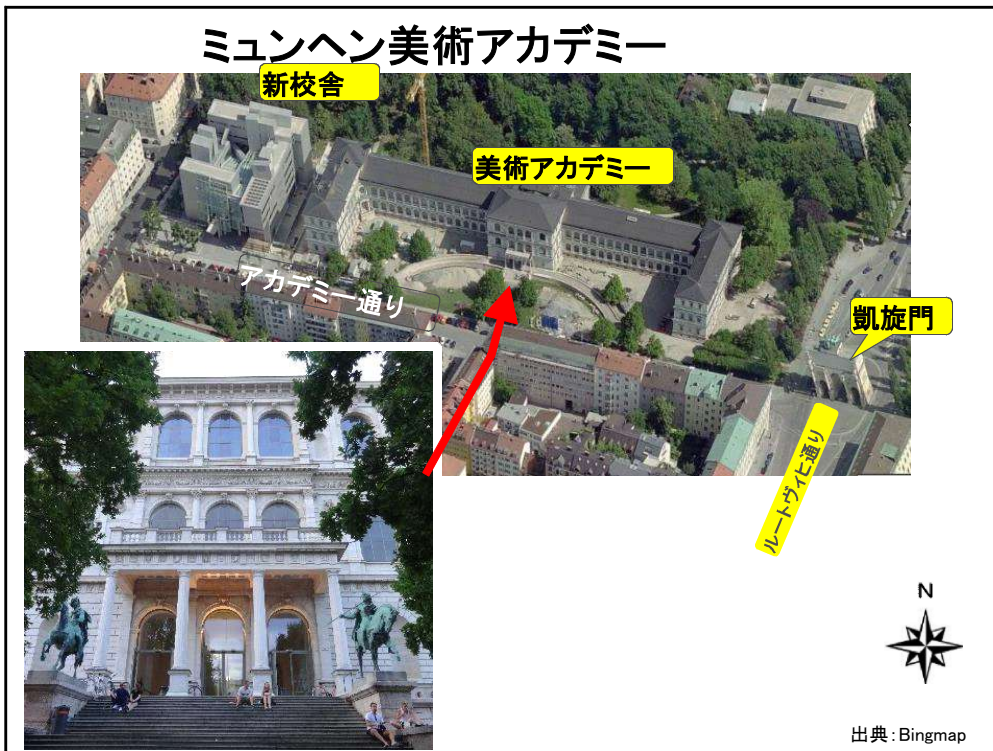
この写真には、原田直次郎も写っている。ミュンヘンで、鷗外は原田直次郎と知り合った。

原田と愛人のマリイの話を聞いて、鷗外は『うたかたの記』を構想した。『うたかたの記』のマリーモデルは、原田の愛人マリイという。

ルードヴィヒ2世と鷗外

『うたかたの記』は、バイエルン王ルードヴィヒ2世の死の謎解きをしたミステリー小説である。時間も空間も飛び越えた伝奇小説といってもよく、ぶっ飛んだ小説である。当時の人々はあきれたかもしれない。

ルードヴィヒ2世は、狂王、夢想王、メルヘン王などと呼ばれる。ノイシュバンシュタイン城など、ミュンヘンの周辺にたくさんの名城を作った浪費家でもある。彼は、国王を退位させられた直後、侍医の精神科医グッデンとともに水死体で見つかった。事故死とされているが、死の経緯は不明である。作家なら誰しも興味を引かれ、多くの小説（久生十蘭『泡沫の記』など）や映画（ヴィスコンティ『ルートヴィヒ／神々の黄昏』など）によく取り上げられる。鷗外もそうした誘惑に勝てなかったのだろう。この謎解きはあまり良いものとは思えない。



ミュンヘン大学の北側に、アカデミー通りがある。凱旋門から西に延びる道である。

この凱旋門は、1814年のバイエルン解放戦争での勝利を記念して、ルードヴィヒ1世が作らせたもので、1852年に完成した。門の上には、バヴァリア女神像が立っていて、ライオンが引く車に乗っている。この像は、後述のように、森鷗外の『うたかたの記』の冒頭に紹介されている。

アカデミー通りを西に歩くと、ミュンヘン美術アカデミー (Akademie der Bildenden Künste München) の壮大な建物が見えてくる。ミュンヘン美術院と訳されることもある。

設立されたのは、1770年頃に絵画学校として作られた。1808年にバイエルン国王のマクシミリアン1世によって、王立美術アカデミーへと格上げされた。マクシミリアン1世は、ミュンヘン大学でも中興の祖であった。1850年～1918年までカウルバッハとピロティが校長をつとめ、ミュンヘン派という画風を作り出し、ヨーロッパ中に知られた。1946年に芸術工芸学校と絵画学校がアカデミーに統合された。美術大学でもあり、多くの学生が学んでいる。

アカデミーの建物は、1886年に完成したルネサンス・リバイバル様式の建物である。前に騎馬像が立っていて印象的である。西側には2005年に建てられた新しいビルがある。

森鷗外の『うたかたの記』の舞台

このミュンヘン美術アカデミーは、森鷗外の『うたかたの記』（1890年、明治23年発表）の舞台として有名である。

その冒頭は次のようである。

幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく突立ちたる、女神バヴァリアの像は、先王ルウドキヒ第一世がこの凱旋門に据ゑさせしなりといふ。その下よりルウドキヒ町を左に折れたる処に、トリエント産の大理石にて築きおこしたるおほいへあり。これバヴァリアの首府に名高き見ものなる美術学校なり。校長ピロッチイが名は、をちこちに鳴りひびきて、独逸の国々はいふもさらなり、新希臘、伊太利、デンマークなどよりも、ここに来りつどへる彫工、画工数を知らず。日課を畢へて後は、学校の向ひなる、「カフフェエ・ミネルワ」といふ店に入りて、珈琲のみ、酒くみかはしなどして、おもひおもひの戯す。こよひも瓦斯燈の光、半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさざめく声聞ゆるをり、かどにきかかりたる二人あり。

出典：森鷗外 うたかたの記 - 青空文庫 http://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/694_23250.html

この文章は古語なので難しいが、現代語訳しているサイトを見つけたので、引用する。

ライオンが引く車の上で、勢いよく立つバヴァリア女神像は、ルードヴィヒ一世がこの凱旋門に建てたもので、ここから下ってルードヴィヒの町を左に折れたところにトリエント産の大理石で築かれた荘厳な建物がある。ここはバイエルンにある有名な美術学校である。

校長のピロッチイの名は諸外国にも鳴り響き、ドイツだけではなく、ギリシャ、イタリア、デンマークなどからも彫刻家や画家をめざす学生が大勢集まっていた。

学生たちは授業が終わると学校の向かいにある「カフェ・ミネルバ」という店で、コーヒーや酒を飲み交

わしながらくつろいでいる。

今夜もガス灯のあかりが半分開いた窓に映り、そこから外にこぼれた笑い声が一段と大きくなったころ、店のかどまで来た二人づれがいた。

出典：鷗外作品(現代語訳) 『うたかたの記』 http://www15.plala.or.jp/joe2622cool/utakata_jo.htm

ここに出てくる「バイエルンにある有名な美術学校」こそがミュンヘン美術アカデミーである。

「ルードヴィヒ一世がこの凱旋門に建てた」「バヴァリア女神像」については、前述のとおりである。

「学校の向かいにある「カフェ・ミネルバ」という店」は、実在した(後述)。

最後に出てくる「2人づれ」とは、エキステルというドイツ人画学生と、巨勢という日本人画学生である。

『うたかたの記』は、巨勢と恋人マリーの悲劇であるが、ここに国王ルードヴィヒ2世が登場して、物語は、ルードヴィヒ2世の非業の死の謎を解く歴史ミステリーとして進んでいく。

基本は、狂王ルードヴィヒ2世(1845～1886年)が、1886年に水死した謎を解くという歴史ミステリーである。ルードヴィヒ2世は、恋をした女の娘を見て、近づこうとして水死したのだという謎解きである。

しかし、娘が日本人と知り合っ、湖に行き、そこでたまたまルードヴィヒ2世と出会う事件がおこり、王も娘も死んでしまうというストーリーである。国も民族も時空も超えた荒唐無稽のファンタジーである。こんなぶつとんだ話を鷗外が書いていたのはびっくり。

この巨勢のモデルとなったのが、画家の原田直次郎である。

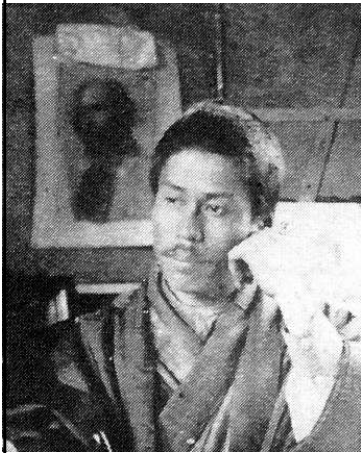
原田直次郎の波乱の生涯

Julius Exterによる原田像



出典YouTube

原田直次郎と森鷗外



出典Wikipedia



この原田直次郎という人は波乱の人生を送った人であった。

原田直次郎(1863～1899年)は、大阪開成学校、東京外国語学校でフランス語を学んだ。小さい頃から絵も学び、1884年、21歳で絵の勉強のために留学することにした。

留学先としてイタリアでもフランスでもなく、ドイツのミュンヘンを選んだのは、ドイツに留学した兄の豊吉の影響である。

原田豊吉(1861～1894年)はドイツで地質学を学び、ミュンヘン大学で古生物学を学んだ。彼はベルリン大学から博士号を取得し、東京帝国大学理科大学の地質学教授となった。日本人初の地質学教授で、ナウマンとの間に原田・ナウマン論争をおこしたことで知られるが、33歳で病死した。豊吉は、弟直次郎の留学先として、ミュンヘンを勧め、豊吉の友人だったミュンヘン芸術アカデミー教授だったガブリエル・マックスに弟の指導を頼んだ。豊吉がいた当時のミュンヘンは、後述のように、画家が5000人もいた芸術の都であり、ミュンヘン派の最盛期であった。その中心のミュンヘン芸術アカデミーの教授に弟を託したことは、まことに賢明な判断だったといえる。ところが、直次郎のミュンヘン生活をみると、兄の期待に応えたどうかは疑問である。

原田は、ミュンヘンでは、ミュンヘン美術アカデミーの聴講生となり、教授のマックスに師事し、ミュンヘン派のアカデミー一流の写実を身につけた。

原田は、アカデミーで同期の画学生ユリウス・エキステルと交友を結ぶ。このエキステルによって、象徴主義や世紀末趣味にも影響を受けた。エキステルは、その後1892年のミュンヘン分離派にも加わる前衛画家であった。

(なお、エキステルは「ある日本人の肖像」と題して、原田の等身大の肖像画を描いた。この絵は、キーム

湖の美術館にあり、それを発見したのは、ハイデルベルク大学教授のシャモニであり、その経過がYouTubeで公開されている。)

原田とマリイ

1886年夏、原田は、下宿先の1階にあるカフェ・ミネルヴァで働く女給のマリイと恋仲になった。ふたりは写生旅行に出かけた。のちにマリイは子も宿してしまう。ところが、原田は、1881年に結婚しており、日本には妻も子もいた。

この頃、原田は、ミュンヘンに留学していた森鷗外と知り合った。鷗外は、原田の話を聞いて、『うたかたの記』を構想した。『うたかたの記』に出てくるヒロインのマリーのモデルは、原田の愛人のマリイだという。

1886年には、原田は、妊婦のマリイを残して帰国してしまう。マリイも原田を見送った。

帰国後の原田

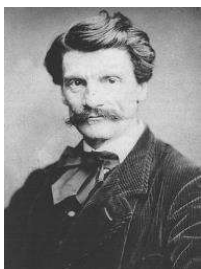
原田が帰国すると、日本は洋画排斥の嵐が吹いていた。岡倉天心とフェノロサは東京美術学校を作ったが、洋画科を置かないものであった。原田はフェノロサを批判した。その後、天心とフェノロサの支持母体で国粹主義的な龍池会に入会し、東京美術学校に洋画科を開設するよう運動した。

しかし、原田は病気となり、身体が不自由となった。そのうちに、洋画の画壇は黒田清輝らの外光派が注目をあびるようになり、原田の暗い画風は取り残されてしまった。そうした失意の中、1899年に原田は36歳で亡くなった。

原田直次郎と関係した人 ピロティ・マックス・エクステル

原田直次郎と関係した画家 ピロティ・マックス・エクステル

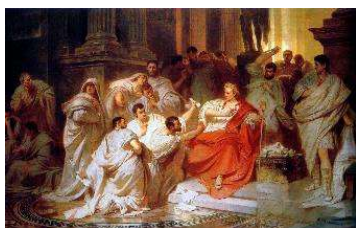
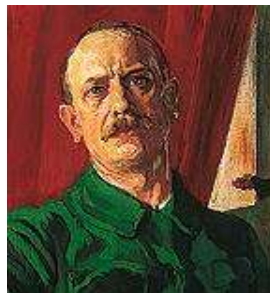
校長 Karl von Piloty



原田の師 Gabriel von Max



原田の友人 Julius Exter

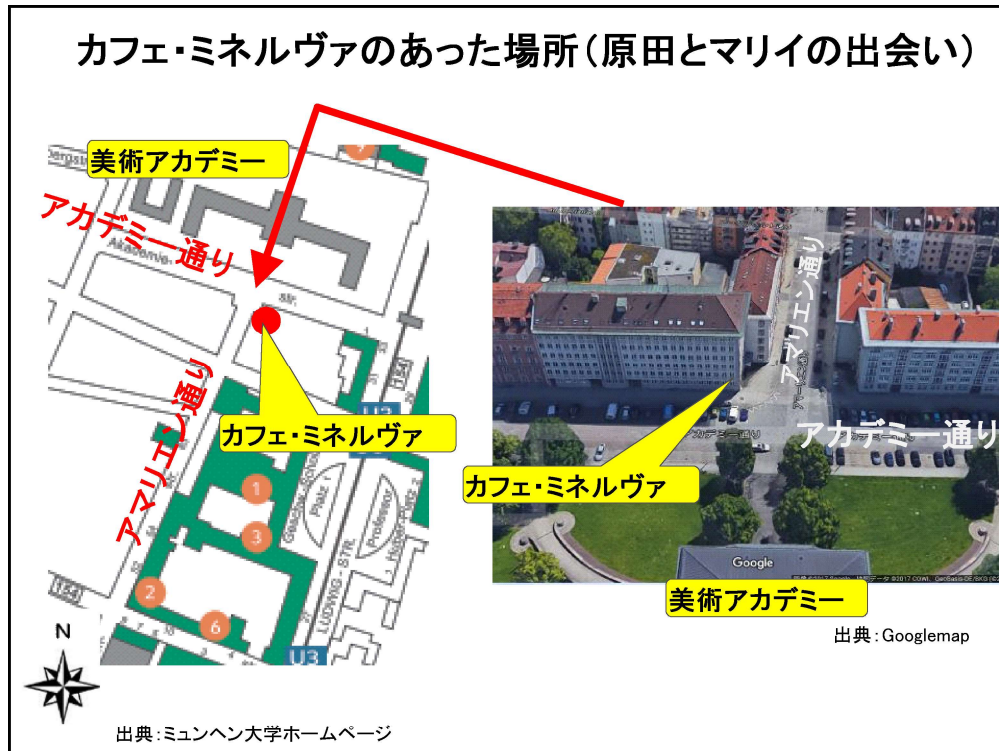


出典Wikipedia



原田直次郎がミュンヘン美術アカデミーに留学したとき、校長をつとめていたのがピロティである。また、原田を指導したのは、アカデミー教授のマックスだった。さらに、エクステルは原田の学生仲間であった。

カフェ・ミネルヴァのあった場所



『うたかたの記』に出てくる「カフェ・ミネルヴァ」は、アカデミー通りとアマリエン通りの東側の角にあった。今から130年前のことであるが、今でもその場所はわかる。

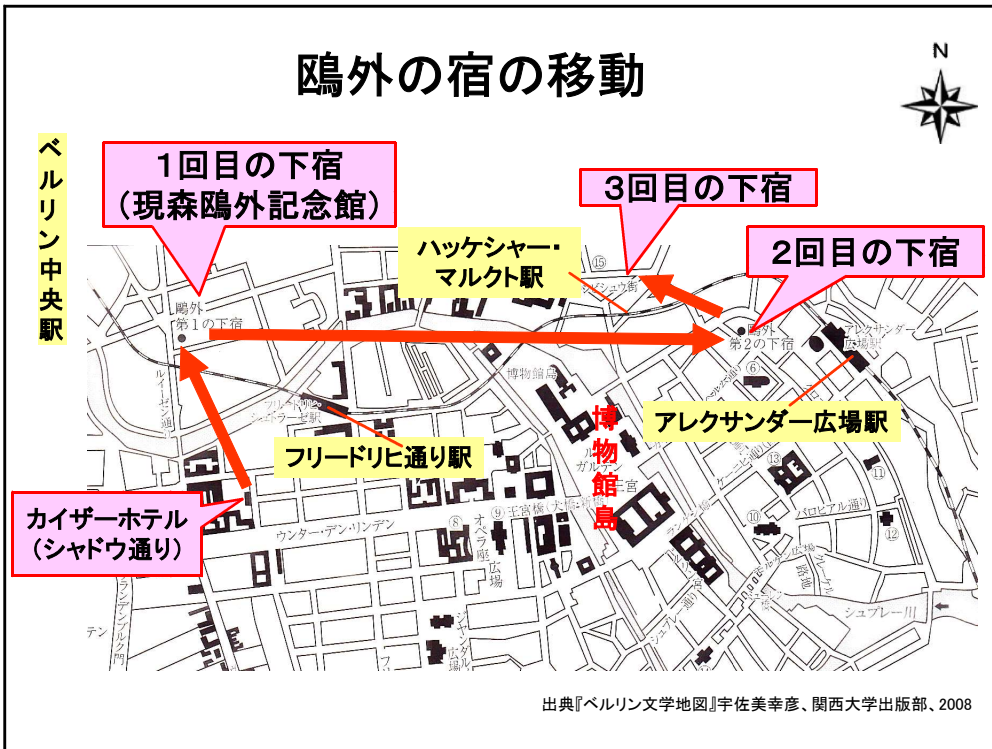
右側の写真は、アカデミーから南のアマリエン通りを見たものである。左側の角にミネルヴァがあった。現在は別の建物が建っている。

このカフェの2階に原田が下宿していた。原田は、妻子あるにもかかわらず、このカフェに勤めていたマリイに手をつけたのである。

3章 ベルリンの鷗外

<目次>

1章	ライプツィヒの鷗外
2章	ミュンヘンの鷗外
3章	ベルリンの鷗外
3-1	第1の下宿
3-2	第2の下宿
3-3	第3の下宿
3-4	コッホと鷗外



ベルリンでの橋本常綱のアドバイスから3年後、鷗外は、ライプツィヒ、ドレスデン、ミュンヘンをへて、1887年4月16日に、再びベルリンにやってきた。

はじめの2日間は、カイザーホテルに泊まった。『独逸日記』によると、「Schadowstrasseの旅店Hotel garni zum Deutschen Kaiser」である。シャドウ通りSchadowstrasseは、ウンター・デン・リンデンから北側に延びる通りである。カイザーホテルは今はなく、その場所は不明である。

<参考文献>

- 『鷗外全集』第三十五卷「獨逸日記」岩波書店
小堀圭一郎『若き日の森鷗外』東京大学出版会、1969.
武智秀夫『軍医森鷗外のドイツ留学』思文閣出版、2014
浅井卓夫『軍医鷗外森林太郎の生涯』教育出版センター、1986.
中井義幸『鷗外留学始末』岩波書店、1999.
美留町義雄『鷗外のベルリン』水声社、2010
植田敏郎『森鷗外の『独逸日記』：「鷗外文学」の淵』、1993
六草いちか『鷗外の恋 舞姫エリスの真実』講談社、2011.
六草いちか『それからのエリス いま明らかになる鷗外「舞姫」の面影』講談社、2013.
檀原みずす「森鷗外のベルリン第三の下宿」、鷗外、67、318-328. 2000.
檀原みずす「ベルリン随想」、鷗外、67、302-317. 2000.
森眞章「鷗外のベルリンの家」、鷗外、4、62-70. 1968.
篠原正瑛「鷗外とベルリンー『舞姫』『キタ・セクスアリス』『妄想』の跡を訪ねて」、鷗外、5、11-32, 1969.
篠原正瑛「鷗外とベルリン（続）」、鷗外、6、26-39, 1970.
篠原正瑛「鷗外とベルリン（三）」、鷗外、9、19-33, 1971.
篠原正瑛「鷗外とベルリン（四）ーふたたび第三の下宿の”謎”についてー」、鷗外、23、11-23, 1978.
宇佐美幸彦『ベルリン文学地図』関西大学出版部、2008
平田達治『ベルリン・歴史の旅』大阪大学出版会、2010
和田博文・西村将洋・和田桂子・真銅正宏・宮内淳子『言語都市・ベルリン1861 - 1945』藤原書店、2006.

鷗外の下宿の移動

2日後の4月18日には、下宿を探して移った。その後、鷗外は2回下宿を変えた。その概略をまとめておこう。以下では、これら3つの下宿の跡を詳しく追ってみよう。

●森鷗外のベルリンでの3つの下宿

場所	期間	期間	住所	最寄鉄道駅	勤務先	本稿の章
ホテル	1887年4月16日～17日	2泊	Schadowstrasseのカイザーホテル	フリードリヒ通り駅		—
第1の下宿	1887年4月18日～6月14日	2ヶ月	Marien Straße 32	フリードリヒ通り駅	衛生学研究所	3-1
第2の下宿	1887年6月14日～1888年3月31日	10ヶ月	Kloster Straße 97	アレクサンダー広場駅	衛生学研究所 →近衛師団	3-2
第3の下宿	1888年4月1日～7月5日	3ヶ月	Große Präsidenten Straße 10	ハッケシヤーマルクト駅	近衛師団	3-3

これら4つの場所は地図に示すとおりである。鉄道駅でいうと、フリードリヒ通り駅→アレクサンダー広場駅→ハッケシヤーマルクト駅と移動している。

3-1 第1の下宿

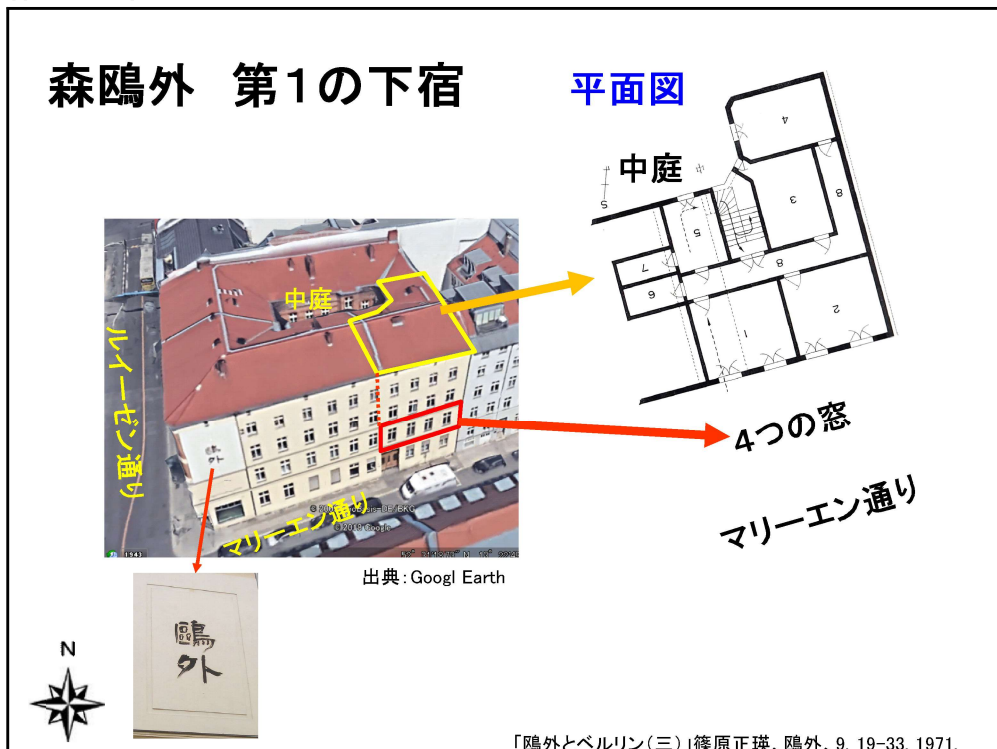
森鷗外記念館



ルイーゼン通りとマリエン通りの角に、森鷗外記念館がある。ビルの壁に、「鷗外」と漢字で大きく書かれてあるので、すぐわかる。鷗外の自筆の文字であろう。「鷗外」という漢字は、Sバーンの電車の窓からもよく見える。海外を旅行していて、日本の漢字を見ると、少し安心する。

ここは、鷗外が1887年に住んだ第1の下宿を当時のまま復元した博物館である。

森鷗外 第1の下宿



「鷗外とベルリン(三)」篠原正瑛、鷗外、9、19-33、1971.

鷗外は、1887年4月18日、ステルンという四十歳くらいの未亡人の家に下宿した。住所はマリエン通り32番地Marien Straße 32であった。この場所が現在の鷗外記念館となっている。

第1の下宿について調べたのが哲学者の篠原正瑛である。篠原(1971)は、1964年に、当時の東ベルリンにいて、戦争で破壊された東ベルリンを歩き、マリエン通り32番地のこの建物を「発見」したという(後述)。

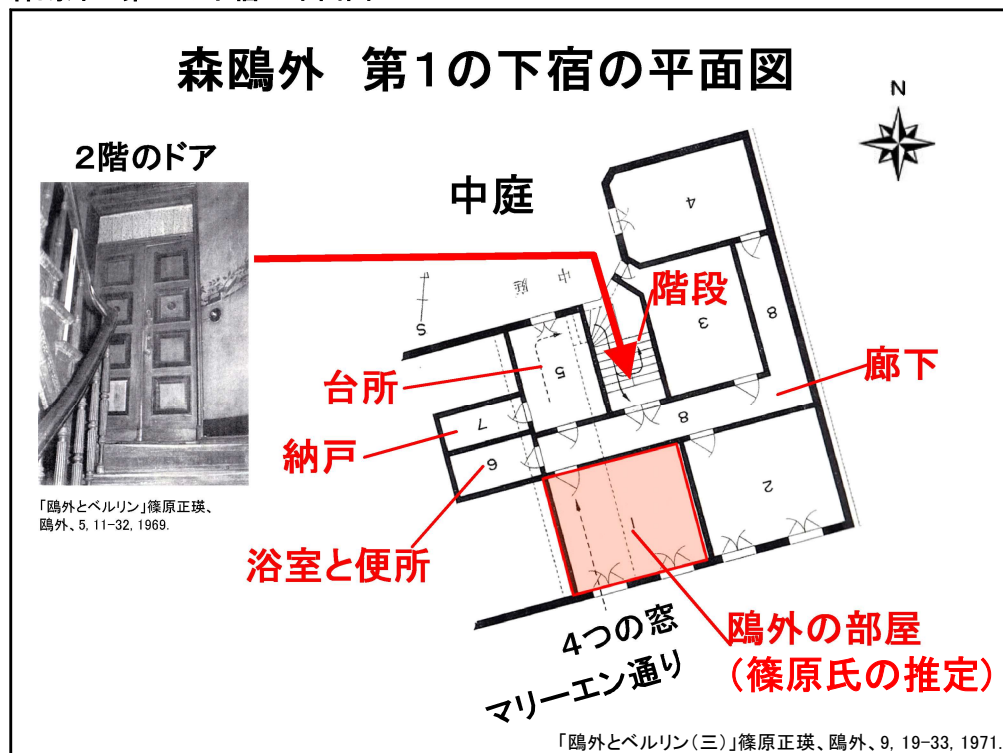
この建物のどこに鷗外は住んでいたのだろうか。左側の写真は、建物を斜め上からみたものだが、中庭のある口の字型をしていることがわかる。この建物の南東の角の2階がステルン家の所有だった。

右上の平面図は、篠原が、その後の所有者から聞き取って描いたものである。内部の間取りは、鷗外の当時とあまり変わっていないという。

ステルン家の場所は、マリーエン通りに面している。マリーエン通りの側の建物の2階には、窓がたくさん並んでいるが、右側の4つがステルン家のものである。

出典：篠原正瑛「鷗外とベルリン（三）」鷗外、9、19-33、1971

森鷗外 第1の下宿の平面図



この間取り図は、篠原（1971）が調べたものである。よくみてみよう。

階段を登ると、2階のドアがある。写真は、篠原（1969）に掲載されているものである。

入るとすぐに廊下になっている。左側に台所、納戸、浴室と便所がある。

マリーエン通りに面して2つの部屋がある。それぞれ2つずつの大きな窓がある。2つは同じ大きさで、5.5メートル×4.5メートルで、約15畳である。日本人から見ると、それほど狭い部屋ではない。

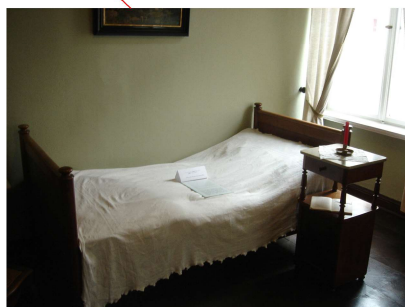
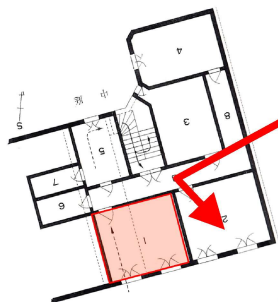
これらのうち、西側（図の左側）の部屋に鷗外が住んでいたか、あるいは両方の部屋を借りていたのではないかと、篠原は推測している。

2つの部屋の間には、扉があり、パーティなどの時は開放して、2室連続して使えるようになっていた。現在は、この部屋間の扉はなくなり、ふつうの壁になっている。篠原（1970）によると、そのドアの把手は、後の所有者から篠原が手に入れて、日本に送られたという。その写真も掲載されている。このドアの把手はどこにあるのだろうか？

出典：篠原正瑛「鷗外とベルリン（三）」鷗外、9、19-33、1971

写真出典：「鷗外とベルリン—『舞姫』『シタ・セクスアリス』『妄想』の跡を訪ねて」篠原正瑛、鷗外、5、11-32、1969.

森鷗外の部屋 （現在の森鷗外記念館の展示室）



現在の森鷗外記念館の展示室となっていて、鷗外の勉強部屋や寝室が再現されている。鷗外の部屋の資料は残っていないため、当時一般的だったと思われる家具などを置いたものである。

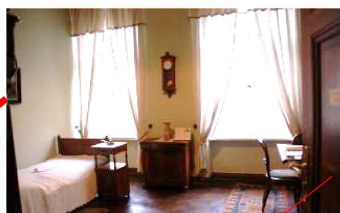
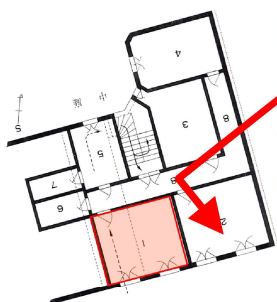
前述の2つの部屋のうち、東側の部屋に展示されている。

右上の写真のように、部屋に入ると正面に2つの大きな窓がある。光が十分に入る明るい部屋である。窓の間には掛け時計がある。

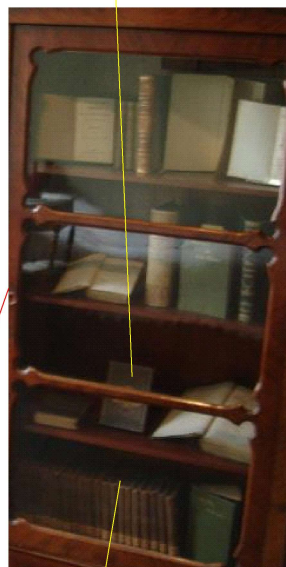
入って左側に、大きなベッドがある（右下の写真）。

ベッドの足下には、身体を洗った洗面器が置いてある（左下の写真）。ドイツでは洗面器で体を洗う習慣があり、洗淨強迫の傾向があった鷗外は、日本に帰ってきても、朝晩のこの習慣を続けたそうである。

森鷗外の部屋 （現在の森鷗外記念館の展示室）



『舞姫』のネタ本



24冊の短編集

鷗外のデスマスク



部屋の右側の写真である。

窓側に机がある。机の上にとろそくが2本たっている。

机の上方には、茶色の鷗外のデスマスクが飾られている。これは東京の鷗外記念本郷図書館（当時）に保存されているもののコピーである。

書棚には、鷗外がドイツ滞在中に読んだ450冊の本の一部が置かれている。

中段には、ドイツの作家ハックレンダーHackländerの『ヨーロッパ奴隷生活Europäisches Sklavenleben』（1854）という小説が飾ってある。この本は、貧しい踊り子の生活を描いた恋愛小説であり、鷗外の『舞姫』のネタ本とのことである。

下段には、24冊の本が並んでいるが、これは鷗外がライプチヒ時代に読んだ短編集である。

2ヶ月で下宿を変えたのは女性問題

しかし、鷗外は2ヶ月でこの下宿を引き払い、第2の下宿に移ってしまう。その理由は女性問題だという。

『独逸日記』によると、戸主のステルン夫人には、トルウデルという17歳の姪がいたが、彼女は軽佻浮薄で、遊び好きで、「家でじっとしているくらいなら、死んだほうがまし」とでも言いそうな娘であった。この姪は毎晩、肌襦袢ひとつになって、鷗外の寝ているベッドへやって来て、その縁に腰をかけて、話をする。悪意はないのだが、これが耐えられず、下宿を移ったのである。

この事実は、鷗外の小説『キタ・セクスアリス』にも使われている。

それから Karlstrasse の下宿屋を思い出す。家主の婆あさんの姪というのが、毎晩肌襦袢ひとつになって来て、金井君の寝ている寝台の縁に腰を掛けて、三十分ずつ話をする。「おばさんが起きて待っているから、只お話だけして来るのなら、構わないといひますの。好いでしょう。お嫌ではなくって」肌の温まりが衾を隔てて伝わって来る。金井君は貸借法の第何条かに依って、三箇月分の宿料を払って逃げると、毎晩夢に見ると書いた手紙がいつまでも来たのである。

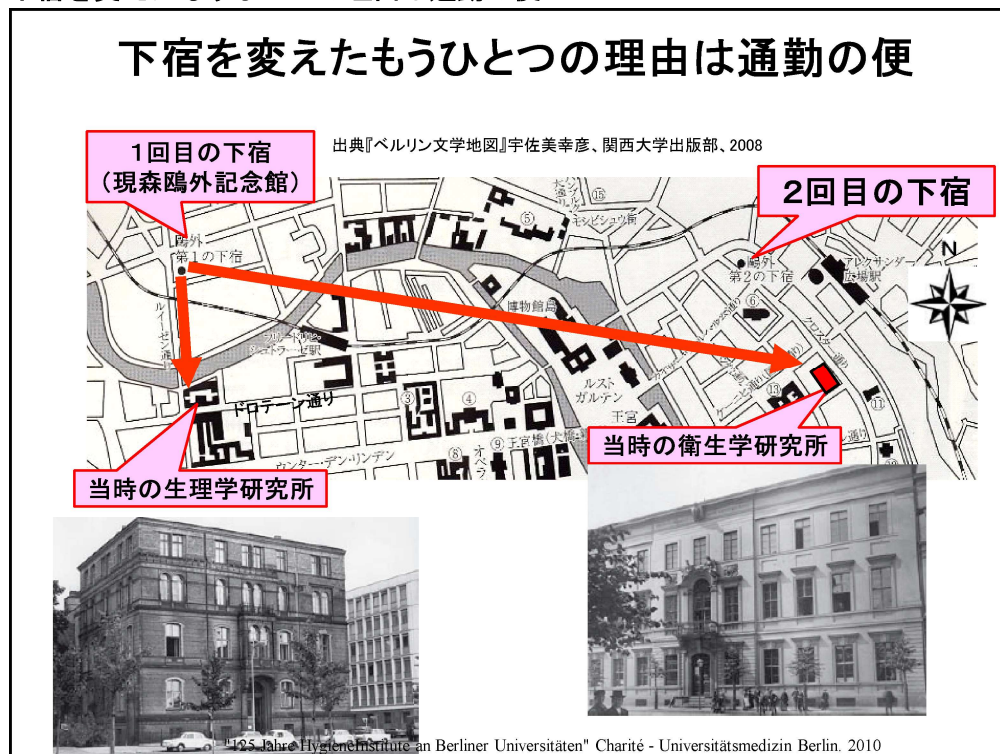
森鷗外『キタ・セクスアリス』青空文庫

このようなモテ自慢のエピソードはたくさんある。鷗外はドイツではよほど女性からモテたようだ。

Münchenの珈琲店を思い出す。日本人の群がいつも行っている処である。その常客に、やや無頼漢肌の土地の好男子の連れて来る、凄味掛かった別品がいる。日本人が皆その女を褒めちぎる。或晩その二人連がいるとき、金井君が便所に立った。跡から早足に便所に這入って来るものがある。たちまちやせた二本のひじが金井君のくびにからみ附く。金井君の唇は熱い接吻を覚える。金井君の手は名刺を一枚握らせられる。つむじかぜのように身をかえして去るのを見れば、例の凄味の女である。番地の附いている名刺に「十一時三十分」という鉛筆書きがある。金井君は自分の下等な物に関係しないのを臆病のように云う同国人に、つらあてをしようという気になる。そこで冒険にもこの Rendez-Vous に行く。腹の皮に妊娠した時のあとのある女であった。この女は舞踏に着て行く衣裳の質に入れてあるのを受けるために、こんな事をしたということが、跡から知れた。同国人は荒肝を抜かれた。金井君も随分悪い事の限をしたのである。

森鷗外『キタ・セクスアリス』青空文庫

下宿を変えたもうひとつの理由は通勤の便



下宿を移ったもうひとつの理由は、衛生学研究所への通勤の便である。

鷗外は、下宿した翌々日の4月20日に、北里柴三郎とともにコッホを訪ねて、衛生学研究所で研究することになった。しかし、前述のように、衛生学研究所（右下の写真）は、当時、クロスター通り32-36番地にあった。地図に示すように、鷗外の下宿からはさうとう離れている。直線距離にして約2キロメートルであ

る。当時は、鉄道のほかに鉄道馬車が走っており、鷗外も鉄道馬車を利用したかもしれないが、歩けば30分はかかる。

2ヶ月通ってみて、時間がかかるので、下宿の移動を決めたのだろう。第2の下宿は、クロスター通り97番地にあり、地図に示すように、衛生学研究所と同じ通りであり、直線距離にして300メートルほどである。これについては第2の下宿のところで詳しく述べる。

ちなみに、第1の下宿のあるルイーゼン通りを400メートル南に行くと、当時の生理学研究所（左下の写真）がある。住所はドロテーン通り96番地Dorotheenstraße 96である。前述のように、この生理学研究所の部屋で、1882年に、コッホは有名な「結核の病因」の講演をおこない、有名になった。この部屋は今でも残っている。

ベルリンにやってきたばかりの鷗外は、ルイーゼン通りはシャリテに近いので、コッホの仕事場もこのへんだと勘違いして、第1の下宿を決めたのかもしれない。あるいはベルリンにいた陸軍の関係者が鷗外の下宿を探してくれた時に、勘違いしたのかもしれない。しかし、実際に研究が始まってみると、研究所は別の場所クロスター通りにあり、歩けば30分はかかる。遠すぎたため、2ヶ月ほどで下宿を移ったのではなかろうか。ちなみに、コッホの衛生学研究所が、大学病院（シャリテ）からこんなに遠くに作られた背景には、ウィルヒョウの意志があると言われる（前述）。

鷗外の記念板に反映された東西冷戦



記念館のある建物のルイーゼン通り側には、鷗外の記念板がある（真ん中の写真）。

この記念板については、哲学者の篠原正瑛が解説している（篠原, 1971）。前述のように、1964年に、当時の東ベルリンにいた篠原は、戦争で破壊された東ベルリンを歩き、マリーエン通り32番地のこの建物を「発見」したという。1961年から作られたベルリンの壁によって、市は二分されたが、鷗外の下宿は東ベルリンに属しており、そもそも壁を越えて共産圏の東ベルリンに日本人が入ることは難しかったし、日本人が東ベルリンを歩き回ることも簡単にできなかった。

そして、1965年に、川端康成（日本ペンクラブ会長）、丹羽文雄（日本小説協会会長）、高見順（近代文学博物館館長）の3氏が、東ドイツ文化相、東ドイツ作家連盟、東ベルリン市理事会に対して、この記念板の作成を要請した。当時の東ドイツ文化相ハンス・ベンツィエンがこれを受け入れ、1966年に記念板が取り付けられた。

ところが、漢字で「森鷗外」と書かれたところは、「鷗森外」と間違えて刻まれていたという。右上の写真は、写真を合成して、当時の状態を再現してみたものである。

現地の日本人によってこれが指摘され、取り付けられてから2～3週間後に、取り外されてしまった。東ドイツは、すぐに新しいものを取り付けると言っていたが、しかし、新しい版が取り付けられたのは、何と22年後の1988年のことであった。こんなことになった背景には、政治があった。つまり、当時、自由化政策を進めた文化相ベンツィエンが失脚したため、西側の国の日本との文化交渉も座礁したとのことである。

1988年に貼られた版には、正しく「森鷗外」と刻まれている。この版が今に至る。

記念板を訳すと、以下ようになる。

日本近代文学の創始者のひとりで、作家で、そして批評家であり、またファウストや、レッシング、クライストおよびE・T・A・ホフマンの作品を最初に日本語に翻訳した人である森鷗外（1862－1922）は、1887年から1888年まで、ここに住んでいた。

(篠原, 1971) より引用

しかし、ここにも間違いがある。第1に、鷗外がこの建物に住んだのは、1887年の4月～6月のことから、「1887年から1888年まで、ここに住んでいた」というのは誤りである。

第2に、この版では、作家・批評家としての鷗外だけが書かれており、医師・医学研究者・科学者としての鷗外が無視されていると、篠原は指摘する。

こうしたいい加減さにも、当時の東西冷戦の政治が反映されているようだ。

文献：篠原正瑛「鷗外とベルリン（三）」鷗外、9、19-33、1971

哲学者の篠原正瑛と森鷗外

哲学者の篠原正瑛（しのはらせいえい；1912～2001年）は、上智大学文学部哲学科を出て、1936年フンボルト財団の奨学金によりドイツに留学し、ベルリン大学とイエナ大学哲学科で学んだ。そのままドイツでギムナジウムの教授を務めた。ドイツが降伏すると、連合軍によって抑留され、1949年帰国した。近代ドイツ思想史、特にナチ思想史を研究し、『ドイツにヒトラーがいたとき』など多くの本がある。上で述べたように、戦後ベルリンで鷗外の下宿を発見したり、鷗外の研究もおこなった。雑誌「鷗外」に、ベルリン時代の鷗外について、以下の4本のエッセイを発表している。

「鷗外とベルリンー『舞姫』『キタ・セクスアリス』『妄想』の跡を訪ねて」篠原正瑛、鷗外、5、11-32、1969.

「鷗外とベルリン（続）」篠原正瑛、鷗外、6、26-39、1970.

「鷗外とベルリン（三）」篠原正瑛、鷗外、9、19-33、1971.

「鷗外とベルリン（四）ーふたたび第三の下宿の”謎”についてー」篠原正瑛、鷗外、23、11-23、1978.

鷗外の孫による「第1の下宿」跡訪問記

森鷗外の孫の森眞章氏が、1967年に、鷗外の第1の下宿を訪ねた記録が雑誌「鷗外」に発表されている。

ちなみに、眞章氏は鷗外の初孫で、前述のように、眞章（マックス）という名前は、鷗外がミュンヘンで師事し敬愛した教授マックス・ペッテンコーファーからとったものである。

同じ医師である眞章氏は、篠原正瑛に紹介されて、この下宿跡に住んでいた医師のハインツェ一家を訪ねた。今でこそベルリンは自由に安全に歩けるし、観光コースの中に組み込まれている鷗外記念館であるが、当時は1961年にベルリンの壁ができたばかりで、東ベルリンを訪ねるのは難しかった。篠原をはじめとして、東ベルリンを知る人からは、「東ベルリンに行ったらどんな目に会うかわからない」と反対されたという。眞章氏は、チェックポイント・チャーリーの検問所を通して、東ベルリンに入り、歩いてマリーエン通りまで行ったのである。ひとつの冒険である。鷗外の記念板が見られると思ったが、前述のように、当時は、取り外されていた。運良くハインツェ一家に会えて、鷗外の部屋に案内されて、眞章氏は、「祖父の住んだ所を流れる空気を、確実に吸うことができた」。なかなか印象的な文章である。この場所が鷗外記念館としてオープンするのは、17年後の1984年のことである。

文献：「鷗外のベルリンの家」森眞章、鷗外、4、62-70、1968.

鷗外記念館を尋ねてみよう



第1の下宿のあった2階部分が、「森鷗外記念館」としてオープンしたのは、1984年である。鷗外がドイツに到着した1884年からちょうど100年を記念して設立された。ベルリン大学の日本学者ユルゲン・ベルント教授が中心となった。

1989年にはこの建物に、ベルリン大学日本学科が移り、1995年まで授業や研究がおこなわれた。1995年に、

日本学科は、ヨハニス通りへと移った。この場所については後述する。

この記念館は、ベルリン大学の日本文化研究センターの附属施設となっている。記念館には毎年3000人の見学者が訪れるという。

鴎外記念館の中に入る

鴎外記念館を訪ねてみよう。私は1回行ったことがあるが、2回目は、開館時間が過ぎていたため、入れなかった。開館時間が短いので、事前に調べておくことをおすすめする。

ルイーゼン通りにある入り口のベルを押すと、錠をあけてくれる。中に入り、2階に登っていくと、記念館の入り口がある。

日本人の職員が日本語でていねいに案内してくれる。

いくつかの部屋があり、前述のように、勉強部屋や寝室が再現されている。

コッホの説明パネルなどもある。鴎外は、コッホやウィルヒョウなど、当時のドイツ医学の頂点の学者と交流があった。また、当時は、北里柴三郎をはじめとして、多くの日本人がドイツに留学していた。当時の留学生の使命感を確認できる。

館には、映画『舞姫』のポスターが飾ってある。この映画は、1989年に、篠田正浩監督、郷ひろみ主演で映画化された。1989年はベルリンの壁が崩壊した年であるが、撮影は前年のことで、当時の東ベルリン市において、鴎外当時の町並みや人々の生活が再現された貴重な映像である。

図書室には膨大な本がある。図書室は誰でも利用できる。鴎外についての日本語の文献もそろっている。パソコンで「鴎外のすべて」を探索できる。鴎外以外の日本の作家の全集もそろっていた。日本の新聞も置いてあった。

日本の作品を独訳した冊子が飾ってある。これはベルリン・フンボルト大学の学生たちが翻訳したものという。

ベルリン大学の日本文化研究センターの施設

この記念館は、日独の文化交流の施設にもなっている。

常設の展示とともに、その時々の特展もある。私が行ったときは、コッホ来日100年展をしていた。前述のように、コッホは1908年に日本を旅行した。2008年は、コッホ来日100年に当たるので、この特展がおこなわれていた。中でも300人くらいの日本人がコッホといっしょに写した記念写真には驚いた。日本人はすべて正装して、荘厳な顔をしている。コッホ博士の来日が日本ではビッグイベントだったことがわかり、たいへん面白かった。

こんなに違う 夏目漱石と森鴎外の留学

こんなに違う 夏目漱石と森鴎外の留学

VS

イギリス 文学留学 1900～1903

ドイツ 医学留学 1884～1888

森鴎外と夏目漱石という2大文豪は、ほぼ同時期に、国費でヨーロッパの大都市に留学した。しかし、2人の留学生活は全く異なるものとなった。鴎外を際立たせるために、2人の留学を比べてみよう。

◆漱石と鷗外の留学はこんなに違う

	夏目漱石	森鷗外
留学期間	1900～1903年	1884～1888年
留学の目的	英語教育法研究	医学研究 陸軍衛生制度の調査
留学地	ロンドン（イギリス）	ライプツィヒ、ドレスデン、ミュンヘン、ベルリン（ドイツ）
年齢	33～36歳	22～26歳
家族	妻子を熊本に残し単身赴任	独身
留学中の態度	ロンドン大学をすぐに止めて、下宿に閉じこもり読書生活。	主要大学の衛生研究所で地道に医学を研究。ベルリンでは軍医の仕事。西洋医学と文化を吸収
女性関係	色恋沙汰はない	多くのエピソード。エリスとの恋愛
留学地への感想	「ロンドンで暮らした2年間は最も不愉快な2年間だった」	「自分がまだ二十代で、全く処女のやうな官能を以て、外界のあらゆる出来事に反応して、内には嘗て挫折したことの無い力を蓄へてゐた」

ロンドンで暮らした2年間は最も不愉快な2年間だった

1900年、33歳の夏目漱石は、第五高等学校教授のとき、文部省より英語教育法研究のため、留学を命じられた。妻子を日本に残し単身赴任でロンドンに留学した。漱石が「**ロンドンで暮らした2年間は最も不愉快な2年間だった**」と書いていることは有名である。漱石が留学した当時は、イギリスの最も盛えたビクトリア女王の時代だった。「七つの海に没することを知らない」大英帝国の時代であり、「世界の工場」として繁栄した時期だった。そうした世界の最先端の国へ漱石はやってきたわけである。当時の日本はまだ後進国であった。漱石は、自分のことを「**御殿場のウサギが、日本橋の真ん中に放り出されたやうな心持ち**」と表現している。漱石の生活はさんざんだった。はじめはロンドン大学でカー教授の講義を聴いていたが、英語がわからないので、すぐにやめてしまい、クレイグ先生の個人教授に週1回通うだけになった。馬車や汽車に乗ることも怖くてできなかったようで、2時間も歩いてクレイグ先生の自宅まで通った。

漱石がロンドン大学を途中でやめてしまったので、ロンドン大学が漱石を公認することが難しいのだろう。

読書だけの自閉生活

漱石は、給料を三等分し、それぞれ下宿代・生活費・本代に当てた。本を多く買うために、安い宿に住み、生活費を切りつめた。給料の3分の1を使ってコツコツと本を買い集め、1000冊近くを集めた。しかし、古本しか買えなかった。どこへも出かけずに下宿で本を読む毎日だった。2年間もこのような窮乏の自閉生活を続けたら、誰だっておかしくなるだろう。こうした生活は、漱石のメンタルヘルスを破壊し、漱石はパノニア状態になったようだ。「夏目発狂せり」という評判がたった。下宿のおばさんが見かねて、「自転車にでも乗って運動したら」とすすめたほどだった（当時、自転車はモダンなスポーツだった）。

帰国後、すぐに第一高等学校と東京帝国大学の講師となった。漱石は、留学中の文学との悪戦苦闘の中から、文学の本質について考え、帰国後、独創的な『文学論』をまとめ、さらには『我が輩は猫である』に始まる近代的作品群を生みだしていった。

野心に燃えた優等生としての留學生活

これに対して、鷗外のベルリンに対する態度は違う。中年の漱石より10歳以上も若い22歳の鷗外は、野心に燃えてドイツの地を踏む。次の表現は、漱石のロンドンへの態度と何と違っていることだろうか。

自分がまだ二十代で、全く処女のやうな官能を以て、外界のあらゆる出来事に反応して、内には嘗て挫折したことの無い力を蓄へてゐた時の事であつた。自分は伯林にゐた。

森鷗外『妄想』青空文庫

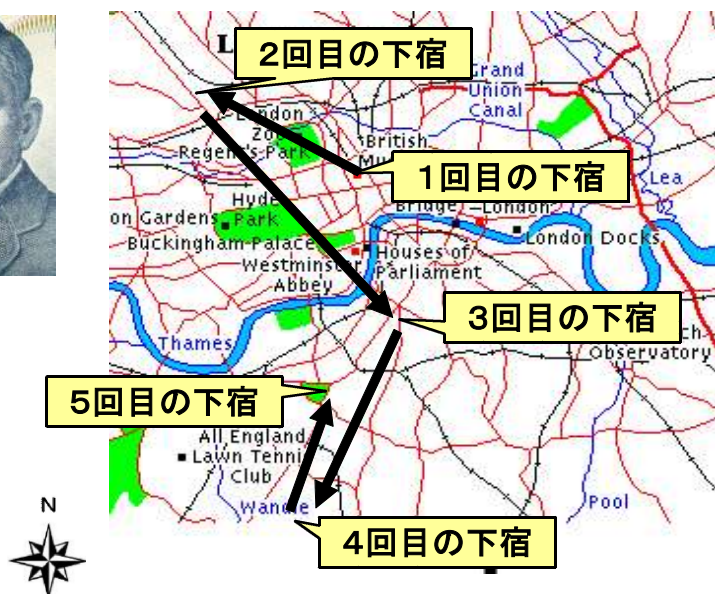
鷗外は、ドイツのおもだった大学を訪問し、当時の最先端の医学者と会い、医学や文化を吸収し、日本に伝えた。鷗外は、留学生としては優等生であった。

鷗外は、若くてハンサムで独身でお金もありドイツ語も堪能であり、ドイツの女性からモテた。しかし、調子に乗って、『舞姫』に見られるように、ドイツの女性にとっては屈辱となることもしてかしている。

一方の漱石は、中年で妻子持ちでお金がなく英会話も不得意だったためか、イギリスの女性からは見向きもされなかった。

留學生活の違いの根底には、パーソナリティの違いがあったのだろう。

夏目漱石のロンドンでの宿の移動



鴎外がベルリンで3カ所の下宿を移動したように、漱石もロンドンでは5カ所の下宿を移動した。

地図に示すように、ロンドンを南北に4回移動している。移動距離は、鴎外に比べて、漱石のほうがはるかに大きい。

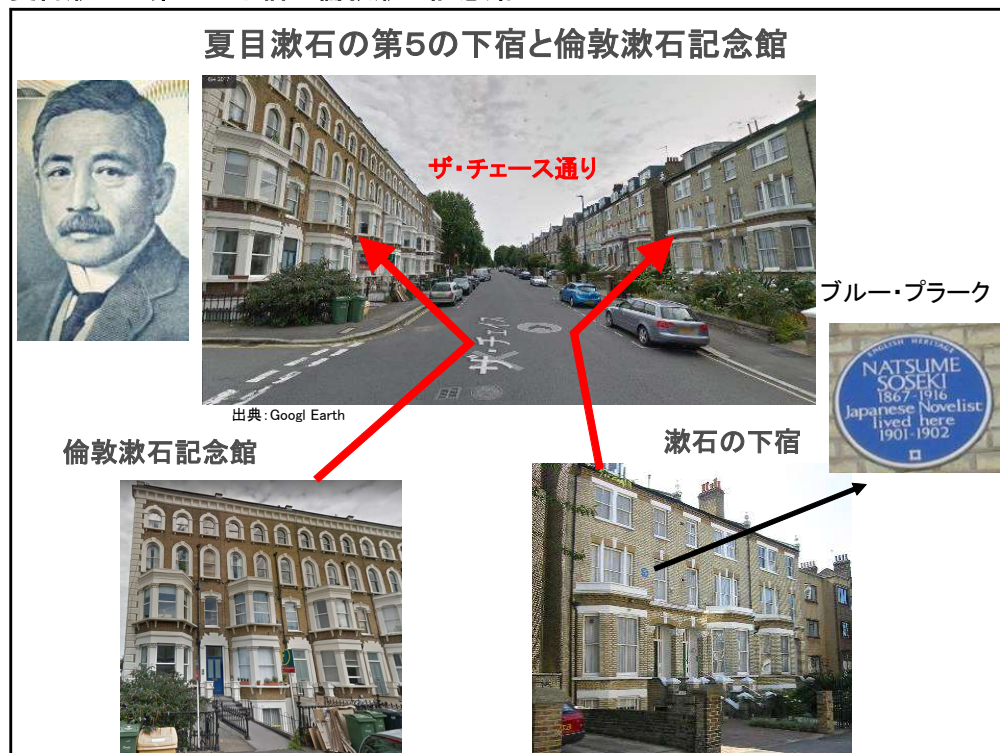
漱石はロンドンの郊外に住んだのに対し、鴎外はベルリンの中心部に住んだ。ロンドンにもベルリンにも、東京の山手線のような、鉄道の環状線がある。漱石の下宿はだいたい環状線の外にあるが、鴎外の下宿は環状線の内部にある。漱石がロンドンのはずれに住んだのに対し、鴎外はベルリンのど真ん中に住んでいたことがわかる。東京でたとえれば、漱石が住んだのは板橋区や足立区で、鴎外は千代田区や文京区である。

漱石は、ロンドン大学をやめてからは、とくに毎日通う場所もなく、下宿に閉じこもって読書に励んだので、安くて静かな家であれば、どこでもよかったのだろう。これに対して、鴎外は、研究所に毎日通って研究・仕事に励んだので、勤務先の近くに住み、勤務先が変わると下宿も移動した。

ふたりとも、引っ越しの費用も相当なものになっただろうが、当時の国費留学は経済的には恵まれていたようだ。

漱石の第5の下宿の家が、今でも残っている。

夏目漱石の第5の下宿と倫敦漱石記念館



漱石の第5の下宿跡は、ザ・チェイスという通りにある。

地下鉄ノーザン線のクラナム・コモン駅を降りて、15分ほど歩くと、漱石の下宿していた家がある（右下の写真）。

建物には、英国の史跡をあらわすブループラークが貼ってある（右の小さな写真）。そこには「**ナツメ・ソウセキ 1867-1916 日本の小説家がここに1901年から1902年まで暮らした**」と英語で書かれている。ブループラークが作られるというのは、かなり荣誉なことで、日本人としては唯一である。

漱石の孫の夏目房之助氏は、2002年に、この下宿を訪れて不思議な体験をした（『漱石の孫』新潮文庫）。

この漱石の下宿の向かい側の建物に、1983～2016年まで「倫敦漱石記念館」があった。写真に示すように、ザ・チェイス通りをはさんでちょうど向かい側になる。

参考：丹野義彦『ロンドンこころの臨床ツアー』星和書店

ロンドン留学について私は夏目漱石との不思議な因縁を感じる。私がロンドン大学の精神医学研究所に留学したのは2002年のことで、奇しくも、漱石の留学からちょうど100年後のことであった。私と漱石の留学には多くの共通点がある。①東京大学関係の教官が、②文部省からお金をもらって、③ロンドン大学に留学し、④家族と別れて単身で、⑤ロンドンで長期間の研究生生活を送ったという点である。漱石は、イギリスで文学の本質を究めたいという使命感を持っていた。この点も、臨床心理学に対する私の使命感と共通する。

私の研究生生活は、漱石とは正反対になった。私の留学は、漱石とは逆に「ロンドンで暮らした半年間は最も愉快的半年間だった」と言えるものだった。むしろ国外に近い。

帰国後の私は、漱石の『文学論』に匹敵する仕事をしたいという気概で仕事をした。拙著『臨床心理学と認知行動アプローチ：イギリスに学んだこと』（金剛出版）などはそのひとつである。

余談だが、2002年当時は、1000円札には漱石の肖像が使われていた。私がロンドン大学教授の家に呼ばれたときに、1000円札を持って行って、「この人は、ロンドンに留学していた有名な日本の作家だ」と説明したり、お子さんにおこずかいとしてあげたりして、小道具として重宝した。ところが、2002年の留学中に、1000円札から漱石が消えることになったという発表があり、残念だった。

記念館を訪ねたときに、恒松氏の『こちら倫敦漱石記念館』という著書を買って帰り、ロンドンのアパートで読んだ。恒松氏の半生を振り返ったもので、漱石の資料収集にかける執念が伝わり面白かった。この本は、後に中公文庫にも収録された。

閉じられた倫敦漱石記念館

享月
日
業
星
(夕刊)
2016年(平成28年)9月27日
火曜

漱石記念館長の恒松郁生さん(妻の芳子さん提供)

英・漱石記念館 閉館へ

今年没後100年を迎える文豪、夏目漱石の英国留学中の足跡を伝える「ロンドン・漱石記念館」が28日、32年の歴史に幕を下ろす。作家の司馬遼太郎氏や遠藤周作氏ら著名人も来館した。私財を投じて記念館を開き、運営してきた館長の恒松郁生さん(84)は「閉めるのは重いが、これが自分の責任」と名残惜しうに話した。

記念館は、漱石の英国での5カ所目の下宿先に向かいにある。館内は漱石が国費留学生として英国で過ごした1900年からの2年間をたどる展示物で埋め尽くされている。

恒松さんは現在、熊本で崇城大学の教授を務める。定年に合わせ来年9月に閉館する予定だったが、英国の欧州連合(EU)離脱で不動産市場の先行きが不透明視

なり1年早めた。

開館は水、土、日曜日の週3日。25日は閉館前最後の週末で、大勢のファンが漱石ゆかりの展示物に見入った。英国在住の大学講師、ボブ・ブライトさん(56)は来館中に漱石の作品を読んだ。「閉館を知って初めて来た。漱石がロンドンでどんな経験をしたのか興味があった」

恒松さんは英文学を学ぶため22歳で渡英。当時は漱石について「偉大な文豪」というイメージが強かった。しかし漱石の英国での暮らしを調べると、想像とは異なる海外生活に四苦八苦する姿が浮かび上がった。

「当時の自分と重ね合わせて共感した」と恒松さん。1983年に私費1200万円を投じて記念館の建物を購入。翌年、開館にこぎ着けた。

恒松さんが所蔵する漱石ゆかりの資料は約2千点。漱石が手帳に残したメモや当時購入した本を割り出したり、漱石が短編で取り上げた「カーライル博物館」の訪問時に記したという署名のコピーなどを探し出したりして展示している。

閉館後の資料の行き先は未定だが、恒松さんは「公的な機関に引き受けてほしい」と話している。

文豪の留学時代追った日本人運営

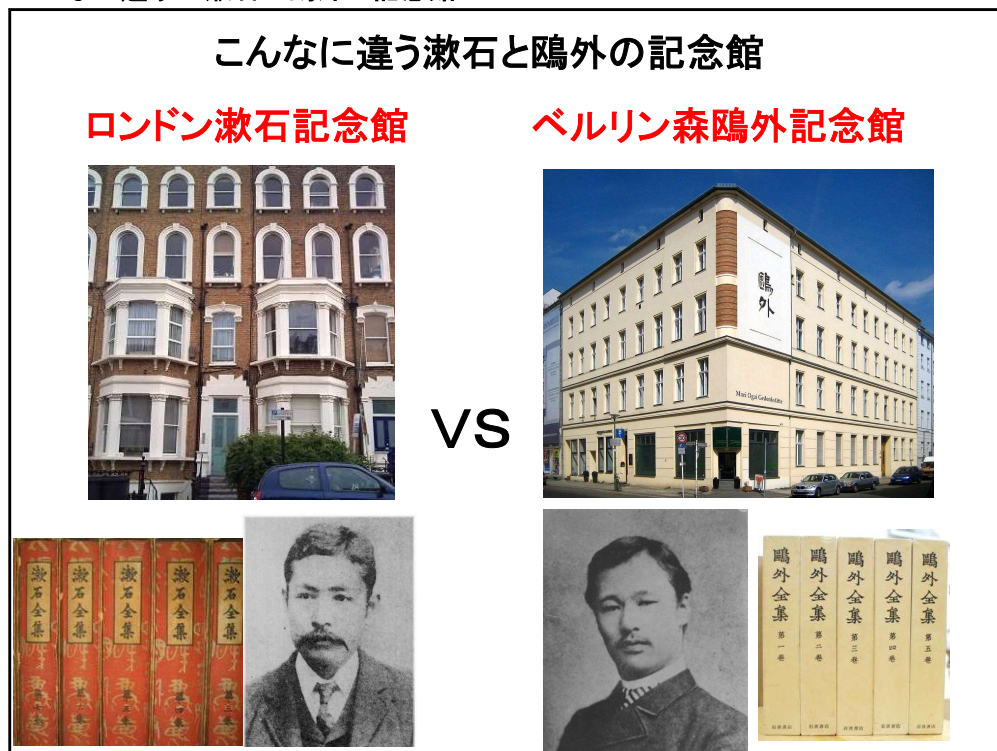
(ロンドン) 笹井耕太

2017年に閉館の予定であったが、2016年にイギリスがEUから離脱することが決まり、不動産市場の先行

きが不透明になったため、1年早めたのだという。EU離脱はこんなところにも暗い影を投げかけた。

こうした鷗外記念館の苦境は、鷗外記念館がベルリン大学や日本政府の援助で運営されているのと対照的である。鷗外も漱石も日本の2大文豪なのに、なぜこうした差が出てしまったのか、不思議である。恒松氏は、閉館後の資料は「公的な機関に引き受けてほしい」と述べているが、それが実現した気配はない。

こんなに違う 漱石と鷗外の記念館



漱石と鷗外の留学そのものが対照的であったのと同じくらい、2人の記念館もきわめて対照的である。倫敦漱石記念館と森鷗外記念館は全く違う。比較してみよう。

◆漱石と鷗外の記念館はこんなに違う

	倫敦漱石記念館	森鷗外記念館
設立	個人(恒松郁生氏が私財を投じて作った個人施設)	大学(ベルリン大学の公式施設)
資金	貧しい(個人の努力に負う)	豊富
場所	ロンドンのはずれ	ベルリンの中心部

ロンドンの漱石記念館は、恒松郁生氏が私財を投じて作った個人施設であり、職員は植松氏ひとりである。運営資金は恒松氏個人の努力に負っていて、維持するのはたいへんな苦労だったろう。2016年には力尽きたわけである。

これに対して、鷗外記念館は、ベルリン大学の公式施設である。前述のように、鷗外の第1の下宿跡に記念板を作るように要請したのは日本ペンクラブ・日本小説協会・近代文学館であり、相手は東ドイツ文化相・東ドイツ作家同盟・東ベルリン市であった。このように、はじめから国レベルで始まった動きであった。これが国立大学であるベルリン大学に引き継がれたのは当然である。公立なので、資金も豊富で、ベルリンの中心部にこのような立派な施設を持ち、専任の職員もいる。内部はとてもきれいだ。これは両方訪ねてみないとわからないことだが、両記念館の資金力を端的に表すのは、トイレの清潔度である(笑)。トイレに近いのは旅行中の私の悩みのタネなのだが、時には、逆に、発見をもたらす感受性にも変わることもある。

さらに、立地条件が違う。前述のように、東京で例えれば、漱石が住んだのは板橋区や足立区で、鷗外は千代田区や文京区である。交通の便が違うので、記念館への入場者数が違う。もし、漱石記念館が、漱石の第1の下宿跡(大英博物館やロンドン大学本部に近いガウアー通り)に作られていたら、もっと入場者があり、もっと長く続いたに違いない。

こうした違いを生んだ理由は、二人の留学のありかたにも基づいている。

第1は、大学との関係である。漱石はロンドン大学を途中でやめてしまったので、ロンドン大学は漱石を公認することが難しく、漱石記念館を受け継ぐのも難しいのかもしれない。一方、鷗外はベルリン大学のコッホのもとでまじめに研究したから、ベルリン大学から公認されるのは当然で、このような記念館が建てられたのだろう。

第2の理由は、生活態度である。漱石は、読書だけの自閉生活を送り、「ロンドンで暮らした2年間は最も不愉快な2年間だった」としてロンドンを嫌った。これに対し、鷗外は留学生としては優等生であり、医学や文化の日独交流に尽くした。鷗外は、ドイツ人の間では、「ゲーテの『ファウスト』を日本語に訳した

文学者」 として知られている。ドイツが鷗外を推すのも当然である。

2 人は何もかも対照的であり、2 人を比べると、鷗外の特徴が明らかになるのである。



アレクサンダー広場駅のすぐ近くに、森鷗外の第2下宿の跡がある。鷗外は、前述のように、1887年6月14日、第1の下宿を出て、第2の下宿に移った。

●森鷗外のベルリンでの3つの下宿

場所	期間	期間	住所	最寄鉄道駅	勤務先	本稿の章
第1の下宿	1887年4月18日～6月14日	2ヶ月	Marien Straße 32	フリードリヒ通り駅	衛生学研究所	3-1
第2の下宿	1887年6月14日～1888年3月31日	10ヶ月	Kloster Straße 97	アレクサンダー広場駅	衛生学研究所→近衛師団	3-2
第3の下宿	1888年4月1日～7月5日	3ヶ月	Große Präsidenten Straße 10	ハッケンマルクト駅	近衛師団	3-3

住所は、クロスター通り97番地 Kloster Straße 97 である。Klosterとは僧坊のことなので、鷗外は「僧坊街」と訳している。

1887年6月15日の「独逸日記」に、鷗外は次のように書いている。この場所は、ベルリン市の東の隅にあたり、いわゆる「古ベルリン」Alt-Berlinと呼ばれる地であり、「悪漢淫婦の巢窟」だと言う人もいるが、近所の人とつきあうわけでもないの、問題は無い。クロスター通りは、アスファルト敷きであり、車の音も少なく、夜は往来も少ないので、読書の妨げになることもない。何より、勤務先の衛生学研究所との距離も近く、歩いて5分にすぎないのはたいへんありがたい。

家主のケーディングは、この建物で料理店を開いていた。このため、朝昼晩の3食ともこの家で食べることができるのも便利である。

この家は新築であり、鷗外の部屋はとても広かった。訪ねてきた友人がこれを見て、驚かない者はいないくらいであったという。

鷗外は第2の下宿をとて気に入り、「これ以上何を求めようか」と書いているほどである。

鷗外は6月14日から、翌1888年3月31日まで、約10ヶ月をここで過ごした。3つの下宿の中で最も長く住んだ。

第2の下宿はどこにあったか

第2の下宿のあった建物はすでにないが、その場所を探してみた。

左側の地図は、1880年頃の鷗外の当時のものである。第2の下宿は、クロスター通りとカイザー・ヴィルヘルム通りの角の少し北側にある。クロスター通りの一本西側を通るのがノイエ・フリードリヒ通りであるが、この通りは、北へ行くと西側に大きくカーブする。クロスター通りは、北へ行くと、この曲がってきたノイエ・フリードリヒ通りに達する。その接点にも第2の下宿は近い。

右側の地図は、現在のものだが、昔とはずいぶん違っている。まず、クロスター通りとノイエ・フリードリヒ通りはなくなっている。後述のように、クロスター通りはずっと南の方には残っているが、このあたり

は通りがなくなっている。大戦後の都市計画で、このあたりは広場になったため、2本の道路が消えてしまったのである。

また、昔のカイザー・ヴィルヘルム通りは、今はカール・リープクネヒト通りと名前を変えている。この通りは、昔よりも幅が大きく広がった。

第2の下宿は、カール・リープクネヒト通りの脇にある。正確な位置はわからないが、ほぼこの道路の北側歩道あたりであろう。マリーエン教会の真北あたりである。

鷗外の第2の下宿の現在



Google Earthで調べると、右下の写真のように、第2の下宿跡は、カール・リープクネヒト通りの北側歩道に当たる。テレビ塔の下あたりである。

通りの北側には、巨大なショッピングモールが建っており、車道との間に広い歩道がある。そこには木が植えられており、下宿跡はちょうどその茂みのあたりである。

右上の写真は、マリーエン教会の側から、カール・リープクネヒト通りをはさんで、第2の下宿跡あたりを撮ったものである。マリーエン教会の東側をクロスター通りが走っていたので、だいたいその延長線上にあったはずである。

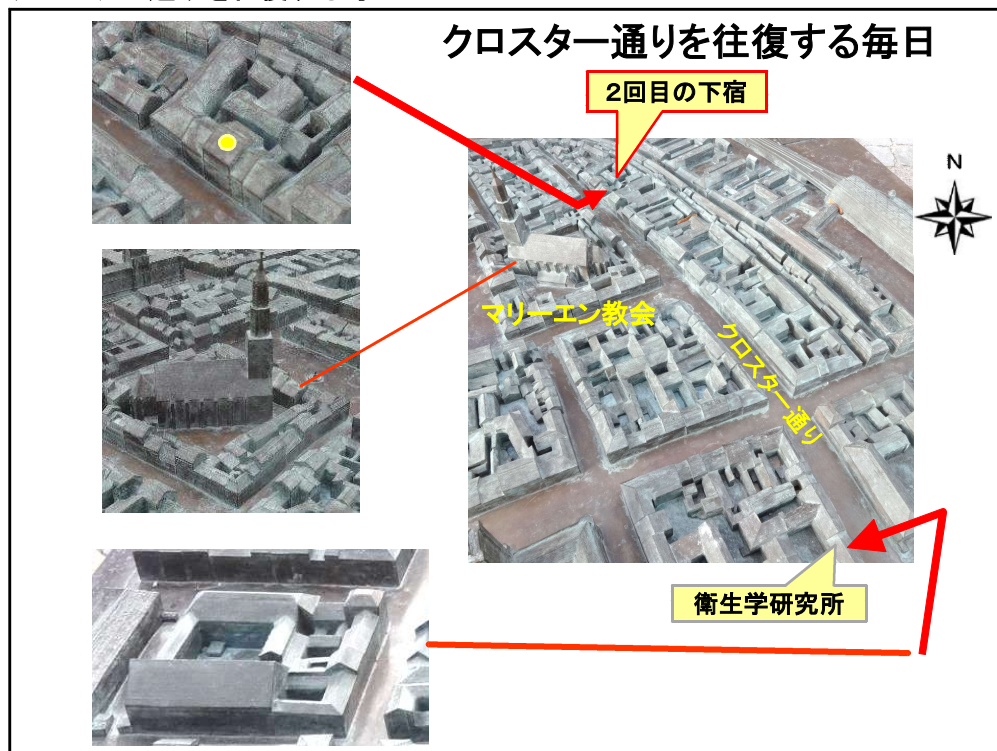
区画そのものが変わっているので、ここに家が建っていたことも信じられないほどである。部屋の間取りなども全くわからない。

第2の下宿と衛生学研究所



鷗外が通っていた衛生学研究所は、当時は、クロスター通りの32-36番地Kloster Straße 32-36 にあった（前述）。

研究所は、第2の下宿と同じクロスター通りにあり、直線距離にして300メートルほどである。1887年6月14日～1888年3月31日の10ヶ月間（一時期を除いては）、鷗外は、クロスター通りの下宿と研究所の間を歩いて往復する毎日であった。



この写真は、マリーエン教会の前の広場に置いてあった模型である。説明板によると、1880年頃の街を模型にしたもので、ちょうど鴎外がいた頃である。鴎外の下宿や、衛生学研究所の位置もよくわかる。面白いものを発見したものである。

この模型は、鴎外が目にした街の形が立体的に表現されている。クロスター通りは、意外に広い大通りであることがわかる。左側の写真は、鴎外の視線から、建物を拡大したものである。

鴎外の下宿は、通りに面している。左上の写真で、黄色い印がついている建物である。

左下の衛生学研究所もクロスター通りに面している。

左中のマリーエン教会はきわめて巨大であることもわかる。鴎外は、マリーエン教会を毎日眺めながら通勤したであろう。マリーエン教会は小説『舞姫』の舞台の候補であるから、通勤途中の風景が小説に取り込まれていったのかもしれない（後述）。

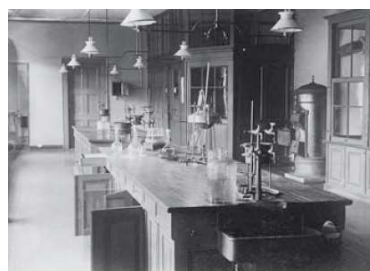
鴎外が通った衛生学研究所

鴎外が通った衛生学研究所

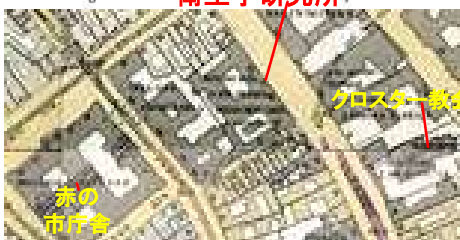
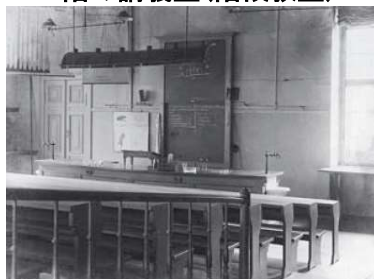
3階の細菌学・微生物学の実験室



外観



2階の講義室(階段教室)



"125 Jahre Hygieneinstitute an Berliner Universitäten" Charité - Universitätsmedizin Berlin, 2010

鴎外が通った衛生学研究所は、右上の写真のように、3階建ての立派な建物である。コッホが所長である。鴎外が来た1887年は、開所2年後であるから、まだ新しかっただろう。

衛生学研究所の125周年記念誌(2010)には、内部の写真がたくさん載っているが、これについては、コッホ

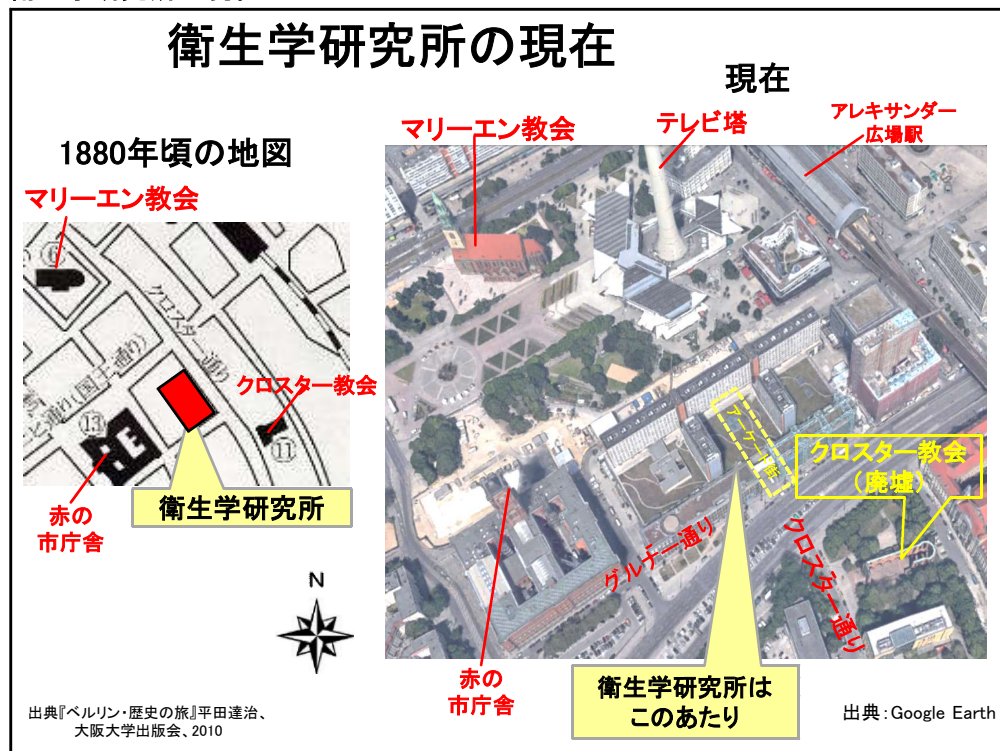
のところで十分紹介した。

文献：Hahn, J., Gaida, U. & Hulverscheidt, M. 125 Jahre HygieneInstitute an Berliner Universität en. 2010.

鷗外の仕事ぶりはどうだっただろう。小堀桂一郎『若き日の森鷗外』（1969）によると、研究所は平日 9 時から 5 時まで、土曜は 2 時まで開いていた。コッホの講義は週 3 日で、火・水・金曜の 16:00～17:00 で、土曜日には細菌学の実験指導があった。また 5 月 2 日から 27 日までコッホの弟子による講義もあり、鷗外はこれを聴いた。鷗外が第 2 の下宿に引っ越したのは、この間の 5 月 15 日のことであった。

5 月 31 日には、コッホから実験題目を授けられた。鷗外は 6 月～7 月中旬まで、1 ヶ月半ほど、個人用実験室でこつこつと研究していた。研究生には、聴講だけの研究生と、個人用実験室を使用する研究生の 2 種類があり、1 学期あたりの支払いは、前者は 60 マルク、後者は 100 マルクだったという。鷗外は後者の個人用実験室を使用する研究生であった。

しかし、7 月 15 日に軍医監の石黒忠直がベルリンにやってくると、鷗外は 10 月までその世話に追われ、実験を再開したのは 10 月中旬であった。彼は下水中のバクテリアについてのドイツ語論文を仕上げた。



左は鴎外がいた1880年頃の地図である。右側はこの地域の現在の写真である。

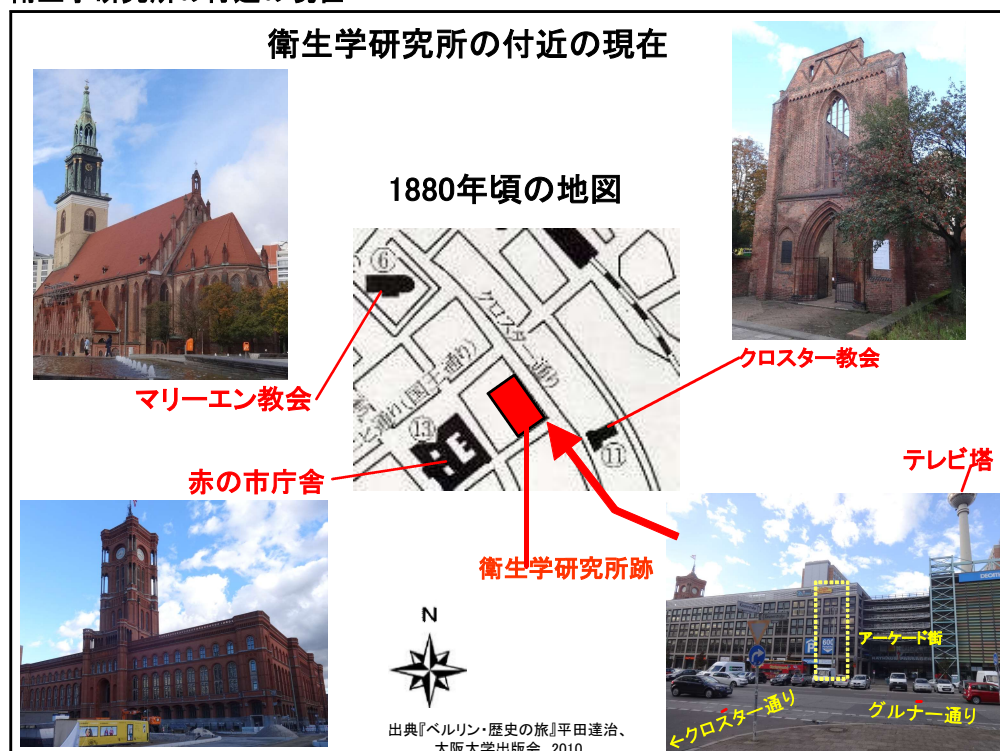
まず気がつくのは、クロスター通りが変わったということである。昔のクロスター通りは、右下から左上に伸びていたが、現在は、グルナー通りで途切れてしまっている。

昔の衛生研究所があった場所は、大きなショッピングモールでふさがっている。このあたりは、第二次世界大戦で破壊され都市計画で整備されたため、昔の面影をまったく留めていない。アレキサンダー広場駅やテレビ塔のすぐ近くである。

クロスター通りをはさんで、研究所のはす向かいにあったクロスター教会は残っているが、廃墟となっている。

クロスター通りのマリーエン教会と、グルナー通りの「赤の市庁舎」は、当時のまま残っている。

衛生学研究所の付近の現在



昔の衛生学研究所のあたりは、現在もいろいろな観光名所があるので、少し散歩してみよう。鴎外の小説『舞姫』を理解するためにも役立つ。

衛生学研究所（写真右下）

衛生学研究所の跡は、現在、大きなショッピングモールになっている。昔、クロスター通りが走っていたところは、「ラートハウス・パサーゲン」というアーケード街になっている。昔の面影をまったく留めていない。

写真に写っているテレビ塔は、東ベルリン時代の1969年に、東ドイツの力を誇示するためにたてられた。上に登ると展望台がある。高さ368メートルで、東ベルリン地区のどこからでも見えるランドマークとなっており、迷ってもこの塔が目印になる。

クロスター教会（写真右上）

現在も少し残っているクロスター通りと、グルナー通りの角に、クロスター教会（廃墟）がある。

教会の繊細な壁が保存されており、いい雰囲気である。グルナー通りは自動車がびゅんびゅん走っているのに、その隣りにこれほど静かな廃墟があるとは考えられないことである。ベルリンの隠れた名所と言える。中庭には青いパイプのオブジェがある。

クロスター通りを少し南に行くと、地下鉄U2線のクロスター駅がある。この駅の内部は、旧東ベルリンの乗り物の展示があり、乗り物博物館のようにになっている。

赤の市庁舎（写真右上）

グルナー通りの「赤の市庁舎」はとても目立つ。1869年に建てられたルネサンス様式の赤レンガの巨大な建物で、中央に塔がたっている。鷗外も見たはずである。空襲で破壊されたが、1956年に復元された。今ではベルリン市の市庁舎となっており、ベルリン市長はここで仕事している。

マリーエン教会（写真右上）

聖マリーエン教会St. Marienkirche は、巨大なゴシック様式の教会で、とても目立つ。自由に中に入ることができる。

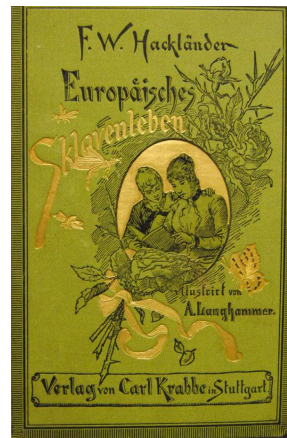
さて、われわれは小説『舞姫』の舞台に立っている。以前はこのマリーエン教会が、主人公と踊り子エリスが出会った場所のモデルとされてきたが、この仮説も、ここ数年で少し揺らいできた。

小説『舞姫』をめぐる

映画『舞姫』



ネタ本となった 『ヨーロッパ奴隷生活』



第2の下宿のあたりは、鴎外の『舞姫』の舞台になったことで知られる。この作品は、鴎外が帰国後の1890年に発表した小説である。

1989年に、篠田正浩監督、郷ひろみ主演で映画化された。1989年はベルリンの壁が崩壊した年であるが、撮影は前年のことで、当時の東ベルリン市において、鴎外当時の町並みや人々の生活が再現された貴重な映像である。

鴎外記念館の鴎外の書棚には、ドイツの作家ハックレンダーHackländerの『ヨーロッパ奴隷生活Europäisches Sklavenleben』（1854）という小説が飾ってある。この本は、貧しい踊り子の生活を描いた恋愛小説で、鴎外の『舞姫』のネタ本になったとのことである。

『舞姫』は高校時代に読まれ、古い文体で読みにくく、苦勞しながら読んだ記憶がある。今では現代語訳がネットで公開されている。

ストーリーを単純化すると次のようになる。明治政府のエリートとして留学した主人公太田豊太郎が、ドイツの貧しい女性エリスと偶然知り合い、金銭の援助をタネに近づき、結婚の約束をしながら、妊娠させたのちに、自分の故国での出世のために、エリスが邪魔になり、勝手にひとりで故国に逃げ帰ってしまい、その女性を発狂させてしまう。

現在、この小説を読んで、腹を立てない人はいないだろう。とくに若い人ほど腹を立てるだろう。

小説としての『舞姫』は失敗作

『舞姫』は、文学史的な意義はあるのかもしれないが、小説としてみれば失敗作だろう。有名な小説ではあるが、それは教科書で読まれるからであって、決して名作だからではない。

第1に結末があまりに不自然である。豊太郎は帰国するためにエリスと別れようとして葛藤し、気を失ってしまう。その間に、友人の相沢がエリスを説得し、金の力で処理している。主人公が気がつくとき、すべては終わっていた。主人公は全く受動的であり、自分の意志ではなく、友人の意志に任せている。こんな都合の良い結末は不自然すぎて白けてしまう。今なら、どんなにくだらない小説でも、こんないい加減なストーリーにはしない。学生の同人誌によく見られる程度の空想的な結末である。小説としては致命的な欠点である。

第2に、エリスは急性パラノイアを発症し、ダルドルフの精神病院に入院させられたとある。しかし、恋人にふられて急性パラノイアを発症するなんてことがあるのだろうか。失恋してうつ病になるというのならわかるが、パラノイアは別系統の精神障害である。

第3に、この小説は基本的に「自慢話」である。これも学生の同人誌によく見られる特徴である。エリートとして洋行したという自慢。しかし、「このままでは自分はロボットになる」と自我にめざめたという自慢。東洋の男がヨーロッパの若い金髪女性をわがものにしたいというモテ自慢（前述）。一見すると豊太郎の優柔不断さという「弱さ」を告白しているようでいて、実はすべて自分を高める自慢話をしている。

当時の留学のブラックな側面

小説としての欠点だけではなく、倫理的にみても、『舞姫』は女性への蔑視が明らかであり、致命的である。豊太郎は、金銭の援助をタネに近づき、都合が悪くなると捨て、最後は金の力を使う。この小説を読んでみんなが腹を立てるのはこの点である。

こうした例は、当時の鷗外のまわりにたくさんあった。例えば、鷗外の友人原田直次郎は、日本に妻子を持ちながら、ミュンヘンのカフェで働くマリイと恋仲になり、妊娠させてしまう。原田は、妊婦のマリイを残して帰国し、彼女は原田を見送ったのである。このマリイが鷗外の『うたかたの記』のモデルとなった。『舞姫』のエリスとの事件と似たようなエピソードである。当時は現地妻のようなことが当たり前のように行われていた。

鷗外の上司だった石黒忠直の1887年10月8日の日記には、ウィーンからベルリンに向かう列車の中で鷗外・石黒・谷口の男3人で現地の女自慢をして盛り上がったという記述がある。そして、「鷗外の交際が最も罪が重く、次が石黒で、谷口は最も軽い」と書いている（武智，2014）。これは次のように解釈されている。鷗外は未婚のシロウト女性に手を出し、後腐れがありそうなので最も罪が深い。一方、石黒は、「蒼山」と呼ぶフランス女性の現地妻のもとに毎週通っているが、これは金で解決するので罪が軽い。谷口は後を引く真剣な交際はしていないので、罪は最も軽い、というのである。当時の留学のブラックな側面である。

こうした「自慢」と「女性蔑視」は、東洋と西洋の格差を背景にして、ストレートなものではなく、倒錯的な話になってくる。明治時代の男性からすれば、この小説は、西洋の金髪女性を騙していい思いをして、結局は金で解決して帰国したというワル自慢の「武勇伝」に見えたのかもしれない。実際に、上司の石黒はそのような現地生活をしていた。当時の洋行エリートは、西洋へのコンプレックスを克服しようとして、西洋の女性に手を出して文明的な優越感に浸るという倒錯的な心理があったのだろう。さらに、ヨーロッパの女性を破滅させ、西洋に復讐するという倒錯的で低俗な自慢もあったかもしれない。他の日本人への自慢にもなり、留学仲間からは「ワルいやつ」として一目置かれたのかもしれない。

それほど倒錯的ではなくても、正統的にドイツ女性と国際結婚をすることもそれほど困難なわけではなかった。小堀（1969）によると、鷗外の『独逸日記』の中にも、青木大使の夫人はドイツ人であったこと、青山胤通と正式に結婚したがったドイツ少女がいたこと、長井長義がドイツ少女と婚約したこと、次に述べる緒方惟直とイタリア夫人と結婚したことが書かれている。

鷗外の女性観「欧州で子をませたのは緒方だけではない」

緒方惟直のエピソードは、鷗外の女性蔑視をあらわすものである。

明治の始めに岩倉具視の一行がイタリアを訪問し、それにより、ヴェネツィアに日本総領事館が設けられた。1873年には、高等商業学校の中に、日本語講座が開かれた。この講座の第2代日本語教師となったのは、緒方惟直（おがた これなお、1853～1878年）である。彼は、蘭学の医者として有名な緒方洪庵の息子であり、横浜の仏蘭西語学伝習所でフランス語を学び、14歳で官費留学生に選ばれた。このヴェネツィア高等商業学校で学ぶかたわら、日本語講座の教師に任命された。ヴェネツィア女性マリアと交際し、娘をもうけていた。しかし、彼は壊血病により25歳の若さで亡くなってしまう。死の床で洗礼を受け、マリアとの結婚が成立したが、その5日後に亡くなった。彼は同僚や学生たちから愛されていて、その葬儀には多くの人が参列し、地元の新聞にも取りあげられた。緒方の墓はサン・ミケーレ島にある。詳しくは、丹野義彦『イタリア・アカデミックな歩き方：都市をめぐる教養散策』（有斐閣）を参照いただきたい。

緒方の後、第4代の日本語教師になったのは長沼守敬であった（のちの東京美術学校の彫刻科教授）。長沼は、1886年に、ミュンヘンで森鷗外と出会った。このことを鷗外は『獨逸日記』に書いている。鷗外は長沼に緒方のことを聞いた。父緒方洪庵は、鷗外の大先輩の医学者であるから、当然その息子の悲劇については知っていた。しかし、当時、惟直は、異教の女性と結婚し子をもうけたことは、日本政府には隠していたという。長沼は、緒方の兄の緒方惟準に知らせたが、返事も来なかったという。当時の緒方家にとっては、隠しておきたいスキャンダルだったのかもしれない。

長沼は、緒方の妻マリアと娘の元を訪ねて行ったという。母子は、緒方の死後、国からお金をもらったが使い果たし、困窮の生活であった。長沼は気の毒になり、少しお金をあげたという。

それを聞いた鷗外は日記に次のように書いている。

日本人の歐洲に在りて兒を生ませしは、独り惟直氏のみならず。既に伯林にも梅某の子、中村某の子あり。皆面色黄を帯び、骨格邦人に似たりと云ふ。梅某の情婦は余伯林に在りしとき、余と俱に一杯の珈琲を喫したることありき。客窓排悶（旅の憂さ晴らし）の末、遺子を海外に留むるは、その情より論ずれば、また怪しむに足らず。唯々撫育の費を送らで、母子をして飢餓に逐らしむるは、いと悲むべき事なり。独乙の法、一兒の養育料は大概一時二千麻を投じて足る。留学生の如き、この資力なくして醜を遺すならん。」
森鷗外『獨逸日記』1886年（明治19年）7月15日

「子どもの養育料は2000マルクほどですむのに、留学生はお金がないのでこんな醜いことになる」とも書いている。外国人女性を金で何とかしようとする蔑視であり、鷗外の女性観がにじみ出ている。『舞姫』のエリスとの事件と根が共通するエピソードである。

鷗外に限らず、明治時代のエリート男性の女性観とはこのようなものだったのだろう。明治から戦前の文豪の文章を読むと、現代では考えられない女性蔑視の表現に出会って驚く（例えばアジア人女性への蔑視）。

『舞姫』は純愛を描いているか？

『舞姫』は小説としては失敗作であり、よく言ってもせいぜい問題作である。決して名作などと呼べるものではない。

不思議なことに、鴎外研究を続けている人の文章を読むと、「しだいに『舞姫』は鴎外の「純愛」を描いたものだと思えるようになってくる」と書かれているのに出会う。六草（2011. 2013）、武智（2014）などにそうした記述がみられるのだが、私にはどうしても鴎外の「純愛」は感じ取れない。



『舞姫』は、恋愛小説としては最悪だが、しかし、視点を変えて、ベルリンを知るための情報小説とみると、それなりに面白い。これまで何人かの鴎外研究家が、この小説の地理的な「謎」に取り組んできた。主人公の豊太郎と少女エリスの出会いは次のように書かれている。

或る日の夕暮なりしが、余は獣苑（ティーアガルテン）を漫步して、ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、我がモンビシュウ街の僑居に歸らんと、クロステル巷の古寺の前に来ぬ。・・・今この處を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、聲を吞みつゝ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。
森鴎外『舞姫』青空文庫

豊太郎の散歩コースの地名は、上の地図のように表せる。豊太郎は、西側にあるティーアガルテン（獣苑）を散歩して、帰りはウンター・デン・リンデン大通りを歩き、そして、クロステル巷の古寺の前を通り、そして、モンビシュウ通り 3番地の自宅に帰るというコースである。

注）「～通り」をあらわすStraßeという単語を、鴎外は「～街」と訳している。本稿では「～通り」と訳すことにする。

しかし、このコースは少し不自然である。地図に示すように、ウンター・デン・リンデンから運河を渡って、博物館島を抜け、シュプレー川にかかるケーニヒス橋まで来たとしよう。ここまででもすでに約2キロメートルは歩いてきた。さらに、ケーニヒス橋から、北のモンビシュウ通りへ戻るためには、「Aコース（直帰）」をとるのが自然であろう。なぜわざわざ遠回りの「Bコース」を歩くのだろうか。AコースとBコースは正反対の方角である。

これに対してはいくつかの説が出ている。

フィクション説

第1は小堀（1969）のフィクション説である。『舞姫』はフィクションであって、鴎外はベルリンらしい地名をそれらしく散りばめているだけである。現実の世界では、ケーニヒス橋から、モンビシュウ通りへ戻るためには、「Aコース（直帰）」をとるのが自然であり、正反対の「Bコース（遠回り）」を取るはずがない。だから、『舞姫』の散歩コースはフィクションであって、地名と対応に目くじらを立ててもムダだ、としている。

確かに、小堀（1969）のいうように、当時、「モンビシュウ通り」という地名は存在しないフィクションである。おそらく鴎外の第3の下宿のあった「モンビシュウ広場」のことをそう呼んだだけかもしれない。

ただし、とすれば、「クロステル巷の古寺」も、現実とは対応しないフィクションだと主張すると思いきや、小堀（1969）は、なぜか実在するクロスター教会がモデルだろうと断定している。この推論は中途半端であり徹底していない。

事実説＝「Bコース（遠回り）」

第2は、篠原（1969, 1970）の事実説である。ここでは『舞姫』に出てくる地名は、実際の地名と対応すると考える。この文章を素直に読めば、やはりケーニヒス橋→クロステル巷→モンビシュウ街と「Bコース（遠回り）」を取ったと呼べる。多少長い散歩だが、当時の明治人は健脚だった。

篠原（1970）によると、「モンビシュウ通り（ガッセ）」という地名は実在していた。小堀（1969）のいうように『舞姫』の地名はフィクションではなく、実在する地名と対応する。

作業仮説として「事実説」を採用しておこう

さてどちらの説が正しいのだろうか。

ここでは、二者択一を取らず、とりあえず、作業仮説として、第2説「Bコース（遠回り）」説を採用しておこう。もし『舞姫』の地名をすべてフィクションだと割り切ってしまうと、何も生産的な仕事は生まれない。とりあえず、「事実である」という作業仮説を立てておいて、どれだけ現実と対応するかを調べてみると、いろいろなことがわかってくる。もし、その結果、対応しないとわかれば、この仮説を捨てればよい。

小堀（1969）のようなフィクション説は、正統な文学研究者や批評家がとりやすい立場である。文学作品は虚構世界として完結しているので、虚構内部で分析するべきである。現実世界のモデルとの対応などは、つまらない下世話な二義的な作業にすぎない、と彼らは考える。とはいえ、フィクションと切り捨ててしまう前に、ベルリンのいろいろな事実と向き合ってみるといろいろな発見があるものだ。後述の六草の著書などはその代表である。これら非文学者（私も含めて）の仕事も楽しい。

<参考文献>

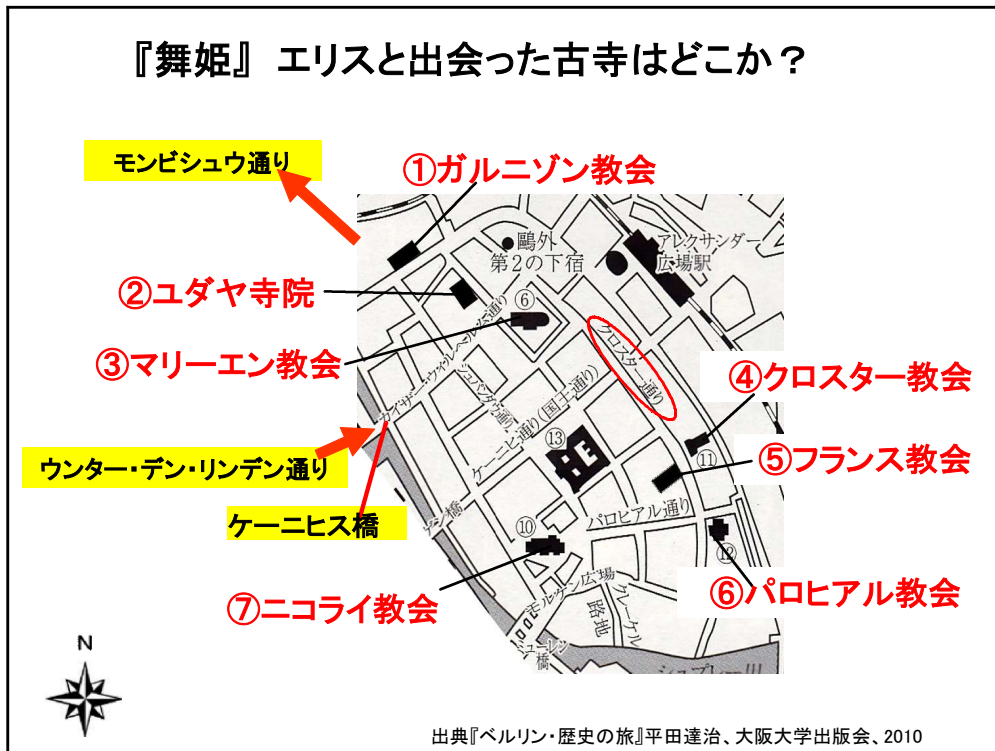
小堀圭一郎『若き日の森鷗外』東京大学出版会、1969.

篠原正瑛「鷗外とベルリンー『舞姫』『キタ・セクスアリス』『妄想』の跡を訪ねて」、鷗外、5、11-32, 1969.

篠原正瑛「鷗外とベルリン（続）」、鷗外、6、26-39, 1970.

六草いちか『鷗外の恋 舞姫エリスの真実』講談社、2011.

六草いちか『それからのエリス いま明らかになる鷗外「舞姫」の面影』講談社、2013.



7つの候補とマリーエン教会説

フィクション説か事実説かにこだわるのは、豊太郎がエリスと出会った古寺はどこかという疑問に関係するからである。六草（2011）によると、地図に示すように、少なくとも7つの教会があった。六草いちか氏は、ベルリン在住のノンフィクション作家で、ドイツ中の文書館や教会などの資料を徹底的に調べた。

地図に示すように、豊太郎は、ウンター・デン・リンデン大通りからやってきて、ケーニヒス橋を渡り、クロスター巷の古寺をへて、北西のモンビシュウ通りへと帰ろうとしていた。こうした道順の条件を満たすのは、カイザー・ヴィルヘルム通の周辺の①ガルニゾン教会、②ユダヤ寺院、③マリーエン教会である。北西に帰ろうとするのに、わざわざ④～⑦の教会を遠回りするのは不自然ではないかと、篠原（1970）はいう。

ただし、前述のように、篠原（1970）はもともと「Bコース（遠回り）」を選んでいいるのだから、④～⑦を遠回りするコースもありうるという理屈になり、こうした可能性を恣意的に否定するのは実はおかしい。

また、「クロスター巷の古寺」というからには、クロスター通りに面している必要がある。この条件を満たすのは、③マリーエン教会、④クロスター教会、⑤フランス教会、⑥パロヒアル教会の4つである。

したがって、2つの条件を両方満たすのは③マリーエン教会だけということになる。こうして、これまではマリーエン教会が舞台だと考えられてきたのである。

六草の比較評価

しかし、こうした定説を覆したのが六草（2011）である。

鴎外は「クロスター通り」（原文ではクロスター街）と、「クロスター巷」という言葉の両方を使っている。「巷」というのは、「通り」のことではなく、その付近の地域全体をさす。このことは前から指摘されてきた。したがって、「クロスター通り」に面していなくてもよい。これだと①～⑦のすべてが該当する。

そこで、六草（2011）は、それぞれの教会について、『舞姫』の記述に合っているかどうかを評価した。評価の視点は、次の7項目である。

- a) ウンターデンリンデンを過ぎ、モンビシュウ街の下宿に帰るまでに寄れそうな距離にあること。
- b) 狭く薄暗い「巷」にあること。
- c) 民家の向かいに位置すること。
- d) 凹字の形に引っ込んでいること。
- e) 三百年の歴史があること。
- f) 恍惚とさせるような魅力があること。
- g) 教会に門がついていること。

これらの評価を以下のように配点した。

- ◎かなり当てはまる（3点）
- 当てはまる（2点）
- △当てはまると言えなくもない（1点）
- ×当てはまらない（0点）
- ? 不明（0点）

これらの評価総点を示したものが次の表である。このような評価は、私のような心理学者にとっては見慣れた方法であり、説得力があるので、ぜひここで紹介させていただきたい。

◆ 豊太郎がエリスと出会った古寺はどこか？

六草 (2011) より引用。一部改変。

	評価の観点							評価総点	支持する文献
	a	b	c	d	e	f	g		
①ガルニゾン教会	◎	◎	◎	◎	△	○	◎	18	六草 (2011)
②ユダヤ寺院	◎	◎	◎	×	×	?	×	9	
③マリーエン教会	◎	◎	◎	◎	△	◎	×	16	篠原 (1970)
④クロスター教会	×	×	×	×	◎	◎	◎	9	小堀 (1969)
⑤フランス教会	×	×	×	×	×	×	◎	3	
⑥パロヒアル教会	×	×	×	◎	△	○	×	6	
⑦ニコライ教会	×	◎	◎	○	?	◎	×	11	

注) 「評価総点」とは、◎を3点、○を2点、△を1点、×と?を0点として加算したもの

注) ①ガルニゾン教会については、六草 (2011) が採点していないので、その記述をもとに私が採点した。

注) これらのうち①②⑤の建物は現存しない。建物が残っているのは③④⑥⑦のみである。

ガルニゾン教会説

この表を見ると、明らかに①ガルニゾン教会が18点でトップであり、②マリーエン教会は16点で2位である。

しかも、調べてみると、ガルニゾン教会には、エリーゼの両親の結婚の記録が保存されていた。また、ガルニゾン教会の近くには、鷗外の第3下宿の主人であったルーシュ夫人の自宅（ノイエフリードリヒ通り44, 45. 55番地）があった。（教会の筋向かいにあるノイエフリードリヒ通り60番地の家の間取りは、『舞姫』のエリスの自宅の記述と似ているとしているが、これは言い過ぎ）。

このように、六草 (2011) はガルニゾン教会説を打ち出した。決定的とまではいえないが、かなり有力であることは確かである。

『舞姫』 エリスの写真があった



『舞姫』 エリスの写真があった

毎日新聞 2013年(平成25年)8月30日(土)

その後の「舞姫」エリス

鷗外(1862~1902)の代表作『舞姫』のヒロイン、エリスのモデルとされる女性の写真が見つかった。ベルリン在住の作家、六草いちかさんが、エリスの写真を発見し、入手した。鷗外は1884~88年にドイツに滞在し、体験を基に『舞姫』を書いた。エリスのモデルをめぐっては、鷗外定説で来日した際の舞姫名媛から、実在の女性「エリーゼ・ヴィーゲルト」とを推して来た。六草さんは、ドイツの教会の洗礼の記録などから、エリーゼ

独住作家 モデル親族から写真

六草いちかさんは、1966年9月、ドイツのベルリンで生まれ、2011年に発表した『舞姫』のモデルとされる女性の写真が見つかった。鷗外定説で来日した際の舞姫名媛から、実在の女性「エリーゼ・ヴィーゲルト」とを推して来た。六草さんは、ドイツの教会の洗礼の記録などから、エリーゼ



鷗外の恋
舞姫エリスの真実



それからのエリス
鷗外舞姫の真実
六草いちか

エリスのモデルとなったエリーゼ・ヴィーゲルトについては、六草 (2011, 2013) の調査によって、かなり明らかになった。六草はドイツ中の文書館や教会や不動産記録などの資料を徹底的に調べた。ベルリンの壁崩壊によって、東ベルリン地区の調査が容易になり、鷗外研究も進んだ。

それによると、エリーゼ・ヴィーゲルト (1866~1953年) は、シュチェチン (現在ポーランド領) に生まれ、その後ベルリンに移った。1888年、鷗外が帰国してすぐに彼を追いかけて日本にやってきた。この時は22歳であった。鷗外の家族らに説得されて、結婚をあきらめて帰国した。その後、帽子製作者として生計を立て、39歳でユダヤ人の商人マックス・ベルンハルトと結婚した。52歳の頃に夫が死亡した。生活は裕福なものだったらしい。親族には、自分が若い頃日本に行ったことを話していて、日本から持ち帰ったらしい茶器セットを大事にしていたということである。エリーゼの写真も見つかった。ベルリンの老人ホームで87歳で亡くなった。

2013年の新聞記事を見て、エリスのモデルがこれだけ具体的にわかったことに驚いた。何よりこの写真を見て、多くの人は安心したのではなかろうか（私もそのひとり）。これは歴史的な写真と言えよう。

国民レベルの舞姫トラウマ

鴎外が1890年に発表した『舞姫』によって、読者はトラウマ（心の傷）を受ける。明治政府のエリートとして留学した主人公が、貧しい女性に金銭の援助をタネに近づき、結婚の約束をしながら、妊娠させたのちに、邪魔になり、別れ話を持ち出し、その女性を発狂させてしまう。こんなひどい話はない。この作品を読むと、誰でもエリスの立場に身を置いて、トラウマをかかえてしまう。トラウマへの対応として怒りを主人公の豊太郎に向ける。

しかも、この作品は作り話ではなく、実話をもとにしていることを知って、トラウマはさらに強まる。後に明治の文豪となる医学者にだまされた女性が、日本まで追ってくるが、結局は結婚をあきらめさせられ、傷心のうちに帰国した。小説と事実が混じり合うと、帰国後、エリスは鴎外の子どもを産んだのではないかと、発狂して悲惨な人生を送ったのではないかと、などと思ってしまう。ドイツ女性を侮辱したことに対する罪の意識が強まる。

『舞姫』は、1890年の発表以来、100年以上にわたって、日本人にトラウマを残し続けてきたといえる。

123年目のサイコセラピー

しかし、作品発表から123年後の2013年になって、六草が発見した写真を見て、日本人は、少しだけ「舞姫トラウマ」から解放される思いをした。六草の発見によって、現実のエリーゼは、日本から帰った後、結婚して裕福な生活を送り、むしろ日本での良い思い出として語っていたようだ。そして、この中年になったエリーゼの夫婦写真である。裕福そうな着衣で、夫と並んで立っている。写真を拡大すると、エリーゼは幸せそうに笑っている。発狂もしていなければ、悲惨な人生でもなさそうだ。

この写真は123年間の日本人のトラウマをほどいた歴史的な写真と言えるかもしれない。この写真によって日本人はサイコセラピーを受け、トラウマから癒やされた。

六草（2011, 2013）の著書の意義は大きく、その調査のご苦労には頭が下がるのだが、しかし、この著書は調査の時系列に沿って書かれており、空想と事実が渾然としているので、わかりにくい。読み終わって、いったい何が事実だったのかをまとめようとすると、とたんに記憶があやふやになる。索引もない。研究書ではないし、エッセイなのだからそれでもいいのかもしれないが、もったいないことだ。どなたかこの書に書かれた事実だけをまとめていただけないものだろうか。

『舞姫』以外は面白いよ鴎外

個人的には、若い頃は、『舞姫』への反発もあって鴎外があまり好きではなかったが、中年以降になると、拒否感はそれほどでもなくなった。Kindleで『森鴎外全集・136作品⇒1冊』というのを手に入れ、旅行などで読んでみると、『舞姫』以外の作品はリアルで面白い。鴎外は、晩年まで、医師（自然科学者）と官僚の仕事と、文学を両立させた。これは私の生き方のモデルとなりうる。還暦をすぎると鴎外は身近になる。意外にもというか、当然というか、49歳で亡くなった漱石の作品は、還暦をすぎるとあまり興味はなくなる。こういうのも同人誌レベルの「枯れ自慢」にすぎないのだが・・・。

3-3 第3の下宿

森鷗外第3の下宿



ハッケシャー・マルクト駅のすぐ前に、森鷗外の第3の下宿跡がある。前述のように、森鷗外は、ベルリンでは3カ所に下宿した。

●森鷗外のベルリンでの3つの下宿

場所	期間	期間	住所	最寄鉄道駅	勤務先	本稿の章
第1の下宿	1887年4月18日～6月14日	2ヶ月	Marien Straße 32	フリードリヒ通り駅	衛生学研究所	3-1
第2の下宿	1887年6月14日～1888年3月31日	10ヶ月	Kloster Straße 97	アレクサンダー広場駅	衛生学研究所 →近衛師団	3-2
第3の下宿	1888年4月1日～7月5日	3ヶ月	Große Präsidenten Straße 10	ハッケシャーマルクト駅	近衛師団	3-3

1888年4月1日、鷗外は、第2の下宿を出て、第3の下宿に移った。

住所は、グローセ・プレジデッテン通り10番地Große Präsidenten Straße 10である。グローセ・プレジデッテン通りのことを、鷗外は「大首座街」と訳している。同じ年の7月5日には帰国しているので、この下宿にいたのは3ヶ月ほどの間だった。

鷗外第3の下宿の建物は今もある。場所はSバーンのハッケシャー・マルクト駅のすぐそばである。

この地図に示すように、オラニエンブルガー通りとモンビシュウ広場Monbijou Platzと、グローセ・プレジデッテン通りGroße Präsidenten Straßeの3本は三角形をなしている。

このグローセ・プレジデッテン通り10番地が鷗外第3の下宿であった。

このビルは、3つの通りに面している。西北がグローセ・プレジデッテン通りGroße Präsidenten Straße、東北がハッケシャー市場Hackescher Markt、南東がノイエ・プロムナーデNeue Promenadeである。

第3の下宿 ルーシュ夫人のスペース



この建物は5階建てだったが、その4階の一室に鷗外は下宿した。この建物は当時の高級アパートだった。このビルの間取りについては、檀原（2000）が詳しく調べている。

図に示すように、3つの建物の集合体であり、すなわち、①グローセ・プレジデント通り10番地、②ハッケシャー・マルクト4番地、③ノイエ・プロムナーデ3番地、という3つの棟からなる。真ん中に吹き抜けの中庭がある。建物の4階のフロアには約20室ほどの部屋が並んでいた。

そのうちの北西のグローセ・プレジデント通りのスペースを、ルーシュという47歳の未亡人が所有していた。ルーシュ夫人は、縫製工場を営む事業家であり、このスペースは裁縫の工場として用いていたのかもしれない（後述のように、このことが鷗外とルイーゼ一家を結びつける手がかりとなる）。そのスペースの一室を鷗外が借りていたのである。

出典：檀原みすず「森鷗外のベルリン第三の下宿」鷗外、67，318-328．2000．

第3の下宿 鷗外の居室



ルーシュ夫人が所有していたスペースを拡大したのがこの図である（檀原，2000）。

北側に、らせん階段があり、登ってくると、すぐに玄関がある。短い廊下に面して、4つの部屋が並んでいることがわかる。鷗外の部屋はどこだったのだろうか。

この部屋の様子について、鴎外は『独逸日記』に次のように書いている。「室内の装飾はすこぶる美しい。バルコニー（出窓）の下に大きな鉄の器をおいて、中に草花を植え、つる草をまとうせてある。本棚は、安かったのので、自分で買ったものを置いた。この中に、あらたに集めた珍しい本を並べ、そのときに読みたい本を選んで読んでいます。無聊（退屈で気が晴れない）のときは、こうした読書で心を癒やしている。」

この中でバルコニーに面していて装飾が美しそうな部屋は、一番南側の部屋である。ここが鴎外の部屋だった可能性が高い。

この部屋は、図に示すように、東側に窓がひとつついている。窓の外はバルコニー（出窓）になっていて、中庭に面していた。この窓から日光が入ってくるが、東側なので、昼間の日当たりは悪かっただろう。それ以外に窓はない。室内には暖炉がついていた。

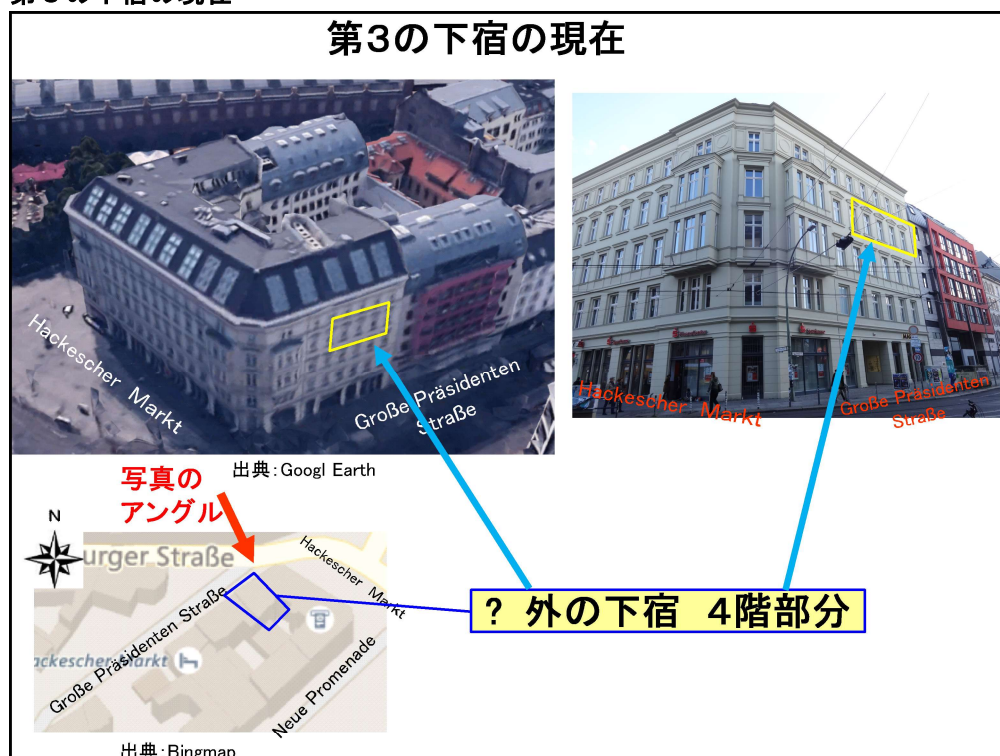
鴎外の部屋の南東には、台所・食堂の部屋があった。ここで鴎外は食事をしたかもしれない。そのとなりには風呂・洗面所がある。台所・食堂は予備階段に通じていた。

北西の側に大きな2つの部屋があるが、これらの用途は不明である。北側だが、窓も大きく日当たりはよさそうだ。これらの部屋が縫製工場の仕事場だったのか、ルーシュ夫人の居室だったのか、あるいは別の間借り人に貸していたのかはわからない。

鴎外の部屋の北側の小部屋は、バルコニーに抜けられるので、通路のように使われていた。

さきほどの『独逸日記』の記述から、当時の鴎外の心理状態をうかがうことができる。「無聊」（暇を持て余して気が晴れない）と書いている。その理由は、それまでの医学研究者から軍医へと仕事が変わり、自由な時間がなく形式的で退屈な生活へと変わったことがあげられる。また、エリーゼとの関係も反映していたのかもしれない（後述）。

第3の下宿の現在



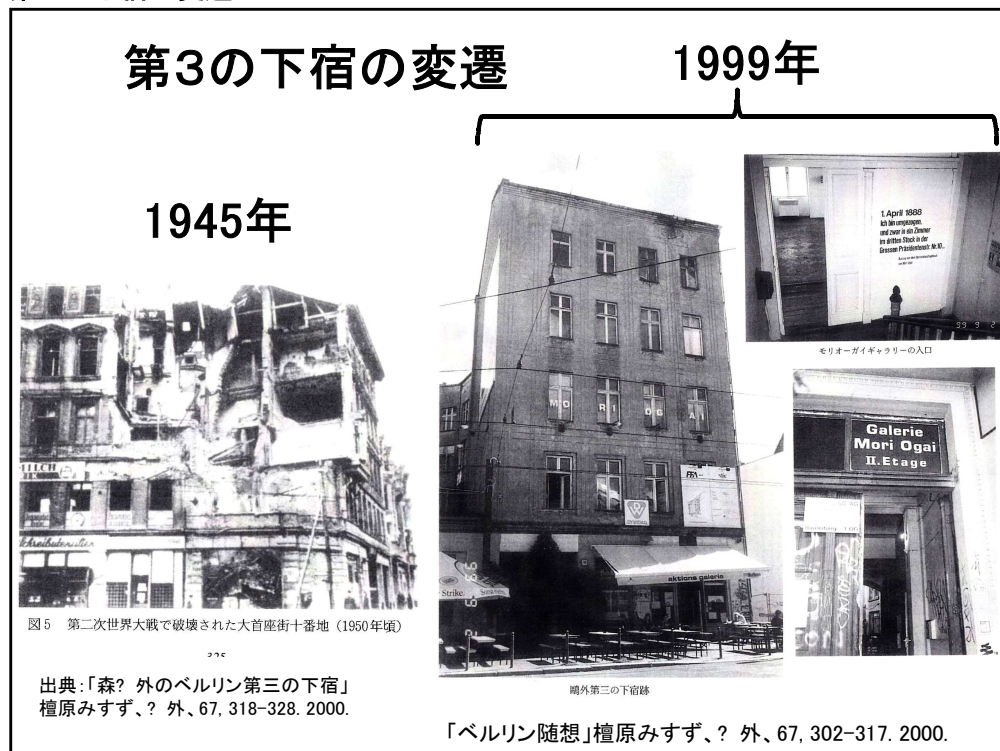
この建物は現在どうなっているだろうか？

左の写真は、Google Earthでこの建物を調べたものである。グローセ・プレジデント通りの方向からみたものである。Google Earthでは、この建物を360度回転して調べることができる。中庭の構造もよくわかる。建物の構造は当時と変わっていないようである。ただし、5階建ての建物の上に、屋根裏部屋が加えられて、6階建てのようになっている。

右の写真は、現地で撮ったものである。これもグローセ・プレジデント通りから見上げている。

この建物は、ハッケシャーマルクト駅を出ると正面にある。このあたりは、トラムが走っていて、車あまり通らない。建物の1階は商店になっている。2階以上はアパートか事務所が入っている。

ビルのテナント表を見ると、ふつうの企業が並んでいる。



この建物について、檀原（2000）が詳しく調べている。
この建物は、1945年のドイツ軍とソ連軍の市街戦で、2階以上が破壊されてしまった。左の写真が当時の無残な姿である。

その後、東ベルリン市のものとなり、ベルリンの壁崩壊後は州のものとなり、現在は民間のものになっている。ベルリンの壁崩壊によって、東ベルリンにあった鷗外の下宿跡に簡単に行けるようになり、鷗外研究も進んだ。

真ん中の写真は、1999年に檀原氏が訪ねた時のものである。5階建ての建物だが、現在と比べると、表の装飾がないし、屋根の上の飾りもない。

1999年当時は、2階に「モリオーガイ・ギャラリー」という前衛画家たちの事務所があったという。また、2階の壁には、鷗外の『独逸日記』の一節がドイツ語で書かれていたという。なかなかしゃれている。このギャラリーは現在はない。

鷗外はなぜ下宿を移ったのか：勤務先の変更

なぜ、鷗外は第2の下宿から第3の下宿に移ったのだろうか。一番の理由は、勤務地が変わったからである。

1887年7月に軍医監の石黒忠直がベルリンにやってきて、10月まで鷗外は通訳や案内に追われた。そして、石黒からプロシア軍の軍医の仕事をするように命令された。このため、鷗外は衛生学研究所での研究を論文にまとめ、衛生学研究所での研究をやめた。

1888年3月18日の辞令で、プロシア国近衛歩兵第二連隊での仕事についた。

プロシア国近衛歩兵第二連隊は、地図に示すように、フリードリヒ通りとカルル通りにあった。そこで、通勤が便利のように、4月1日に下宿を移ったのである。

第3の下宿のあるハッケシャー広場からは、鉄道馬車が出ていて、地図の青い線のように路線が伸びていた。約1.3キロメートル、30分弱で近衛歩兵第二連隊に着く。

『独逸日記』には次のように書かれている。「朝6時30分に起きて、7時にパンとコーヒーで朝食をとり、7時30分の鉄道馬車に乗り、8時前にフリードリヒ通りの近衛歩兵第二連隊に着く。8時から仕事が始まる。」

仕事の内容は、兵士とその家族に対して軍医として診療にあたることである。まずフリードリヒ通りの第二連隊で仕事し、ついでカルル通りの第三連隊に行って仕事をする。午前中で仕事が終わる。昼食はホテル・テップファーで、石黒といっしょに取ることが多かった。鷗外は『独逸日記』をやめて『隊務日記』というノートをつけている。

これまでの研究の仕事に比べて、軍医の仕事は、自由な時間もなく、退屈だった。鷗外は気が乗らなかったが、命令なので仕方がなく従った。前述のように、軍医監の石黒忠直は、北里柴三郎に対しても、ベルリンでの細菌学の研究をやめて、ミュンヘンで衛生学の研究をせよという命令を出した。北里は「門外漢に何がわかるか」と、断固として命令を拒否した。これに対して、鷗外は、しぶしぶ命令に従った。ここが軍医鷗外と研究者北里との違いである。

鷗外が軍医の仕事をするようになってから、鷗外的心情を知る資料は少なくなる。

この仕事を3月18日から6月まで続けて、7月に鷗外は帰国するのである。

第3の下宿の謎

職場が変わったので引っ越したのはわかるが、それでも、下宿を移る積極的な理由とはならない。

第1に、地図からわかるように、近衛歩兵第二連隊の近くに引っ越したわけではない。第2の下宿からでも、鉄道馬車に乗るには数分歩けばすみ、それほど通勤時間の短縮になるわけではない。

第2に、後述のように、鷗外は第2の下宿をたいへん気に入っていて、「これ以上何を求めようか」と書いているほどである。しかも、7月には帰国することが決まっていたので、この4ヶ月のためだけに、気に入った下宿を移る必要はなかった。

よほど何か差し迫った理由があったに違いない。篠原（1978）は、これを「第3の下宿の謎」と呼んでいる。

出典：篠原正瑛「鷗外とベルリン（四）―ふたたび第三の下宿の”謎”について―」鷗外、23, 11-23, 1978.

下宿を移ったのはエリーゼと同棲するため？

多くの研究者は、引っ越しの本当の理由は、エリーゼ・ヴィーゲルトと同棲するためだったとしている。エリーゼとは、帰国した鷗外を追って日本にやってくる『舞姫』のモデルとなった女性である。

中井（1999）は、カフェ・クレプスで出会った女性をエリーゼだと考え、第3の下宿で同棲したと述べているが、確証を示しているわけではない。

六草（2011）の調査によると、鷗外とエリーゼを結ぶキーパーソンはルーシュ夫人である。

鷗外の下宿の主人ルーシュ夫人は、裁縫工場を営んでいた。ルイーゼの母親は「仕立屋」の仕事をしていたので、ルーシュ夫人の工場の仕事をルイーゼの母親がしていた可能性もある。鷗外がルイーゼと知り合ったきっかけは不明であるが、鷗外はルイーゼやその母親を通して、ルーシュ夫人と知り合い、その家に下宿させてもらったのかもしれない。確証はないものの、ルーシュ夫人とのつながりで、鷗外がルーシュ夫人の下宿でルイーゼと同棲をはじめたことはありうる。

こうして『舞姫』に描かれたような事件がおこることになる。これについては第2の下宿のところで、まとめて述べる。

出典：中井義幸『鷗外留学始末』岩波書店, 1999.

哲学者フィヒテもここに住んでいた

鷗外の第3の下宿と同じブロックには、かつて哲学者フィヒテが住んでいた。住所はノイエ・プロムナーデ10番地である。

観念論哲学として哲学史に出てくるフィヒテ（1762～1814年）は、無神論論争でイエナ大学を追い出され、ベルリンにやってきた。1807～1808年に、「ドイツ国民に捧ぐ」という連続講演で有名になった。1810年に48歳のフィヒテは、ベルリン大学教授となり、初代学長となった。1814年にフィヒテは妻からの感染によるチフスで死亡した。享年52。

浪人中だったフィヒテが、1800～1806年まで住んだのが、このノイエ・プロムナーデ10番地であった。この番地の表示を探してみたが、8番地は表示されているが、10番地の表示はなかった。

文献：宇佐美幸彦『ベルリン文学地図』関西大学出版部、2008

3-4 コッホと鷗外

最後に、鷗外のベルリン大学での師だったロベルト・コッホについて述べてみよう。鷗外を知るためには、コッホを知ることが必要である。

<目次>

1章	ライプツィヒの鷗外
2章	ミュンヘンの鷗外
3章	ベルリンの鷗外
	3-1 第1の下宿
	3-2 第2の下宿
	3-3 第3の下宿
	3-4 コッホと鷗外

コッホを知ることは鷗外を知ること

コッホは実に面白い人で、波瀾万丈の人生を送った学者である。田舎の医師としてスタートしながら、のちにノーベル賞を取った。野口英世のような出世物語である。最近では、臨床医からiPS細胞でノーベル賞をとった山中伸弥氏と比べられるだろう。しかし、コッホはけっこう間違いも多かった人で、良い弟子に恵まれた反面、敵も多い人だった。

コッホは、北里柴三郎や森鷗外など日本人とも関係が深い。コッホを知ること、19世紀から20世紀の世界の医学史を知ることであり、また日本の医学史を知ることでもある。

以下、文献をもとにコッホの生涯をたどってみよう。とくにブロックの著書は科学者の伝記の傑作ともいえるもので、最も役に立った。

<参考文献>

トーマス・ブロック（長木大三・添川正夫訳）『ローベルト・コッホ』シュプリングァー・フェアラーク東京、1991。

ヘルムート・ウンガー（宮島幹之助・石川錬次訳）『ローベルト・コッホ：偉大なる生涯の物語』富山房、1943。

宮島幹之助「追憶」。ウンガー『ローベルト・コッホ：偉大なる生涯の物語』（富山房、1943）に収録。

メチニコフ『近代医学の建設者』宮村定男訳、岩波文庫。

小川真里子「ローベルト・コッホの来日をめぐって」生物学史研究、45、7-17、1985。

Ogawa, M. Robert Koch's 74 Days in Japan. Kleine Reihe Herausgegeben für die Mori-Ôgai-Gedenkstätte der Humboldt-Universität zu Berlin, 2003.

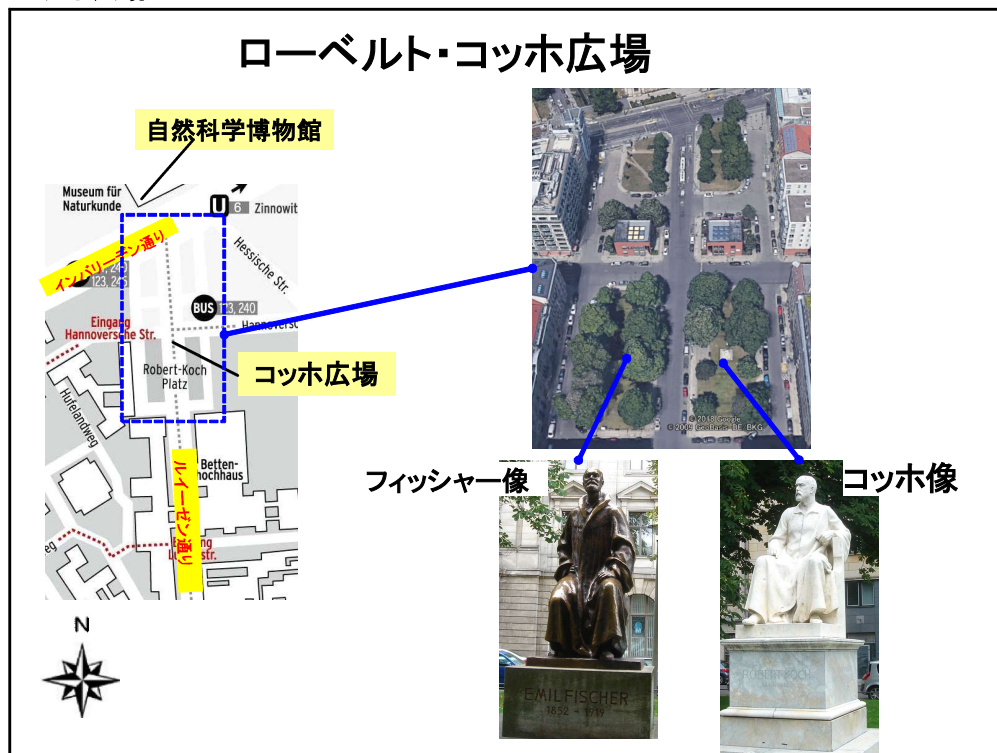
小堀圭一郎『若き日の森鷗外』東京大学出版会、1969。

武智秀夫『軍医森鷗外のドイツ留学』思文閣出版、2014

浅井卓夫『軍医鷗外森林太郎の生涯』教育出版センター、1986。

Hahn, J., Gaida, U. & Hulverscheidt, M. 125 Jahre Hygiene Institute an Berliner Universitäten. 2010.

コッホ広場



ライゼン通りの北端にロベルト・コッホ広場がある。

コッホ広場の中央には2つの像がある。いずれもベルリン大学の教授でノーベル賞受賞者である。西が化学者フィッシャーの像（黒）で、東が細菌学者コッホの像（白）である。配置も色も対照的だし、2人はとくにライバル関係だったわけではない。活躍した分野も時期も違う。

細菌学者コッホの白亜の像は、1916年、ドイツの彫刻家ルイス・トゥアイロン Louis Tuailon が作ったものである。やや神経質そうな表情をしている。

田舎の町医者としての前半生

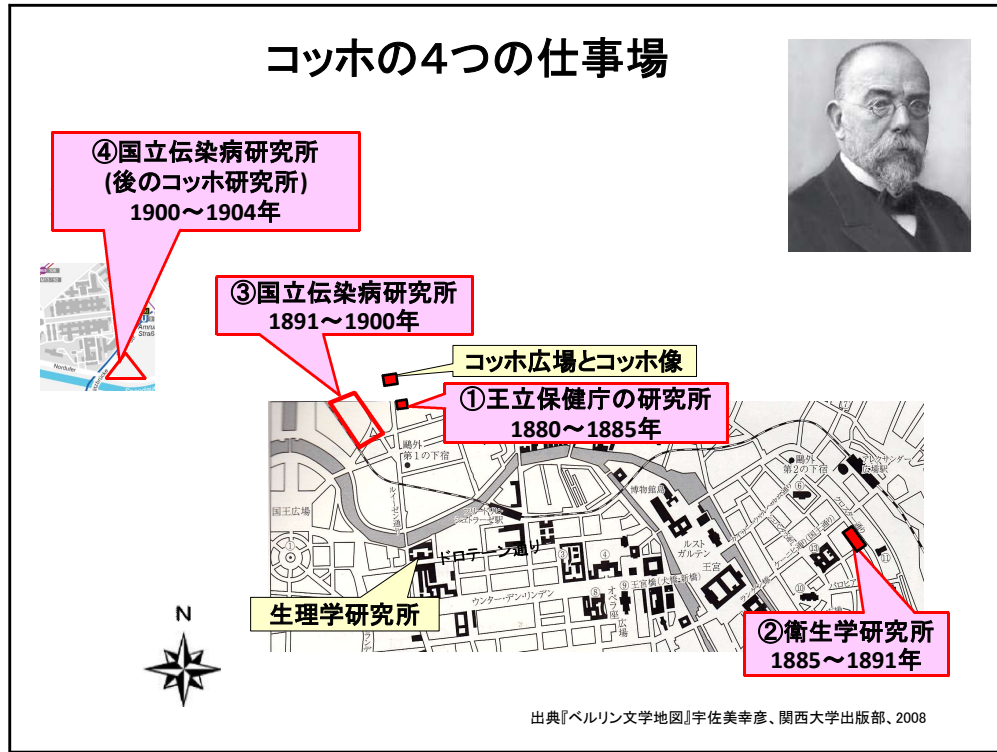
ロベルト・コッホ（1843～1910年）は、クラウスタールという炭鉱町に生まれ、ゲッティンゲン大学で医学を学んだ。医師となりあちこちで仕事をし、24歳でエミーと結婚、29歳でウォルシュタイン（現ポーランド領）で開業した。自宅ですべて細菌の実験研究をはじめ、炭疽菌の研究を32歳で発表した。当時は、伝染病の微生物説は、ベルリン大学のウィルヒョウやウィーン大学のビルロートらによって否定されていた。コッホの実験研究はこれを論破するものであった。

ブレスラウ大学（現ポーランド領のヴロツワフ大学）の植物学者コーンが、全く無名だったコッホの研究を見だし、学会に推薦した。

田舎の医師から世界レベルの研究のリーダーへ

1880年、39歳のコッホは、ベルリンの王立保健庁（Kaiserliches Gesundheitsamt：衛生院などとも訳される）の行政顧問となり、衛生学・化学研究所の所長に抜擢された。すぐに多くの弟子が集まり、コッホのチームは研究成果をあげた。コッホは、39歳にして、無名で孤独な医師から、世界レベルの研究チームのリーダーへと転身した。学者としては遅咲きであり、はじめてからエリートコースを歩んだ人ではない。

コッホの4つの仕事場

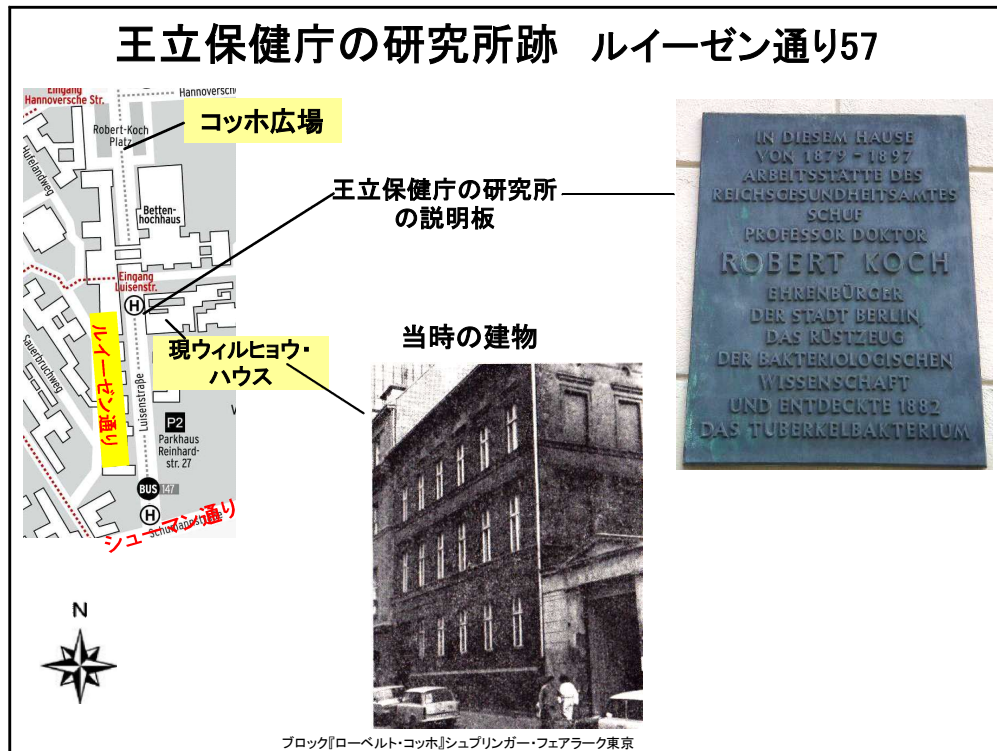


この地図に示すように、コッホはベルリンで4つの場所で仕事した。情報をまとめると、下の表のようになる。

◆ベルリンのコッホの4つの仕事場

	年代	場所	主な弟子	日本人の弟子
①王立保健庁の衛生学・化学研究所	1880～1885年	Luisenstraße 57	ガフキー、レフラー	緒方正規
②衛生学研究所	1885～1891年	Klosterstraße 32-36	プファイファー、ベーリング、プフル、エスマルヒなど	北里柴三郎、森鷗外
③国立伝染病研究所	1891～1900年	Schumannstraße (Triangel)	ベーリング、エールリッヒなど	北里柴三郎
④国立伝染病研究所 (後のコッホ研究所)	1900～1904年	Nordufer 20	ワッセルマンなど	

王立保健庁の研究所跡



第1の王立保健庁の衛生学・化学研究所は、ルイーゼン通り57番地にあった。この通りは、東ベルリン時代はヘルマン・マテルン通りと改称されていた。

この場所には、現在、ウィルヒョウ・ハウスが建っている。真ん中の写真は当時のビルである。小さな普通のビルである。

57番地には、コッホの説明板がはってある(写真右)。

コッホの最初の研究所で、コッホの最初の弟子となったのはガフキーとレフラーである。2人は後に優れた細菌学者となった(後述)。この時にコッホに師事した日本人として緒方正規がいる(後述)。まだそれほど有名ではなかったコッホを選んだ緒方の慧眼はすばらしい。緒方を指導したのは助手のレフラーであり、後に、緒方は、レフラーを通して、北里柴三郎をコッホに紹介した(後述)。

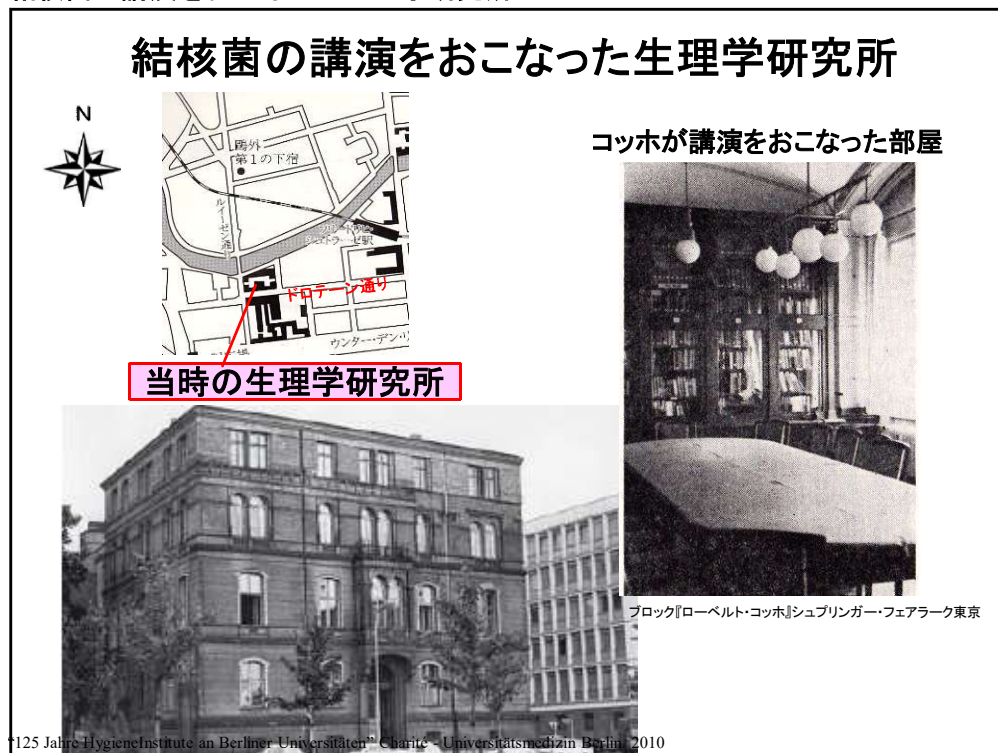
細菌学の方法論を確立

1881年、コッホはロンドンで開かれた国際医学会議に出席した。この会議において、当時の細菌学のリーダーであったフランスのパストゥール(1822~1895年)と、イギリスのリスターから、コッホは賞賛された。ただし、その後、パストゥールとコッホは対立関係となっていく(後述)。

その後、コッホは、結核菌の研究をおこない、成功をおさめた。彼は「コッホ3原則」と呼ばれる細菌学研究の方法論を固めた。これは、ある病気の原因がある微生物によることを証明するためには、以下の3つが必要とするものである。

- ①その病気に常に一定の微生物が見出されること
- ②その微生物を分離できること
- ③その微生物を動物に感染させて病気を実験的に起こせること

また、寒天培地やペトリ皿などを開発したのもコッホであり、今でも使われている。



結核菌の発見で世界的名声

1882年に、ベルリン生理学会においておこなったコッホの「結核菌の病因」という講演は有名である。結核菌発見のニュースはイギリスやアメリカに大きく報じられ、コッホは世界的な名声を博した。

当時、結核は死因の7分の1を占める重病であり、結核にかかると、打つ手がなく、死を待つばかりであった。だから、結核の原因が突き止めたということは、時代を変えるニュースであったことが理解できるだろう。

結核菌の講演をおこなった生理学研究所

「結核菌の病因」という講演は、ベルリン大学の生理学研究所の部屋でおこなわれた。ウンガーの『ローベルト・コッホ：偉大なる生涯の物語』（富山房、1943）は、この講演のシーンから始まる。

地図に示すように、当時の生理学研究所は、ルイーゼン通りを南に行ったところにある。住所はドロテーン通り96番地Dorotheenstraße 96である。後述の森鷗外記念館（鷗外の第1下宿）の近くである。1909年には、衛生学研究所がこの建物に移ってきた（後述）。

右上の写真のように、講演をおこなった部屋は、今でも残っている。意外に小さい部屋である。

このコッホの講演を記念して、1960年に、この建物内に「コッホ博物館」が作られたが、2009年に閉館した。

エジプト・インドへのコレラ菌採取遠征

1883年には、コッホはコレラ菌の研究を命じられた。当時、エジプトでコレラが発生し、フランスとドイツに助けを求めたのである。フランスはパストゥールを中心とする調査団をエジプトに派遣した。これに対抗して、ドイツはコッホを団長とする調査団を送った。背景には独仏の帝国主義的な世界分割競争があったことがわかる。

1883年に、コッホは、有望な結核の研究を泣く泣く中断して、エジプトに出発した。当時の細菌学者は、病原菌を採取しようとして、世界中を回った。しかし、それは死を覚悟した危険な旅である（野口英世もシュバイツァーなど現地で病死した熱帯医学の研究者は多い）。事実、フランスのチームでは、菌に冒されて死亡した隊員もいた。そのことでフランスチームは帰国したが、コッホのドイツチームは、さらにインドにまわり、コレラ菌を探した。カルカッタの医科大学病院に研究室を設置し、彼らはコレラ菌を採取した。

8ヶ月の遠征の後、コッホチームがドイツに帰ると、全ドイツ帝国を挙げての歓迎が待っていた。まるで凱旋将軍のようであった。ドイツ皇帝の歓迎をうけ、コッホは「細菌学の父」とたたえられ、宰相ビスマルクから勲章を受け、10万マルクの賞金をもらった。

これは、つまりコレラ菌の採取でフランスに勝ったからである。ここにも独仏の政治的対立が背景にあることがわかる。実際に1871年にドイツ（当時のプロシア）とフランスは普仏戦争をしたばかりであったし、1914年の第一次大戦でも両国は戦争をした。

ベルリン大学教授へ

さらに、1885年には、ベルリン大学医学部は、衛生学教室を新しく設けて、42歳のコッホを主任教授とし

て迎えた。また、ベルリン大学に衛生学研究所を作り、コッホを所長とした。

◆ベルリンのコッホの4つの仕事場

	年代	場所	主な弟子	日本人の弟子
①王立保健庁の衛生学・化学研究所	1880～1885年	Luisenstraße 57	ガフキー、レフラー	緒方正規
②衛生学研究所	1885～1891年	Klosterstraße 32-36	プファイファー、ベーリング、プフル、エスマルヒなど	北里柴三郎、森鷗外
③国立伝染病研究所	1891～1900年	Schumannstraße (Triangel)	ベーリング、エールリッヒなど	北里柴三郎
④国立伝染病研究所（後のコッホ研究所）	1900～1904年	Nordufer 20	ワッセルマンなど	

ベルリン大学教授としての仕事

ここでコッホは初めて大学で細菌学の講義や研修コースを担当した。研修生は、細菌学の研究手法を実物を使って習熟することができた。これらは大評判となり、全世界の研究者が集まった。

弟子のレフラーとガフキーは王立保健庁にとどまったが、コッホは、衛生学研究所で新たにたくさんの助手を得た。筆頭助手のプファイファー、ベーリング、プフル（コッホの娘のゲルトルドと結婚した）、フレンケル、エスマルヒ、プロスカウエル、フロッシュなどである。

日本人の北里柴三郎がコッホのもとで仕事をしたのもこの時期である。また、1887～1888年にかけて、森鷗外もここで研究した。鷗外を指導したのは、助手のフレンケル、エスマルヒ、フランクであり、彼らの名は鷗外の『独逸日記』に出てくる。

しかし、コッホにとっては、こうした教育の仕事はうんざりするような負担であったらしい。5年後にはコッホは教授職を辞めて、臨床研究に専念する方向へと向かう。

衛生学研究所の場所



1885年、衛生学研究所はクロスター通りの32-36番地Kloster Straße 32-36 に作られた。

衛生学研究所はクロスター通りに面しており、向かい側にはクロスター教会があり、西には市庁舎があった。

右上の写真のように、3階建ての立派な建物である。

この建物は、1713年の大火の後に立て直されたもので、1821年からプロイセンの実業学校が使っていた。1884年にこの学校がシャルロッテン実業大学と合併して出て行った。空き家となったので、1885年にここにコッホの衛生学研究所が入ることになった。

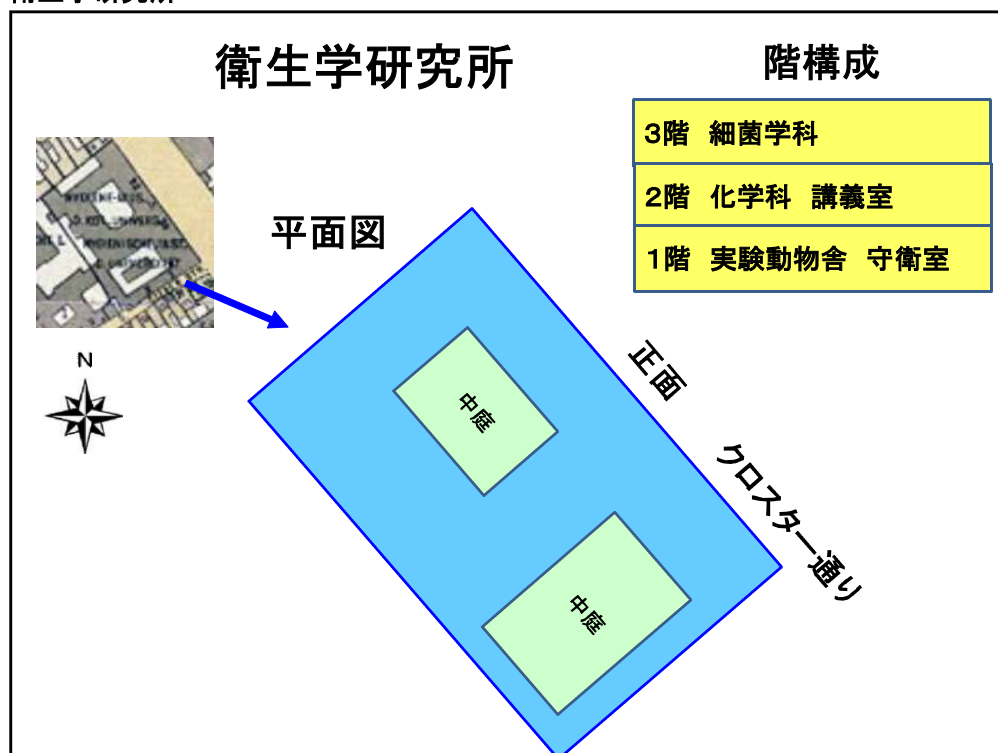
ウィルヒョウに遠ざけられて

クロスター通りという場所は、ベルリン市の市庁舎のすぐ隣りにあり、政治的にはベルリンの中心部といってもよい。しかし、地図をみるとわかるように、この場所は、大学病院（シャリテ）から約2キロメートルはあり、歩いて30分はかかる（後述のように、森鷗外が第1から第2の下宿に引っ越したのも、シャリテ

から遠かったからである）。医学の研究において、病院が近くにないのは致命的なことである。

ここには、当時シャリテを仕切っていたウィルヒョウの意志が感じられる。コッホをシャリテに近づけさせないという意志である。事実、1891年にコッホが衛生研究所の所長をやめて、後任にペッテルコーファーの弟子のルブナーが選ばれると、衛生学研究所はシャリテ近くのドロテン通り96番地に戻ってこれたのである。

衛生学研究所



当時の地図から建物の平面図をトレースしてみた。ロの字が2つ並んだような形をしており、2つの中庭がある。

衛生学研究所の125周年記念誌(2010)によると、階構成は、1階が実験動物舎や守衛室、2階が化学科、講義室、3階が細菌学科である。

ちなみに、小堀桂一郎『若き日の森鷗外』（1969）には、コッホの衛生学研究所は「建物の2階を借りて開いているにすぎない。1階には別のオフィスがあり、研究所の実験動物用の室のみがその一隅を借りていた」とあるが、この記述とは合わない。

当時、この建物のとなりに大きな博物館（現在のヨーロッパ文化博物館）があり、その博物館の管理室がこの建物の一部を使っていた。

文献：Hahn, J., Gaida, U. & Hulverscheidt, M. 125 Jahre HygieneInstitute an Berliner Universität en. 2010.

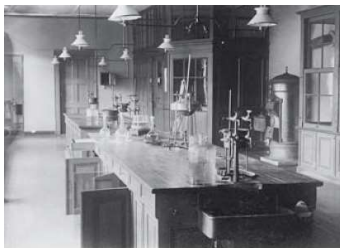
衛生学研究所の内部

1階の実験動物舎

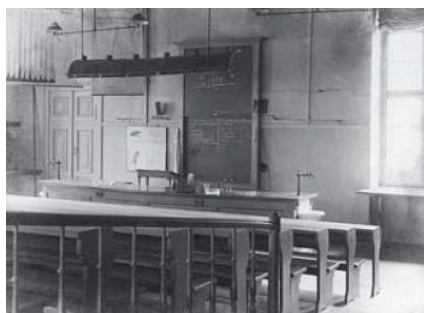


Tierstall des Hygiene-Institute, 1891

3階の細菌学・微生物学の実験室



2階の講義室（階段教室）



"125 Jahre HygieneInstitute an Berliner Universitäten
"Charité - Universitätsmedizin Berlin. 2010

実験室のコッホ



ブロック『ローベルト・コッホ』シュプリンガー・フェアラーク東京

衛生学研究所の125周年記念誌(2010)には、内部の写真がたくさん載っている。

左上の写真は、1階の実験動物舎である。

2階には大きな講義室があった。右上の写真のように階段教室になっている。

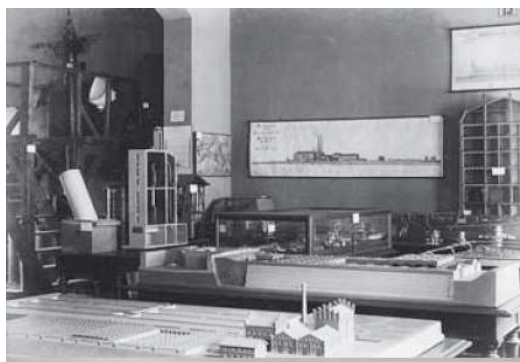
3階は細菌学科が使っていた。細菌学・微生物学の大きな実験室（写真左下）、があり、ここで講義もおこなわれた。また、所長のコッホの仕事部屋（写真右下）や、研究員の研究室や住居もここにあった。

文献：Hahn, J., Gaida, U. & Hulverscheidt, M. 125 Jahre HygieneInstitute an Berliner Universitäten. 2010.

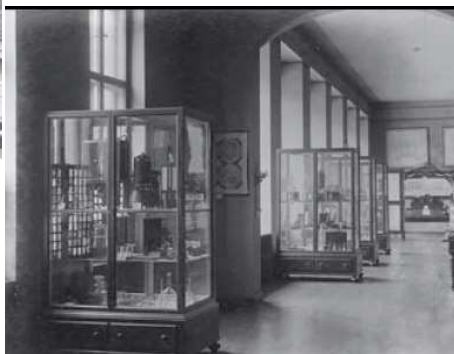
衛生学博物館

衛生学博物館

水衛生の展示



食物衛生の展示



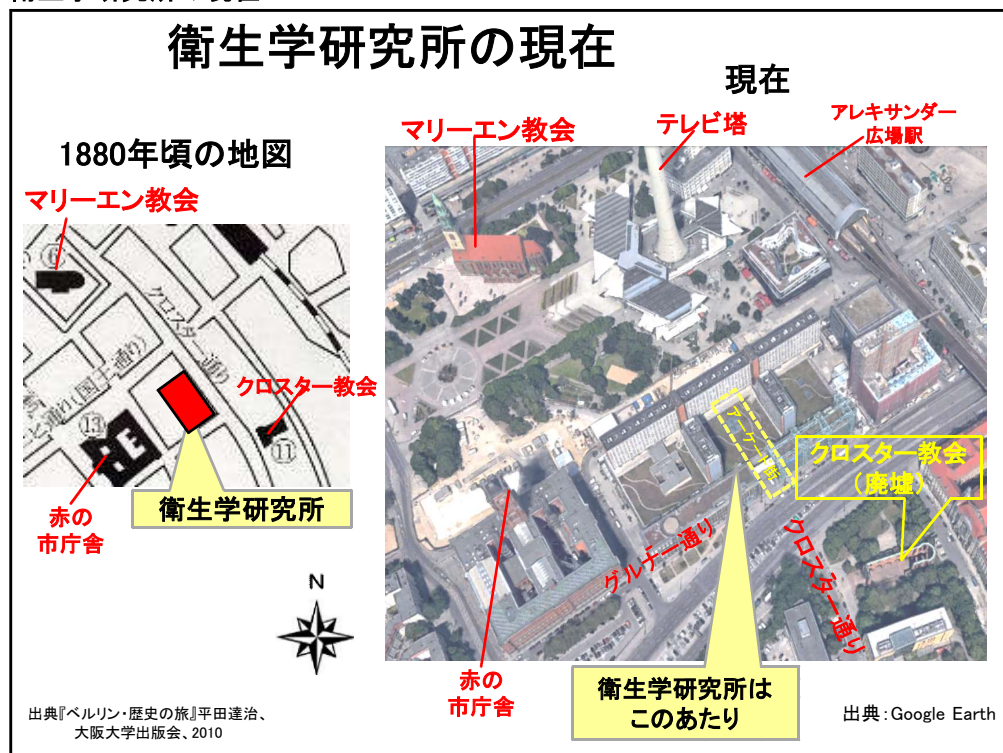
"125 Jahre HygieneInstitute an Berliner Universitäten" Charité - Universitätsmedizin Berlin. 2010

この研究所には、衛生学博物館も併設され、コッホはその館長もつとめていた。

少し前の1883年に、ベルリンでドイツ衛生・公衆衛生博覧会が開かれた。この博覧会では、衛生学の最新の機器と技術が展示された。コッホの王立保健庁の研究所も一般公開された。当時のコッホの名声もあって、半年間で90万枚の入場券が売れた。こうした展示は、細菌学の知識を大衆に普及させるのに大いに役立った。ここで作られた資料が、衛生学研究所内に展示された。

写真に示すように、水の衛生や食物の衛生についての展示があった。博物館は、大衆への啓蒙手段として大きな意味を持っていた。

衛生学研究所の現在



クロスター通りにあった衛生学研究所の建物は、世界大戦で焼失し、現在ではその跡形もなくなっている。左は1880年頃の地図である。右側はこの地域の現在の写真である。

まず気がつくのは、クロスター通りが変わったということである。昔のクロスター通りは、右下から左上に伸びていたが、現在は、グルナー通りで途切れてしまっている。

昔の衛生研究所があった場所は、大きなショッピングモールでふさがっている。このあたりは、第二次世界大戦で破壊され都市計画で整備されたため、昔の面影をまったく留めていない。アレキサンダー広場駅やテレビ塔のすぐ近くである。

クロスター通りをはさんで、研究所のはす向かいにあったクロスター教会は残っているが、廃墟となっている。

クロスター通りのマリーエン教会と、グルナー通りの「赤の市庁舎」は、当時のまま残っている。

ツベルクリン・スキャンダル

コレラ研究が完了して、1889年から、コッホは、念願の結核の治療薬の研究に戻ることができた。

1990年にベルリンで開かれた国際医学会議で、コッホは結核に対する治療法を発見したと示唆した。それをツベルクリンと命名した。世界的権威のコッホの言うことなので、このニュースは全世界に広がり、社会的な反響をもたらした。

何千人という結核患者が、ヨーロッパやアメリカからコッホの治療を求めてベルリンに集まった。

クイズ：二葉亭四迷、正岡子規、国木田独步、樋口一葉、石川啄木、宮沢賢治。いずれも日本の有名な文学者であるが、彼らの共通点は？

彼らの共通点は、結核で早死したことである。もし、彼らが、コッホ以後の治療法が確立してから生まれてきていたら、結核から回復し、夭折することなく、もっと多くの傑作を生み出したはずである。当時、結核は死因の7分の1を占める重病であり、結核にかかると、打つ手がなく、死を待つばかりであった。だから、絶望した患者は、少しでも生きる希望を与えられて、コッホのもとに集まった。クロスター通りのコッホの研究所の前で患者たちは建物を見上げたという。ホテルは結核患者で満員となり、宿がとれない患者は野宿したほどである。命がかかっているのだから、必死になるのは当然である。

シャーロック・ホームズの作家のコッホ評

また世界の医師もベルリンのコッホのもとを訪れた。その数1000人以上という。

その中のひとりにコナン・ドイル（1859～1930年）がいる。彼はエジンバラ大学医学部を出た医師であるが、イギリスの田舎で開業してもあまり患者が来なかった。ここまではコッホと同じような経歴である。そこで、ドイルは、患者を待つ暇な時間に小説を書くようになった。

1890年、試行錯誤していたドイルは、コッホの発表を聞いて、ベルリンへ向かった。彼は結局コッホに会

うことはできなかったが、いろいろと取材して、雑誌『レビュー・オブ・レビュー』に投稿した。この中で、コッホのことを「クロスター通りの隠遁者」と呼んで揶揄した。「今のベルリンでコッホを見ることは難しい。コッホ菌を見る方がよほど簡単だ。コッホをひと目でも見たい外来者は、クロスター通りの衛生博物館の長い灰色の壁を見上げ、その建物のどこかでコッホが努力していると考えて、みずからを慰めなければならない。偉大な細菌学者は自分自身の研究課題だけに没頭している。」

そして、いろいろ調べてみたが、ツベルクリンは治療効果はあまりないと結論している。この記事が、イギリスにおいて最初にツベルクリンを批判した記事となった。

ベルリンにいたときに、ドイルは眼科医になろうと思い立ち、ウィーンで勉強し、ロンドンで開業したが、ひとりも患者がこなかった。そこで、ドイルは医師を廃業して、小説で食っていくことにして、シャーロック・ホームズに本格的に取り組んだ。こうして作家として大成功を収めることになった。もしコッホに会いにベルリンに行かなかったら、ドイルは田舎の貧乏な開業医で終わっていたかもしれない。ドイルとコッホの人生はどこか重なっている。

教授を辞任

ツベルクリンはコッホの勇み足だった。コッホはけっこう間違いも多い人だったようである。

後にわかったところでは、ツベルクリンは、結核の診断薬としては使えるものの、治療薬としての効果は低かった。（かつて日本では、結核予防法によりツベルクリン検査を学校でおこなっていたが、2005年から廃止された。）

当時は「あの偉大なコッホが言うのだからそれは真理である」というコッホ神話があった。そうした期待が強かった分、失望も大きくなり、コッホの秘密主義も手伝って、彼に批判が集中した。

1890年、47歳のコッホは、ベルリン大学教授と衛生学研究所長を辞任した。

衛生学研究所の後任として、コッホは弟子のフリュゲを推したのだが、枢密顧問官アルトーフは、それを拒み、ペッテンコーファーの弟子のルブナーを選んだ。アルトーフは、前述のように、ドイツの科学や学問に口出しした官僚である。

伝染病研究所の構想

こうした騒動の裏で、実はコッホは、新しい伝染病研究所の構想を政府と交渉していた。ツベルクリンの臨床試験をおこなうために、大学病院（シャリテ）の中に新たな研究所を作る構想である。政府も、コッホの結核治療薬の開発に期待していたので、この研究所は実現した。

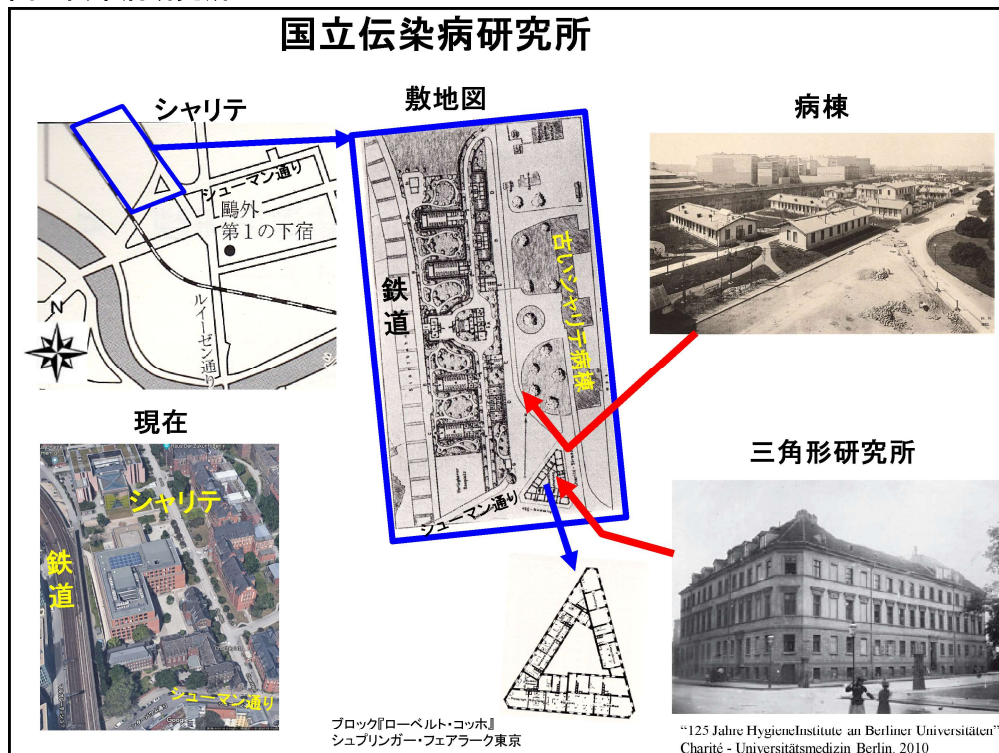
実は、コッホは、衛生学研究所での教育や基礎研究がいやになり、もっと治療にかかわる研究を進めたかった。そのために臨床研究と実験室研究を一体化できる新しい施設を望んだ。パリのパスツール研究所をモデルにしたという。そのためには、病院から遠いクロスター通りではダメであり、どうしてもシャリテの中に作る必要があった。ある意味では、ツベルクリンへの期待と失望をコッホはうまく利用したことになる。前には敵対していたウィルヒョウも、この計画は支援したという。

1891年に、国立伝染病研究所 Preußisches Institut für Infektionskrankheiten が完成した。48歳のコッホはその所長となった。

この研究所は、1891～1904年までコッホの研究の中心となり、多くの弟子を育てた（後述）。

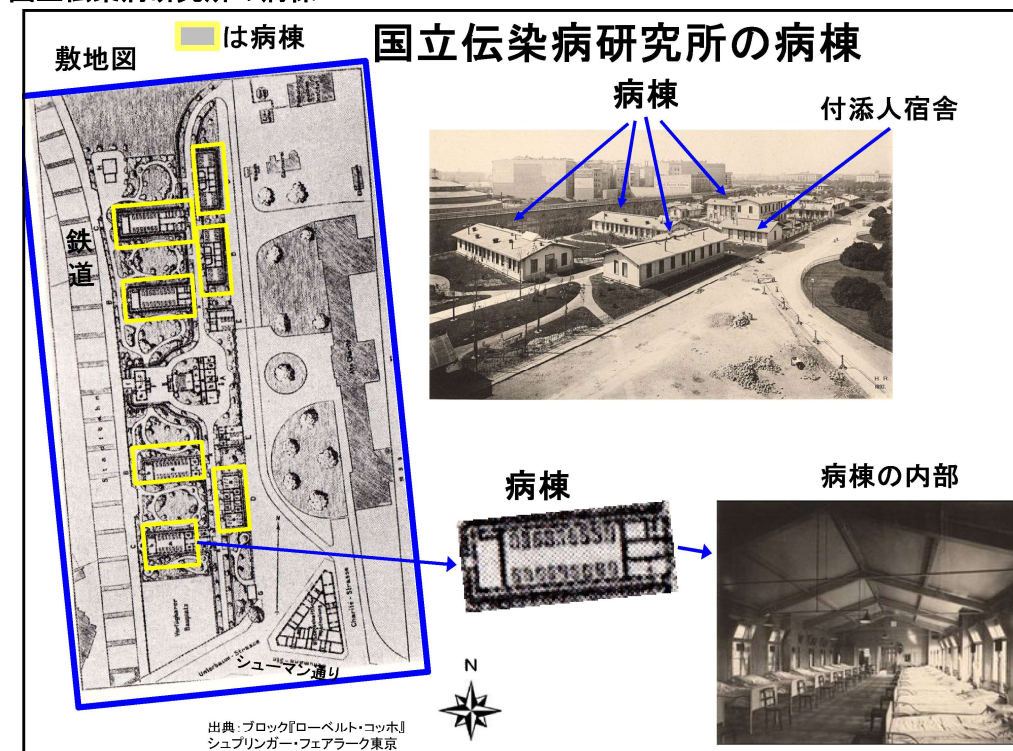
◆ベルリンのコッホの4つの仕事場

	年代	場所	主な弟子	日本人の弟子
①王立保健庁の衛生学・化学研究所	1880～1885年	Luisenstraße 57	ガフキー、レフラー	緒方正規
②衛生学研究所	1885～1891年	Klosterstraße 32-36	プファイファー、ベーリング、プファール、エスマルヒなど	北里柴三郎、森鷗外
③国立伝染病研究所	1891～1900年	Schumannstraße (Triangel)	ベーリング、エールリッヒなど	北里柴三郎
④国立伝染病研究所（後のコッホ研究所）	1900～1904年	Nordufer 20	ワッセルマンなど	



左上の地図のように、国立伝染病研究所は大学病院（シャリテ）の敷地内に建てられた。真ん中は敷地図である。西側が鉄道の線路であり、南側はシューマン通りである。敷地の西半分には、6つの病棟が並んで建っている。敷地の東半分は、古いシャリテ病棟があり、その間は公園・緑地になっている。図の右上に小さく書かれているのは、ウィルヒョウの病理研究所の一角である。シューマン通りには、三角形の建物があるが、これは「三角研究所」(Triangel)と呼ばれた。右上の写真は、三角研究所の上から、病棟の建物を眺めたものである。右下の写真は、三角研究所をシューマン通りから眺めたものである。このように、臨床研究をおこなう病棟と、実験室研究をおこなう三角研究所が並んでおり、コッホがめざした臨床研究と実験室研究の一体化という理念が実現された。左下の写真は、現在のシャリテである。シューマン通りと西側の鉄道線路は昔のままだが、建物はすべて変わってしまっている。三角研究所も跡形もない。後述のように、国立伝染病研究所は、1900年にシャリテの改築に伴って、取り壊された。

国立伝染病研究所の病棟



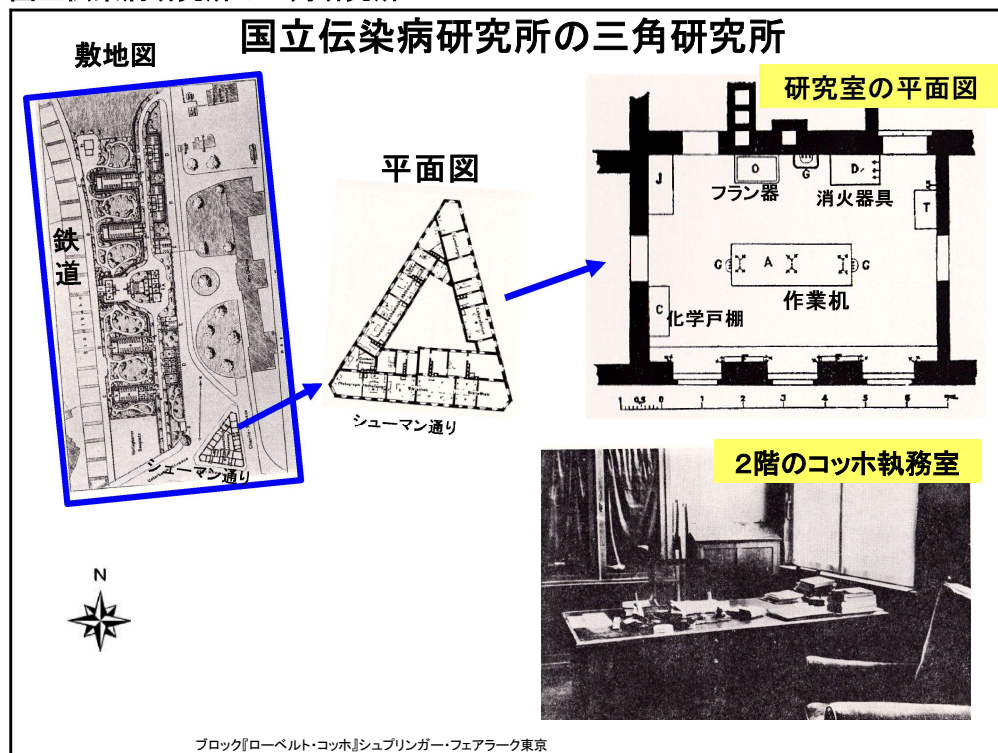
右上の写真（再掲）は、三角研究所の上から、病棟の建物を眺めたものである。

左側の敷地図で、黄色で囲んだ建物が病棟であり、6つの病棟が見える。その間には付添人宿舎の建物が並ぶ。ほかにも消毒室、解剖室などがあったという。

真中下の図は、病棟の建物を拡大したものである。大きな部屋の両側にベッドが並んでいるのがわかる。研究所全体では128床あった。

右下の写真は、病棟の内部を撮ったものである。白いシーツのベッドが並んでいる。天井が高く、採光のために窓が大きくとってある。現代のわれわれからみると、あまり入院したいと思わない殺風景な室内であるが、当時としては、院内感染を避けるための最新式的设计であった。

国立伝染病研究所の三角研究所



真中の図は「三角研究所」の平面図である。三角形の中庭を囲んで3つの棟がある。角の部屋は、不規則な形をしている。この建物は、もとは集合住宅であったが、改修して研究室にした。各部屋は狭かったが、それでもクロス过道の衛生学研究所よりはずっと広く、コッホは満足した。

右上の図は、三角研究所内の典型的な研究室をあらわしている。真ん中に作業台があり、両側に流しがある。化学戸棚、フラン器、消火器具などが並んでいる。それほど大きな部屋ではない。

右下の写真は、コッホの執務室であり、建物の2階にあった。

研究所内には20人の助手とそのための研究室があった。

この三角研究所で仕事をした研究者には、ベーリングやエールリッヒ、北里柴三郎などがおり、いずれも細菌学史上の有名な学者である（後述）。

離婚

国立伝染病研究所が軌道にのってからは、コッホは運営を弟子たちに任せ、みずからは伝染病の現地調査や対策のために海外に出ることが多くなった。

もうひとつの変化は、私生活において、妻エミーとの仲が悪くなり、1893年に離婚したことである。エミーは、以前の町医者の妻という静かな落ち着いた生活を好み、世界を飛び回る生活には耐えられなかったようだ。とはいえ、田舎医者だったコッホに誕生日プレゼントとして顕微鏡を送り、研究者への道を開き、彼の研究を手伝った糟糠の妻エミーと別れて、すぐにコッホは30歳年下の女性と結婚した。現代であればスキャンダルすれすれだろう。

再婚相手は画家か、二流の女優か、有名な女優か

コッホは若い美術学生のヘドヴィッヒと仲良くなり、1893年、離婚直後に再婚した。コッホ50歳、ヘドヴィッヒ30歳の年の差婚である。

ヘドヴィッヒは、画家だったとする説と、女優だったとする説がある（小川，1985）。

例えば、ウンガーの『ローベルト・コッホ』254ページには次のように書かれている。コッホが肖像画を描いてもらうために、ある画家のもとを訪ねると、若い娘の肖像がかかっていた。「何という金髪の美しさ、何という愛らしさだろう！」、コッホは一目惚れし、そのモデルが画家の17歳の弟子であることを聞き出し、それでヘドヴィッヒと知り合った。ブロックの伝記には「若い美術学生」とだけ書いており、出会いの経緯などは書いていない。

一方、二流の女優だとしたのは、メチニコフの『近代医学の建設者』（岩波文庫）である。次のように書

かれている。

医学の生涯に入った初めに、コッホは若い婦人と結婚した。この婦人はきわめて心のすぐれた妻であったし、申し分のない母親であった。夫婦間に一人の娘ができた。・・・

(コッホは) 毎日の仕事の疲労を癒すために、彼は実験室の近くにあった「レッシング劇場」に足繁く出入した。そこに二流の役をつとめていた若い才智ある一人の女優が彼を魅惑した。ここからロマンスが起って、コッホはその最初の妻と別れ、この若い夫人と結婚した。この出来事は、いうまでもなく、物議の嵐をまき起こした。一八九二年に私も出席したドイツ医学会では、コッホの結婚は終始彼の同僚間の話題の種となり、彼の科学における優秀なことも何も容赦なく、由々しい誹謗的となった。そのロマンスは確かに学会の総ての報告演説よりも、教授たちに興味をおこさせた。

メチニコフ (宮村定男訳) 『近代医学の建設者』岩波文庫。

メチニコフもこうした暴露話を書くことに気がとがめたようで、「私がここに挙げた事実は、コッホのロマンスの基になったような感情が、天才の活動の力強い展開に重要な意義をもっていることを、改めて立証するものである。・・・それゆえ偉人の家庭生活の事実は、その伝記の作者によって隠蔽されないことがかえって望ましいのである。」と、まじめに言い訳しているが、それにしてもコッホ夫人の職業について確かな取材にもとづいて書いてほしかったものだ。

また、後述のように、コッホが来日したとき、日本の新聞は、夫人について「ドイツにて有名な女優にして有数の美人である」と報道した。福田眞人『北里柴三郎』では、「踊り子あがり」としている。

熱帯医学の研究でアフリカ・アジアに移住

1896年から1900年までの4年間、コッホは、若い妻といっしょに、コッホは世界中に遠征し、感染症の研究をおこなった。

1896年、南アフリカにおけるイギリス領ケープ植民地で、「牛疫」という病気が家畜に流行した。ケープ政府は、イギリス人ではなく、ドイツ人のコッホに対策を依頼した。コッホは、若い妻を伴って、南アフリカに行き、研究した。

するとインドでペストが発生し、コッホは調査団の団長に指名され、南アフリカからインドに向かった。

さらに、ドイツ領東アフリカでペストが流行し、コッホはインドから東アフリカに回った。

帰るとすぐにイタリアやニューギニアに行き、マラリアの研究をおこなった。

このようなコッホの研究から「熱帯医学」という分野が生まれた。

コッホには、もともと放浪癖があり、こうした移動生活は合っていた。先妻のエミーはこうした生活に耐えられなかったが、若い妻のヘドヴッヒには合っていたようだ。

コッホのもうひとつの勇み足がある。1901年、ロンドンで開かれた世界結核会議において、コッホは爆弾発言をした。人の結核と牛の結核とは違うものだと言ったのである。牛乳から感染することはないので、牛乳の消毒は必要がないということである。弟子のベーリングはこの説に反対する研究結果を述べた。同じく弟子の北里はコッホを養護する結果を述べた。弟子の間でも賛否が分かれたが、のちにコッホの誤りであることがわかった。

国立伝染病研究所の移転



1896年頃から国立伝染病研究所の移転の話が持ち上がった。大学病院（シャリテ）を拡張し、研究所の病棟を吸収することになった。さらに、ベルリン郊外に大きなウィルヒョウ病院を作ることになった。ちなみにウィルヒョウはすでに引退していた（1902年に死亡）。

この新しいウィルヒョウ病院の近くに国立伝染病研究所が移ることになった。ベルリンの中心からは遠くなるが、その一方では、臨床研究と実験室研究の統一というコッホの理念にはぴったりであり、さらに研究所の規模も大きくなる。こうした利点から移転を受け入れたようだ。

1900年に新研究所が完成し、移転した。

なお、もとの伝染病研究所や三角形研究所は、1909年に取り壊されて、その場所には小児科病院が建てられた。

コッホは、この頃は外国にいたことが多かったので、この移転計画にはあまり関わらなかった。完成時にベルリンに戻ったが、すぐにアフリカへ行った。

◆ベルリンのコッホの4つの仕事場

	年代	場所	主な弟子	日本人の弟子
①王立保健庁の衛生学・化学研究所	1880～1885年	Luisenstraße 57	ガフキー、レフラー	緒方正規
②衛生学研究所	1885～1891年	Klosterstraße 32-36	プファイファー、ベーリング、プファール、エスマルヒなど	北里柴三郎、森鷗外
③国立伝染病研究所	1891～1900年	Schumannstraße (Triangel)	ベーリング、エールリッヒなど	北里柴三郎
④国立伝染病研究所 (後のコッホ研究所)	1900～1904年	Nordufer 20	ワッセルマンなど	

新しい国立伝染病研究所

左上の写真は、ベルリン郊外の新しいウィルヒョウ病院の敷地である。この病院は、現在も大学病院（シャリテ）の一部として続いている（後述）。病院の南側は広い運河になっている。

病院の敷地に接して、南東にある三角形の土地が新しい国立伝染病研究所である。住所はNordufer 20番地である。

右図のように、新しい国立伝染病研究所は三角形の敷地である。ノルト・ウーファー通り、フェーラー通り、ブッシュ通りという3本の道路に囲まれた敷地である。ノルト・ウーファー通りのすぐ南側は運河である。

下の写真は、本館を北側からみたものである。運河に面して長い正面を持つ立派な3階建てである。内部には、研究室、作業室、講義室、会議室、事務室、培養菌保管室、図書室などを備えていた。明らかに、前の三角研究所より広くて充実していた。

現在（ロベルト・コッホ研究所）

現在（ロベルト・コッホ研究所）



コッホ廟



出典：Wikipedia

国立伝染病研究所は、のちにロベルト・コッホ研究所と名前を変えて、現在まで受け継がれている。左上の写真は現在の敷地である。昔の巨大な本館はそのまま使用されている。敷地内にいくつかの大きな研究棟が建てられている。右の写真は、本館の正面である（著者撮影）。赤レンガの建物である。玄関には鷲のマークがある。この研究所の西翼部分には、「コッホ博物館」が併設されていて、自由に見学できる（入場無料）。また、左下の写真は、この建物の中にある「コッホ祠」である（後述）。現在、コッホ博物館とともに見学することができる。

ノーベル賞受賞

1904年には、60歳のコッホは、国立伝染病研究所長を退職した。彼は、1896年以降は、「所長職」をほとんど果たすことがなくなり、孤立していき、前から辞任を希望していたのである。

コッホはまたすぐにアフリカに戻った。海外遠征には現地の政府やドイツから多額の報酬や研究費が与えられたという。

研究所の所長はガフキーが継いだ。

1905年に、結核に関する研究業績により、第5回ノーベル生理学・医学賞がコッホに送られることが決まった。すでに、弟子のベーリンクが1901年に第1回ノーベル生理学・医学賞を受賞していたので、コッホは悔しい思いをしていたようだ。

なぜ師コッホの受賞は遅れたのだろうか。ブロックによると、コッホには敵が多かったこと、ツベルクリン・スキャンダルで評判を落としていたこと、などがあげられるという。

世界旅行でアメリカと日本を訪問

公職を退いたコッホは、1908年に、世界旅行をして、日本に立ち寄った。

1908年、ベルリンを発ち、アメリカに向かった。これはコッホの兄と弟がアメリカに移民して商売をしていたので、それを訪ねるためだった。ニューヨークに着いたコッホ夫妻は医学関係者から熱狂的な歓迎を受けた。アメリカの大富豪はこぞって莫大な金額を寄付した（しかし、第一次世界大戦後の超インフレによって、その価値はゼロに近くなってしまったという）。

コッホ夫妻はハワイ経由で日本に向かった。

1908年6月に日本に到着し、日本国内を旅行した。北里柴三郎やその弟子たちがコッホ夫妻につきそった。この日本訪問は面白すぎるエピソードがたくさんあるので、後で詳しく紹介したい。

その後、中国を経由して、世界一周をして帰る予定だったが、途中で、ワシントンDCでの国威会議に出るようにドイツ政府から命じられて、仕方なくアメリカに戻り、そこからドイツに戻った。

神となったコッホ

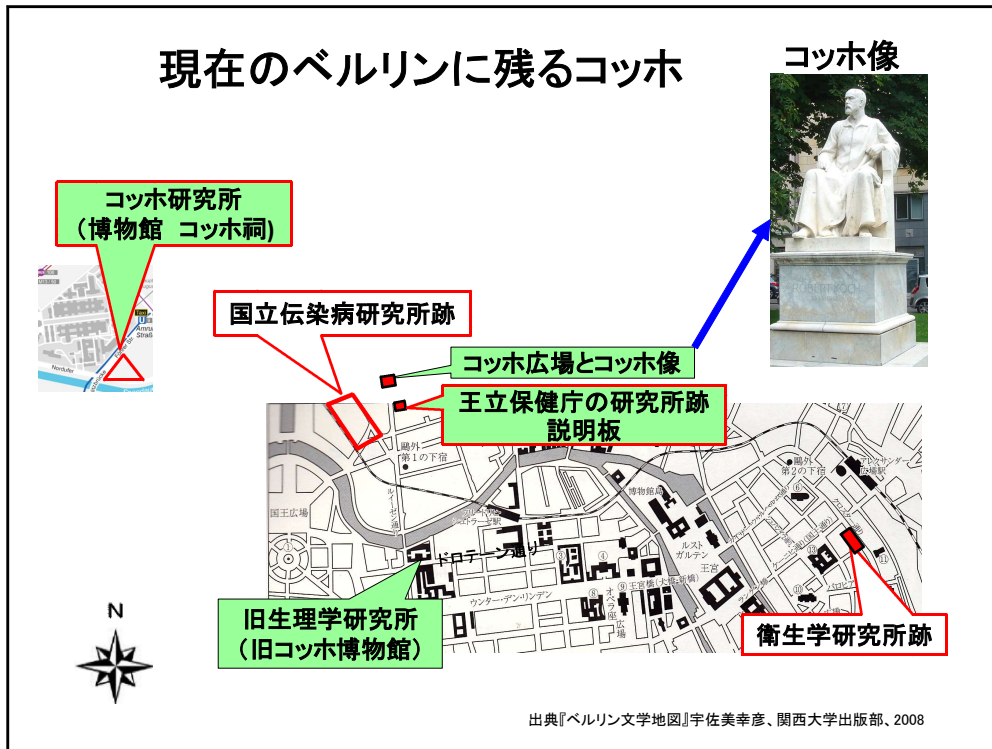
世界旅行から帰ってきて2年後の1910年、コッホは、保養地のバーデンバーデンにおいて臓発作で死亡した。享年67。

遺骨は、国立伝染病研究所の西翼にある「コッホ祠」 Mausoleumに収められた。コッホは神として祭られた。

コッホ祠は、前述のように、現在、コッホ研究所の博物館で見学することができる。

また、日本でも北里研究所の中にコッホ祠が作られた。コッホの遺髪は、メイドのハナが保存していて、このコッホ祠の中に祭られた（後述）。日本でもコッホは神として祭られた。

現在のベルリンに残るコッホ



現在のベルリンに残るコッホの痕跡をまとめておこう。

1) 王立保健庁の研究所があったルイーゼン通り57番地

王立保健庁の研究所があったルイーゼン通り57番地には、コッホの説明板が貼ってある（前述）

2) コッホ広場とコッホ像

ルイーゼン通りの北端はコッホ広場となっている。

1916年、ここにドイツの彫刻家ルイス・トゥアイロンLouis Tuaillon作のコッホ像が建てられた。

後の1933年にヒトラーの時代になってから、ドイツ人の英雄を崇拝する国粹的風潮となり、コッホ崇拝の傾向が強まった。それまでルイーゼン広場と呼ばれていたところは「ローベルト・コッホ広場」と改称された。しかし、コッホや弟子たちは第一次大戦の前後でほぼ亡くなっているため、1933年以降のナチス政権とは関係はない。

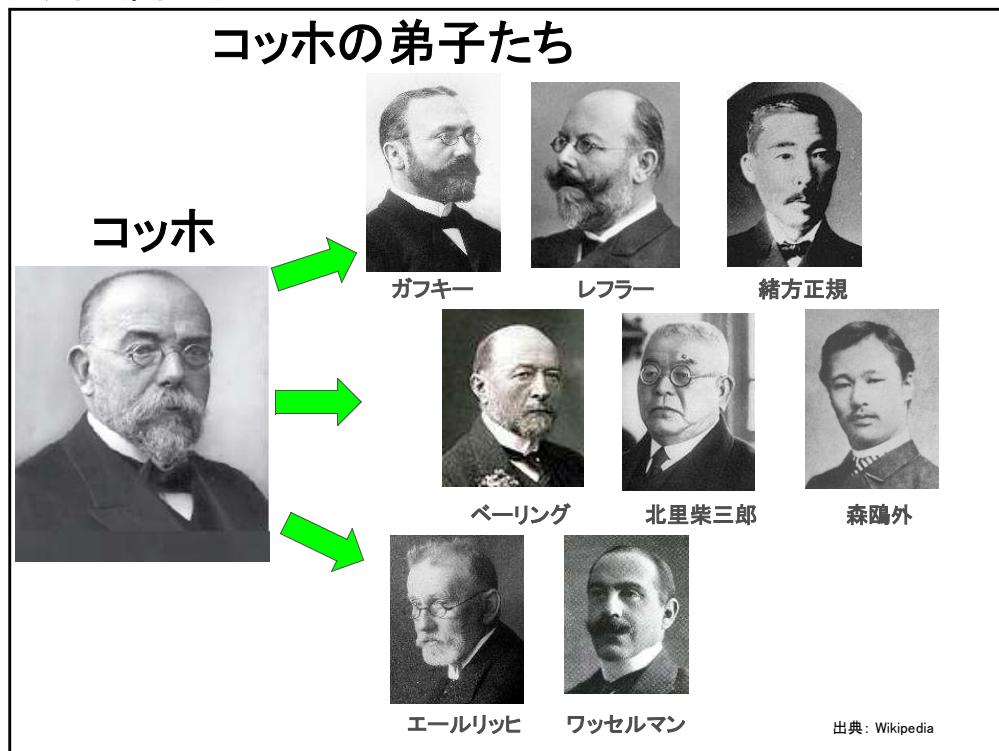
3) コッホ研究所、博物館、コッホ祠

前述のように、ノルト・ウーファー通りのローベルト・コッホ研究所には、博物館とコッホ祠がある。

4) 旧コッホ博物館

以前ベルリン大学生理学研究所だったDorotheenstraße 96の建物には、1960年に、この「コッホ博物館」が作られたが、2009年に閉館した（前述）。

そのほか、衛生学研究所や国立伝染病研究所だった場所には、何の痕跡もない。



コッホには多くの弟子がいたが、4つの時期ごとにまとめると次のようになる。

◆ベルリンのコッホの4つの仕事場

	年代	場所	主な弟子	日本人の弟子
①王立保健庁の衛生学・化学研究所	1880～1885年	Luisenstraße 57	ガフキー、レフラー	緒方正規
②衛生学研究所	1885～1891年	Klosterstraße 32-36	ベーリング、プファイファー、ブフル、エスマルヒなど	北里柴三郎、森鷗外
③国立伝染病研究所	1891～1900年	Schumannstraße (Triangel)	ベーリング、エールリッヒ、ワッセルマンなど	北里柴三郎
④国立伝染病研究所 (後のコッホ研究所)	1900～1904年	Nordufer 20	ワッセルマンなど	

●ガフキー

王立保健庁時代の弟子としては、ガフキーとレフラーが有名である。コッホの初期の助手は軍医が多かった。彼らが外に出る時は制服を着用していたという。

ゲオルク・ガフキー (Georg Gaffky, 1850～1918年) は、ベルリン大学で医学を学び、軍医となった。コッホの最も早い忠実な助手となった。1884年に腸チフス菌を発見したことで知られる。1883年のコレラ菌採取遠征においてコッホに同行した。その後、ギーセン大学の衛生学教授となった。1904年にコッホが国立伝染病研究所の所長を辞任した後、第2代目の所長をつとめた。

結核の検査で今でも用いられるガフキー号数 (Gaffky scale) として彼の名前が残っている。

●レフラー

フリードリヒ・レフラー (Friedrich Loeffler, 1852～1915年) は、ヴュルツブルク大学で医学を学び、軍医となった。王立保健庁では、みずからコッホのもとで研究をしたいと申し出て助手となった。1884年にはジフテリア菌の分離に成功した。また、口蹄疫ウイルスを発見した。ジフテリア菌を発見した。

王立保健庁時代には、日本人の緒方正規を指導した。後に、緒方は、レフラーを通して、北里柴三郎をコッホに紹介した。日本の当時の文献では、「レフレル」と表記されている。

1888年には、グライスヴァルト大学の衛生学教授となった。

●緒方正規

緒方正規 (1853～1919年) は、熊本生まれで、熊本の古城医学校で医学を学び、1880年東京大学医学部を卒業した。この経歴は北里柴三郎と同じである。1881年にドイツに留学し、ミュンヘンのペッテンコーファーに学び、1882年からはベルリンのコッホのもとで学んだ。日本人として最も早くコッホに注目したわけで、緒方の先を読む力は確かだったことになる。緒方の作ったコースを北里柴三郎や森鷗外が辿ることになった。緒方を指導したのは、コッホの助手レフラーであった。

緒方は1884年に帰国し、1885年には東京大学医学部の衛生学教授となり、日本の衛生学の基礎を作った。

のちに、東京帝国大学医科大学学長となった。

緒方は、帰国後、同窓だった北里柴三郎にドイツ留学を勧め、レフラー宛に紹介状を書いた。コッホと北里を結びつけたのは緒方である。しかし、その後、緒方が脚気菌を発見したと発表したときは、北里から批判を浴びた。逆に、北里が香港でペスト菌を発見したと発表したときは、緒方が批判した。こうして東京大学派と北里研究所派の対立構造が生まれたようだ。とはいえ、私生活においては2人は交流が続いた。

文献：野村茂『北里柴三郎と緒方正規：日本近代医学の黎明期』熊本日日新聞社、2003。

●ベーリング

衛生学研究所時代の最も有名な弟子はベーリングと北里柴三郎である。

エミール・ベーリング (Emil Behring, 1854～1917年) は、貧しい家に生まれ、陸軍医科専門学校で医学を学び、軍医となった。衛生学研究所および国立伝染病研究所ではコッホの助手をつとめた。北里とともにジフテリア抗毒素を発見した。ただし、この論文では、北里との協同研究をベーリングが単著論文として発表してしまい、これが北里がノーベル賞受賞を逸したひとつの要因とされている。

のちにコッホやエーリッヒと研究をめぐって対立した。ベーリングは、1892年にみずからベーリングという製薬会社を設立して、研究をおこなった（ベーリング社は今でも続いている）。こうした方針を後押ししたのが官僚のアルトホフであった。1901年にコッホが「人の結核と牛の結核は異なる」という爆弾発言をしたときも、真っ先に批判したのはベーリングであった。

1895年には、マールブルク大学の衛生学教授となった。

1901年、ベーリングは、血清療法の研究により第1回ノーベル生理学・医学賞を受賞した。師のコッホの受賞より4年も早く、コッホを悔しがらせた。

なお、日本の北島多一は、マールブルクのベーリングのもとで研究した。北島は帰国後、北里柴三郎のもとで研究し、北里の死後、その後継者となった。

●北里柴三郎

北里柴三郎 (1853～1931年) は、熊本生まれで、熊本の古城医学校で医学び、東京大学医学部を卒業した。

緒方正規のすすめで、1885年に、北里はベルリンに留学しコッホのもとで研究した。北里は本格的な細菌学の研究をはじめ、コッホを驚かせた。破傷風菌を純粋培養し、血清療法を発見・確立した。ベーリングとともに、ジフテリア抗毒素を発見し、この論文が後のベーリングのノーベル賞につながった。

研究者北里と軍医森鷗外の生き方の違い

1887年に軍医監の石黒忠直がベルリンにやってきて、北里に対し、ベルリンでの研究をやめて、ミュンヘンでベッテンコーファーのもとで研究せよという命令を伝えた。というのは、当時の医学の留学は、ひとつの大学にとどまるのではなく、いくつかの主要大学を回り、多様な手法を体験することを重視したからである。緒方正規も森鷗外もそうした方針で留学した。

しかし、北里は、そうした通り一遍の留学ではなく、コッホのもとで研究者として世界的な業績をあげようと燃えていたので、それを拒否した。上官である石黒に対して、北里は「門外漢に何がわかるか」と述べて、命令を拒否した。石黒は立腹した。同席した森鷗外が間に立って何とか場を収めた。

その後、北里はコッホに頼んで日本政府と直接交渉してもらい、また、石黒もコッホと会って北里の意欲を知ったので、北里はコッホのもとで研究を続けられることになった。北里の強気には驚かされるが、コッホのもとでノーベル賞クラスの発見の毎日を送っていれば、研究者として、ここで研究室を変われと言われても拒否したくなるのは当然であろう。

一方、対照的なのは森鷗外である。鷗外も、石黒から研究をやめてベルリンで軍医の仕事をするように命令された。鷗外は気乗りがしなかったが、しぶしぶ命令に従った。研究者北里と軍医鷗外の違いがあらわれた事件である。

1990年にコッホが伝染病研究所に移ると、北里もいっしょに移り、三角研究所で仕事をした。1891年には、留学期限が来て、帰国せざるをえなくなったが、ここでも北里は日本政府と直接交渉し、何とか明治天皇から留学資金をもらうことができ、1年帰国をのばした。当時の陸軍・内務省では、命令を守らないことはありえず、これも北里の強気を示す有名なエピソードである。

伝研騒動：東京大学医学部との戦い

1892年に帰国すると、すぐに伝染病研究所をみずから設立した。資金援助をしたのは福澤諭吉である。

1889年に、伝染病研究所は内務省管轄の国立に移管され、北里が所長となった。しかし、1914年に伝染病研究所は内務省から文部省に移管され、東京大学に吸収されそうになった。北里は東京大学医学部とは対立関係にあったので、所長を辞任し、私立の北里研究所を設立した。志賀潔をはじめとする職員は全員辞職して、北里に従った。これは伝研騒動と呼ばれる。文部省に移管された伝染病研究所は、現在では東京大学医科学研究所として続いている。なお、この時に建てた北里研究所の建物は、明治村に移築されて保存されている。

前述の緒方正規との論争も有名であり、背景には北里の東京大学医学部に対する強いライバル意識があった。

その後、北里は、日本医師会を創設したり、慶応義塾大学医学部の初代学部長になるなど、日本の医学の基礎を築いた。こうした活動も東京大学医学部の「象牙の塔」に対する強い批判意識がある。

前述のように、コッホは、ベルリン大学の主流だったウィルヒョウにいじめられて対抗意識を燃やしたが、それと同じ構造を北里も東京大学に対して感じたのかもしれない。

第1回ノーベル賞にノミネートされた北里

第1回ノーベル生理学・医学賞を受賞したのはベーリングであるが、ベーリングは北里とともに実験をしてジフテリア抗毒素についての論文を書いた。この論文では、北里との協同研究をベーリングが単著論文として発表してしまい、これが後にベーリングの単独受賞となった要因のひとつである。

最近、当時のノーベル賞の選考過程が公表され、第1回ノーベル生理学・医学賞候補として、北里柴三郎もノミネートされていたことが明らかとなった。最終選考の15名の中にも残ったが、いろいろな理由で受賞を逸したようだ。もし受賞していれば、戦後の湯川秀樹受賞に先んじて、戦前の日本の科学レベルを世界に証明することになっただろう。

神となった北里柴三郎

1931年に、北里は78歳で亡くなり、青山墓地に葬られた。北里研究所の中に、コッホ祠とともに北里祠も作られた。北里もまた「神」となった。これらは戦災で焼けてしまったので、戦後、新たにコッホ・北里神社として合祀された。

文献：福田真人『北里柴三郎：熱と誠があれば』ミネルヴァ書房、2008。

砂川幸雄『北里柴三郎の生涯：第1回ノーベル賞候補』N T T出版、2003。

野村茂『北里柴三郎と緒方正規：日本近代医学の黎明期』熊本日日新聞社、2003。

●森鷗外

森鷗外は1887年～88年にかけて、コッホのもとで研究した。衛生学研究所において、下水のバクテリアの研究をおこない、ドイツ語の論文を書いている。鷗外を指導したのは、コッホの助手の助手のフレンケル、エスマルヒ、フランクであり、彼らの名前は鷗外の『独逸日記』に出てくる。

●エールリッヒ

国立伝染病研究所では、前の衛生学研究所のメンバーと重なる。国立伝染病研究所から新たに加わったメンバーとして有名なのはエールリッヒとワッセルマンである。それまでは軍医が多かったが、この時期以後は、軍医は少なくなり、医学や自然科学の研究者が多くなる。

パウル・エールリッヒ（Paul Ehrlich、1854～1915年）は、ライプツィヒ大学で医学を学び、ベルリン大学医学部の助手となった。しかし、勤務していた病院で自分が結核にかかってしまったため、転地を兼ねてエジプトを旅行しながら療養し、2年間をすごした。

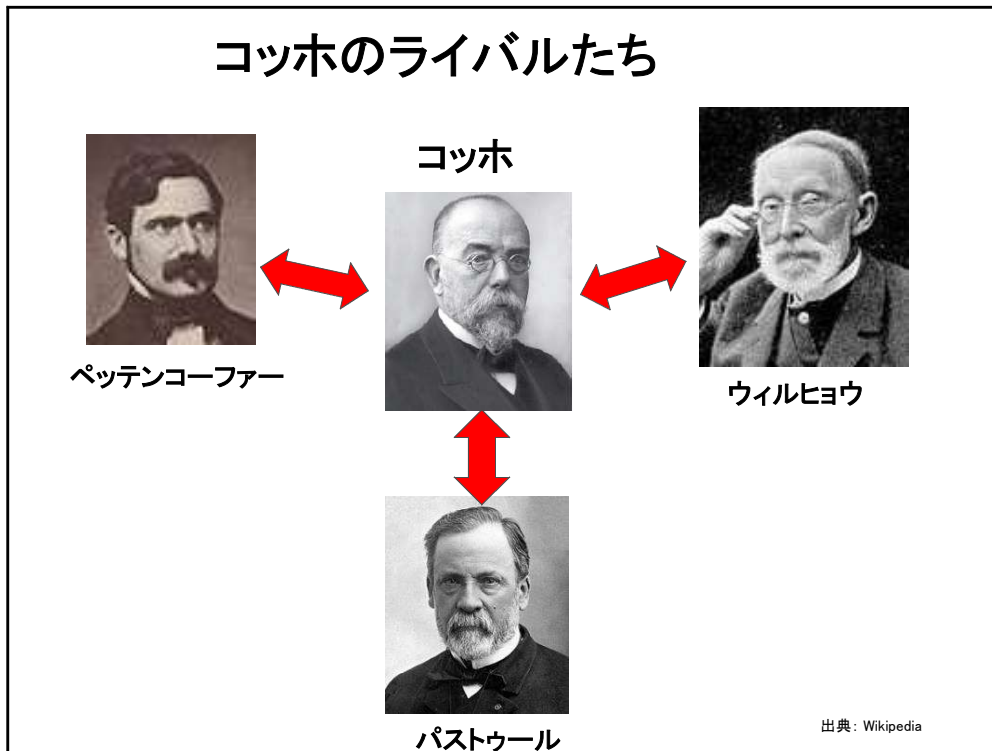
ベルリンに戻ると、シュテグリッツの地に自費で研究室を作り、研究を開始した。1891年に、コッホの伝染病研究所に招かれた。そこで、ベーリングが発見したジフテリア血清の研究をした。

1899年にはフランクフルトに移り、実験治療研究所を新設し、化学療法の研究をおこなった。1908年、免疫の研究で、フランスのメチニコフとともに、ノーベル生理学・医学賞を受賞した。

北里柴三郎の弟子の志賀潔は、1901～1905年と1912年にフランクフルトに留学し、エールリッヒに師事した。志賀には『エールリッヒ伝』（富山房、1940年）という著書がある。

●ワッセルマン

アウグスト・フォン・ワッセルマン（August von Wassermann、1866～1925年）は、ユダヤ人の家庭に生まれ、エアランゲン大学、シュトラスブルク大学で医学を学んだ。1890年にコッホの伝染病研究所で仕事をした。1900年に移転した伝染病研究所では部長となった。1906年に発表したワッセルマン反応は、梅毒のワッセルマン検査としてよく知られている。1913年からは、新設のカイザー・ヴィルヘルム実験医療研究所の所長となった。ワッセルマンの死後、妻のアリスはナチスのユダヤ人虐殺の犠牲者となった。



コッホには多くの敵がいた。弟子の中にも、ベーリングのように、後に敵対した者もいる。ここでは、ウィルヒョウ、ペッテンコーファー、パストゥールの3人を取り上げる。コッホの伝記においては、コッホをいじめる「悪役」として描かれる大学者たちである。

文献：二宮陸雄『医学史探訪』医歯薬出版。2006。

ジェッター（山本俊一訳）『西洋医学史ハンドブック』朝倉書店。1996。

●ウィルヒョウ

ルドルフ・ウィルヒョウ（Rudolf Virchow、1821～1902年）は、病理学者・医学者として知られているが、政治家として激しい言説をした。以下、その人生を追ってみる。なお、「フィルヒョウ」とか「ヴィルヒョウ」と表記されることもある。

文献：二宮陸雄『医学史探訪』医歯薬出版。2006。

ジェッター（山本俊一訳）『西洋医学史ハンドブック』朝倉書店。1996。

以下のシャリテのサイトにウィルヒョウの年譜がある。

<http://www.bmm-charite.de/biography-of-rudolf-virchow.html>

革命に参加して大学を追われる

ルドルフ・ウィルヒョウは、ポンメルン地方（現ポーランド領）の出身で、ベルリン大学医学部で、生理学者ヨハネス・ミュラーのもとで学んだ。

1848年にヨーロッパで革命が広がり、ドイツでも3月革命が起こり、ベルリンで市街戦がおこった。ウィルヒョウはこの革命に参加した。革命は鎮圧され、ウィルヒョウは大学をクビになった。首謀者はアメリカに逃亡した者も多かったが、ウィルヒョウはベルリンを離れ、ヴュルツブルク大学に職を得ることができた。

植物病理学の体系化

ヴュルツブルク大学で彼は植物病理学の基礎を作った。当時の病理学は「器官」や「組織」レベルが中心であったが、ウィルヒョウは「細胞」レベルでの病理学を体系化した。こうした考え方は、すでに1838年のシュヴァンの論文に見られたが、彼は細胞は液体から結晶化して生じると考えたのに対し、ウィルヒョウは「すべての細胞は細胞から生じる」と考えた。そのうえで、「病気とはそもそも細胞レベルでの変化である」として、炎症や腫瘍などの病気を体系的に考えた。あらゆる病気は「細胞国家」と関連し、この細胞国家は民主的に運営されているが、これが崩れると病気になる。共和主義者らしい考え方である。

ベルリン大学の病理学教授として

1856年にベルリン大学で病理学教授となり、病理学研究所の所長となった。彼は多くの弟子を育てた。

病理学研究所でウィルヒョウが集めた医学資料が、現在の医学史博物館のもとになっている。

シャリテの中には、ウィルヒョウの名前がついた場所や、彫刻があちこちに見られ、彼の影響力が大きかったことを示している。

ウィルヒョウは、自説に固執するあまり、誤った主張もした。コッホの細菌学への反応もそのひとつであ

る。独善的なウィルヒョウは「医学の教皇」とか「病理学の法王」と呼ばれた。

その後、ウィルヒョウは、病理学をないがしろにし、政治にかかわり、人類学や考古学に関心を深めていった。

政治家として、社会医学の創始者

ウィルヒョウは、40歳頃から政治を志し、大学教員のまま、市議員や国会議員となった。政治的には自由主義者であり、プロイセン政府に反対し、宰相ビスマルクと対決した。政治家として、ベルリンの上・下水道を整備するなど、公衆衛生に力を入れた。彼は社会医学の創始者と呼ばれることもある。

考古学への関心 シュリーマンへの援助

ウィルヒョウは、医学だけでなく、人類学・考古学への強い関心を示したことで知られる。

1875年に、ウィルヒョウは、シュリーマン（1822～1890年）と出会い、死ぬまで親友であった。ウィルヒョウは、シュリーマンを応援して、発掘に協力したり精神的にバックアップしたりした。シュリーマンの発掘現場に何回も足を運んだ。シュリーマンの『古代への情熱 シュリーマン自伝』（シュリーマン著、村田数之亮訳、岩波文庫、1954年）を読むと、ウィルヒョウの名前が何回も出てきて驚かされる。

社会ダーウィニズムと反ユダヤ運動への批判 ナチスの焚書リストへ

ウィルヒョウは、1874年から、ドイツ民族の民俗学的研究を始めた。彼は、当時から盛んだった社会ダーウィニズムの思想に反対だった。当時から、ドイツ人は特別に優れた古代ゲルマン人種の子孫であるといった選民純血理論を唱える学者もいた。それがやがてナチスの人種的思想に至る。

これに対して、ウィルヒョウは、頭蓋骨の研究から、古代ゲルマン民族祖先説に懐疑的であった。彼は1886年に、ドイツの小学生676万人の身体的特徴を調べ、報告書を発表した。それによると、ユダヤ人の11%は古代ゲルマン民族の身体的特徴を持っていた。これは当時の反ユダヤ運動を否定するものだった。

このため、ウィルヒョウの死後、1933年にヒトラーが焚書を行ったときに、ウィルヒョウのこの報告書は真っ先に焼かれたという（二宮、2006）。

コッホから見ると敵役ウィルヒョウ

コッホの伝記では、ルドルフ・ウィルヒョウ（Rudolf Virchow、1821～1902年）は悪役である。例えば、ウンガー（宮島・石川訳）『ローベルト・コッホ』（富山房、1943）には、コッホを主人公とする映画の要約が載っているが、その中で、ウィルヒョウは、最後はコッホの偉大さを認めるのだが、そこまではずっとコッホをいじめ続ける居丈高な悪役である。

コッホの若い頃は、ウィルヒョウはあこがれの医学者であり、ベルリン大学でウィルヒョウの講義を聴いたこともある。また、ウォルシュタインに住んでいる時に、考古学の調査で訪ねてきたウィルヒョウを案内したこともある。しかし、コッホが炭疽菌や結核菌の研究をおこなって、ウィルヒョウに評価をもとめた時は、冷たくあしらわれてしまった。

ウィルヒョウは、「結核菌が結核を引き起こすのは例外的である」とか、「血清療法は体液病理学への逆行である」と述べて、伝染病の微生物説を否定していた。それはひとりウィルヒョウだけのことでなく、当時の医学界の一般的な考え方であった。

コッホがベルリンの王立保険庁にきた1880年は、ウィルヒョウは59歳であり、大学に君臨し、強い発言力を持っていた。王立保険庁が作られたことは、ウィルヒョウにとっては無礼なことであり、コッホたちはウィルヒョウ一派から遠ざけられた。成功をおさめた1882年の生理学会での発表も、コッホは病理学会で発表したかったか、病理学会はウィルヒョウが中心だったため、生理学会で発表せざるをえなかったという。

コッホがインドから凱旋帰国した際には、さすがのウィルヒョウも認めざるをえなかった。

しかし、コッホが1885年にベルリン大学の衛生学教授となったときは、ウィルヒョウはコッホに敵対的な態度をとり、衛生学研究所をシャリテから遠ざけた。ウィルヒョウにとって、衛生学は、それ自体の方法や考想を持たない応用科学にすぎず、衛生学研究所を作ることには反対だった。

しかし、コッホが世界的な業績をあげて、1891年にシャリテの隣に伝染病研究所を作る際には、それを認めざるを得なかった。

ウィルヒョウは、1892年にはベルリン大学の学長をつとめるなど、大学に君臨していた。1902年に、コッホがツベルクリン・スキャンダルでつまづいたときは、ウィルヒョウはコッホを擁護した。1900年頃に伝染病研究所の移転問題がおこったときは、すでにウィルヒョウも80歳であり、その2年後には亡くなっている。

●パストゥール

ルイ・パストゥール（Louis Pasteur; 1822～1895年）は、フランス生まれで、パリの高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリオール）で化学を学んだ。ストラスブール大学、リール大学で教授となった。リール大学にいたときに、学生の父親が訪ねてきた。彼は醸造工場を営んでいたが、ときどきワインがでかずに腐ってしまうので、どうしたらよいかという相談だった。パストゥールは、これが腐敗によることを確かめ、低温殺菌法を発明した。この殺菌方法は今でも牛乳などで用いられている。彼の名前は一般動詞になっており、「パストゥールする」pasteurize といえ、低温殺菌するという意味である。「ググる」とか「ウィキる」といった用法のはじまりだろうか。

1857年に、母校の高等師範学校の教授となった。1861年に『自然発生説の検討』（翻訳は岩波文庫）を著し、それまでの「生命の自然発生説」を実験的に否定した。

1867年、46歳の若さで脳卒中で倒れ、半身不随になった。ジュラ地方で数年間療養し、しだいに回復した。パストゥールは医師ではなかったが、医学に大きく貢献した。パストゥールの最大の業績は、ワクチンの発明である。ワクチンによって細菌の毒を弱めることができるというもので、1885年には狂犬病の予防接種に成功した。ワクチンは19世紀最大の発見とされ、ここから医学は新しい段階に入った。

また、イギリスの外科医リスターは、パストゥールの著作を読んで、消毒法を開発し、無菌外科手術を実現させた。また、1888年、パストゥールは、パリにパストゥール研究所を作った。この施設は、病院と研究所が一体となり、臨床研究と実験室研究を統合するためのものであり、コッホの伝染病研究所のモデルとなった。

1895年、パストゥールは73歳で病死した。彼の遺骸はノートルダム大聖堂に葬られた。パストゥールは、フランス人から圧倒的な人気を博し崇拝されたので、遺骸はパストゥール研究所の地下聖堂に移された。こうした聖堂が作られるほど国民から崇拝された点でも、コッホと似ている。

コッホとパストゥール

パストゥールはコッホより20歳年上だったが、対立関係にあった。研究領域の名前についても、コッホは「細菌学」という言葉を使うが、パストゥールは「微生物学」と呼んだ。

前述のように、1881年のロンドンでの国際医学会議で、パストゥールはコッホの研究を賞賛したが、その後、ふたりは対立関係となった。1883年のコレラ菌採取では、コッホが勝った。帰国したコッホは国家的な歓迎を受けた。背景には独仏の政治的対立と、世界分割政策があった。パストゥールの「科学には国境はないが、科学者には祖国がある」という言葉も知られる。

ふたりの業績は互いに補い合うものである。コッホは病気の原因となる細菌を特定することに力を入れ、パストゥールは病気の治療の原理を開発した。互いを補強している。

●ペッテンコーファー

コッホとの論争でコレラ菌を飲んだペッテンコーファー

マックス・フォン・ペッテンコーファー（Max von Pettenkofer、1818～1901年）も、波乱に富んだ人生を送った人であった。貧しい家に生まれて、身を立てるために薬剤師となった。その後、医学も勉強し、医学者として多くの業績をあげた。ミュンヘン大学は、彼のために、ドイツ初となる衛生学講座を作り、その初代教授として迎えた。そして、「近代衛生学の父」とか「実験衛生学の父」と呼ばれる有名な衛生学者となった。バイエルンを代表する大科学者とたたえられた。ライプツィヒには、彼をたたえたペッテンコーファー通りがある。

ところが、コッホが細菌学を打ち立て一世を風靡すると、ペッテンコーファーの衛生学は時代遅れのように見られ始めた。

コッホがコレラ菌を発見すると、ペッテンコーファーは「この細菌はコレラの原因ではない」と主張し、講演中にみずからコレラ菌を飲んだ。幸いにも彼はコレラを発病しなかったものの、社会はコッホを支持するようになった。

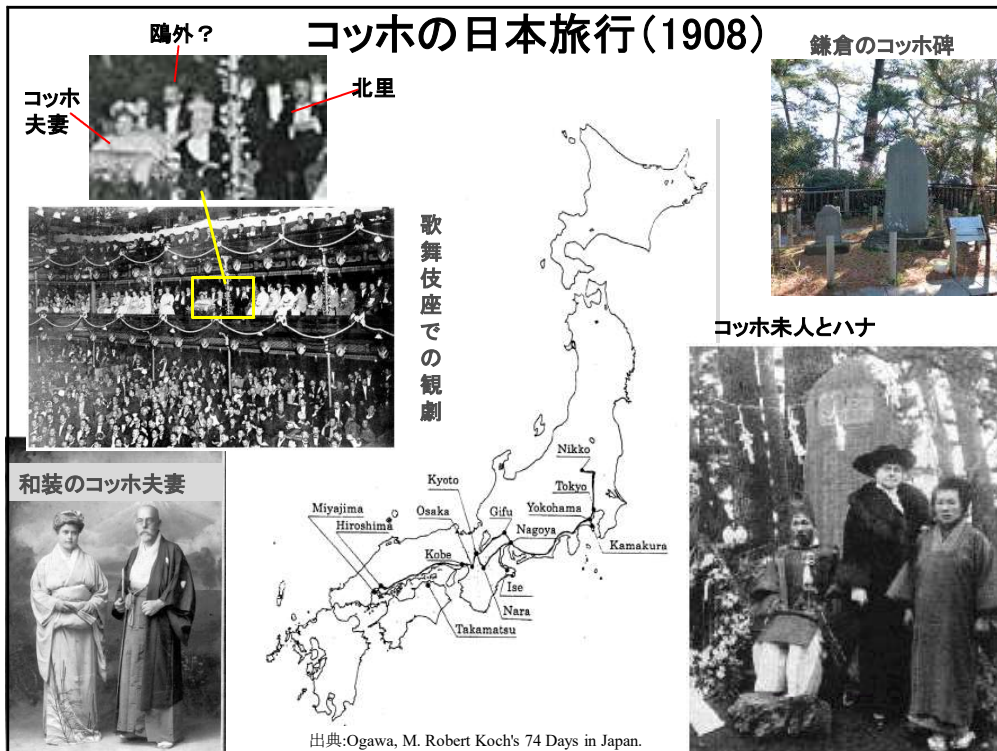
ペッテンコーファーは、晩年はうつ病となってしまう、ピストル自殺をとげた。

コッホと二股をかけた森鷗外

森鷗外は、ミュンヘンのペッテンコーファーのもとで1年間研究した。鷗外はペッテンコーファー教授を敬愛し、最初の孫には、彼の名前をとって森眞章（マックス）と名づけたほどである。

しかし、鷗外は、ペッテンコーファーの後、ベルリンでコッホの指導を受けた。陸軍からそう命令されたからであるし、明治初期の陸軍の留学生はあちこちの大学を回るのが常だった（緒方正規も同じ）。とはいえ、鷗外は、論争中のコッホとペッテンコーファーの間で、二股をかけたことになる。ペッテンコーファーにとってはあまり気分のよいものではなかったかもしれない。

コッホ来日



1808年にコッホは日本にやってきて、2ヶ月半を過ごし、あちこち旅行してまわった。

私がこのことを知ったのは鷗外記念館の特別展であった。ある集合写真では、300人くらいの日本人がコッホといっしょに写っている。日本人はすべて正装して、荘厳な顔をしている。ノーベル賞を受賞したばかりのコッホ博士の来日が、当時の日本では国際的なビッグイベントだったことがわかり、面白かった。この写真を探したが、ネットでは見つからなかった。この特別展で小川（1985）の論文が配布されていたので、読んでみたら、面白すぎるエピソードばかりだった。ここではこの論文をもとに紹介したい。

国をあげての歓迎

1908年6月12日、コッホ夫妻はハワイ経由で横浜港に着いた。出迎えたのは、北里柴三郎とその弟子たちである。そのときの歓迎ぶりは大きく報道され、関係のない夏目漱石でさえ、このことを日記に書いているという。

コッホが日本で辿ったコースは地図に示すとおりである。

すぐに東京へ行き、6月26日まで、多くの歓迎会に参加した。6月16日の公式の歓迎会には、各界から1400名が出席した。

歓迎会でコッホは「睡眠病について」という講演をおこなった。コッホはなぜアフリカの睡眠病という日本人にはピンとこない話をしたのだろうか。実は、事前に演題を決めるときに、北里は日本で関心の高い結核や腸チフスについての話を望んだが、コッホは当時の自分の関心にこだわった。見ていたコッホ夫人が、北里に「日本にない睡眠病などよりも、日本に切実な問題をお願いしたらよいでしょう」と助け船を出したが、コッホは頑として聞かなかった。

その日の夜は、歌舞伎座で「義経千本桜」などをみた。左中の写真のように、会場は超満員である。その中央で観劇しているのはコッホ夫妻である。左上の写真は、それを拡大したものである。よくみると、右側に北里柴三郎が立っているのがわかる。北里はコッホの横で息子のようにつき従っている。

劇のストーリーは森鷗外があらかじめドイツ語訳して、冊子として配られた。鷗外自身も、コッホのとなりで通訳をつとめた。この写真で、コッホ夫妻の真ん中に座っているヒゲの男が鷗外かもしれない。当時、鷗外は陸軍軍医総監・陸軍省医務局長の要職にあった。

森鷗外は、コッホのイベントについて細かい日記を残した。

その後、伝染病研究所、東京大学を視察し、明治天皇がコッホ夫妻に謁見した。まさに国をあげての歓迎である。

来日した1908年は政治的なタイミングもよかった。日本とドイツの政治的関係はよかったが、第一次大戦では、日本とドイツは敵国となり、中国で両国は戦争をした。この時に前述の伝研騒動がおこったことは偶然ではないようだ。もしこうした時にコッホが来日しても、これほどの歓迎は受けなかっただろう。

夫人のわがままに手を焼く北里の弟子

6月27日から日光に行って滞在したが、この地の気候を夫人が嫌ったため、急きょ戻り、7月2日には鎌倉に移動した。夫妻は鎌倉がとても気に入って、7月26日まで、ほぼ1ヶ月、ここで静養した。コッホは毎日釣りをしていた。

後になって、1912年に、鎌倉稲村ヶ崎の鎌倉海浜公園にコッホ記念碑が建てられた（右上の写真、後述）。

当時の新聞には、「65歳のコッホは40歳の若い夫人を同伴し、彼女は元女優である」と書かれた。前述のように、再婚相手のヘドヴィッヒについて、画家とする説と女優とする説があったが、当時の日本では「ドイツにて有名な女優にして有数の美人である」と報道された。

2ヶ月半の日程のほとんどを北里柴三郎や弟子の宮島幹之助、志賀潔らが夫妻につきそった。北里みずからが献身的にコッホに尽くした。コッホの来日では、北里は私費で6000円を使った。今のお金にして600万円ほどになる。北里はコッホを「人類の恩人」と呼び、「孝行な息子がその父親に尽くすように、コッホ先生のどんな希望をも容れて、心細かに世話を」した（宮島、1943）。例えば、ヘビースモーカーだった北里に、来日したコッホはタバコは体に悪いと諭した。すると、その日から北里はタバコをやめてしまった（コッホ禁煙法）。

しかし、弟子たちは苦労したようだ。次のようなエピソードがある。夫人のヘドヴィッヒは、わがままで、志賀潔たちを召使いのように使った。志賀は腹を立てて、とうとう我慢ができなくなり、旅の途中で帰ってしまった。志賀潔は、ドイツに留学し赤痢菌を発見した大学者であるから、いくらコッホ大先生の夫人とはいえ、またいくら恩師の北里先生の命令とはいえ、アゴで使われることにはプライドが許さなかったのだろう。

ネコの値段をつり上げたコッホ

7月26日に鎌倉を出発し、箱根をへて、30日には名古屋に着いた。休む暇なく、岐阜、奈良、京都、大阪、神戸、宮島とまわり、8月20日に横浜に戻った。各都市ごとに医師会や名士の歓迎会が開かれた。神戸では、和服をプレゼントされ、それを着て撮ったのが左下の写真である。

なお、コッホはペスト対策についていろいろとアドバイスをしたが、その中で「ペスト菌を運ぶネズミを捕るために、すべての家庭でネコを飼うのがよい。そして警察がそれをチェックすべし」と言ったそう。これが新聞に報道されると、ネコが売買されるようになり、その値段もつり上がったというエピソードがある。

8月24日に、横浜港からアメリカに向けて出発した。同じ船で内務大臣の原敬もアメリカに渡ったという。

当初の予定では、9月まで滞在し、北は仙台、南は長崎まで足を伸ばし、さらには中国をへてドイツに帰る予定だったが、途中でアメリカの会議出席を命じられたため、8月で予定を打ち切り、アメリカに戻った。

日本式究極のおもてなし ハナ

コッホはもともと日本にとっても興味があったので、この旅行は大満足だったという。これだけ国をあけての「おもてなし」を受ければ、誰しも満足だろう。

コッホ夫妻には、多くの女性が女中として世話をしたが、その中で、村木きよ（通称ハナ）という19歳の女性が、夫人からとても気に入られた。夫妻は、ハナにベルリンにいっしょについてきてメイドになってほしいと頼んだ。北里もハナに頼んだ。ハナは同意して、帰国する夫妻に同行した。ハナはベルリンでずっと夫妻の世話をした。驚きのエピソードである。

コッホの死後、2年ほどして、ハナは未亡人とともに日本に戻ってきた。そして、コッホ碑の前で撮ったのが右下の写真である。村木きよはその後どうなったのだろうか。

コッホへの宗教的傾倒：遺髪のエピソード

和装のコッホの写真に見られるように、当時のコッホは、ほとんどハゲていた。宮島幹之助は、ハゲたコッホの頭の形が「孔子」に似ているとして、まるで神のようにあがめている。

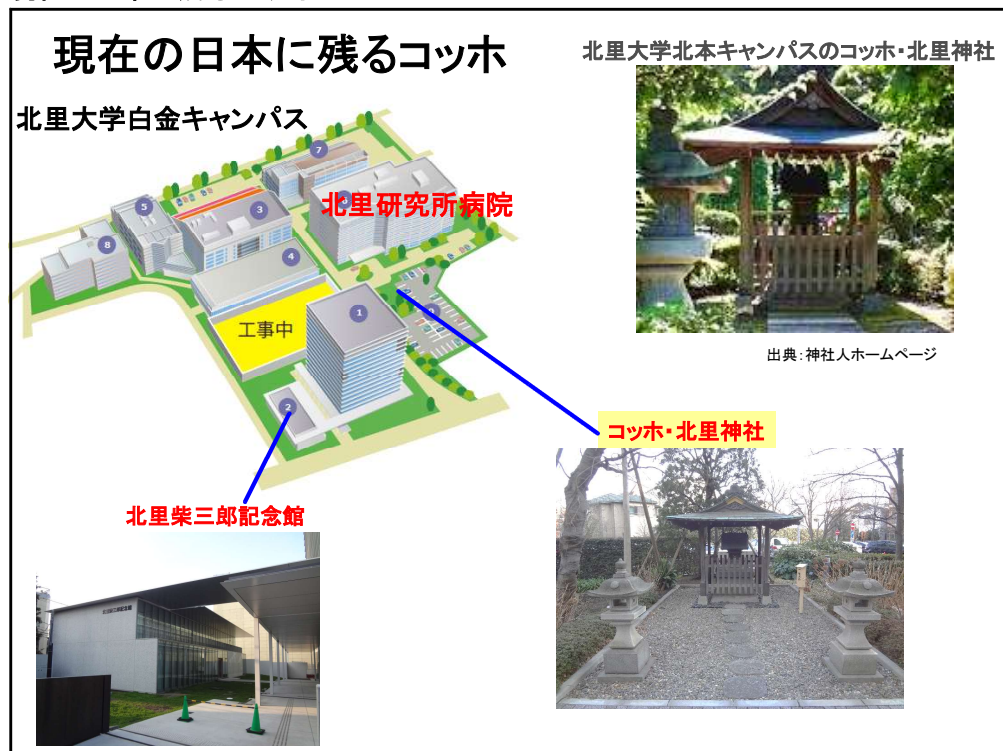
ハゲているとはいえ、少しは毛髪が残っていて、コッホは時々理髪した。コッホが日本にいる間、その毛髪を保存しておくようにと、北里はハナに極秘に命じておいた。コッホの死後、この遺髪を本尊として、北里はコッホ祠を作った。あるいはコッホの死を予感していたかもしれない。少し気味悪いエピソードである。北里は、毎年、コッホの命日には、神道の形式で祭祀をおこした。コッホへの宗教的な傾倒は度を超している。

文献：小川真里子「ローベルト・コッホの来日をめぐって」生物学史研究、45、7-17、1985。

Ogawa, M. Robert Koch's 74 Days in Japan. Kleine Reihe Herausgegeben für die Mori-Ôgai-Gedenkstätte der Humboldt-Universität zu Berlin, 2003.

宮島幹之助「追憶」．ウンガー『ローベルト・コッホ：偉大なる生涯の物語』（富山房、1943）に収録。

福田眞人『北里柴三郎：熱と誠があれば』ミネルヴァ書房、2008。



現在の日本に残るコッホの痕跡をまとめておこう。

1) コッホ・北里神社（北里研究所白金キャンパス）

前述のように、1910年にコッホが亡くなると、北里柴三郎は、国立伝染病研究所（現在の東京大学医科学研究所）の敷地内に、コッホの遺髪を祀る「コッホ祠」を作った。そして、毎年の命日には神道式の追憶祭を行った。その後、この祠はいくたの変遷をへた。

1914年に、伝研騒動で、北里が北里研究所を新たに建てると、コッホ祠は、新たな敷地（現在の北里研究所白金キャンパス）に移動した。

1931年に北里が亡くなると、門下生は、コッホ祠の隣りに「北里祠」を作り、2人とも神としてまつた。

1945年には、戦災により「北里祠」が焼失したが、「コッホ祠」は残った。そこで、北里の霊を「コッホ祠」に移して合祀した。

1980年、コッホ祠は北里研究所のビルの屋上に移された。

1993年、コッホ祠は北里研究所の敷地内の現在ある場所に移された。これを機に「コッホ・北里神社」と呼ぶことになった。外国人を祭る神社は珍しいということである。

現在は、右下の写真に示すように、北里研究所白金キャンパスの真ん中、北里研究所病院の前に、「コッホ・北里神社」がたっている。その前には説明板が立っており、以下のように書かれている。

コッホ・北里神社の由来

北里柴三郎は、ベルリン留辛時代（1886～1891）ドイツの細菌学者ローベルト・コッホ博士に師事し、当時、不可能と考えられていた破傷風菌の純培養に成功、さらに免疫抗体や血清療法の発見など数々の輝かしい業績を挙げ、その名を世界に知られるまでになった。

北里はこれをを全てコッホ博士のお陰とし、心からの尊敬と信頼を捧げた。

1910年5月27日、コッホ博士の訃報を受け、北里は深い悲しみにくれ、間もなく、国立伝染病研究所（現東京大学医科学研究所）の一隅に博士の遺髪をご神体として総桧造りの祠堂（コッホ祠）を建て、没後一年祭を挙行し、恩師を偲んだ。

1914年11月5日、北里は国立伝染病研究所所長を辞し、即日、新たに北里研究所を創設して所長となり研究事業を続行した。そして、翌1915年、このコッホ祠を北里研究所構内の東南隅に招来し、同年5月27日、例祭を兼ねて遷座報告の祭典を挙行した。

1931年6月13日、北里が逝去すると、門下生らは、北里の御堂を北里研究所内に祀ることを願い、間もなく、コッホ祠の傍らに北里祠を設け、コッホ祠とともに北里研究所の守護神として崇敬報恩のしるしとしてきた。

1945年5月25日、戦災により北里祠は焼失したが、幸い難を免れたコッホ祠にそれを合祀し、以後現在まで毎年6月13日の北里の命日に例祭を

行なっている。また、5月27日のコッホ博士の命日には献花を捧げている。

1980年、この祠堂は北里本館屋上の一隅に遷座されたが、1993年、当初北里祠のあった位置にほぼ近い現在地に移すことになり、これを機にコッホ・北里神社と呼ぶことになった。

2006年5月、北里柴三郎没後75年記念事業の一環として、建立から94年経った祠堂の修復と修理を行った。

2006年10月1日 社団法人 北里研究所

2013年4月1日 学校法人 北里研究所

北里研究所白金キャンパスの西側には、「北里柴三郎記念館」があり、ここにもコッホに関する資料が展示されている（入場無料）。

2) コッホ・北里神社（北里研究所北本キャンパス）

北里研究所は、後に北本キャンパスを開いたが、ここにも「コッホ・北里神社」がある。

3) 鎌倉稲村ヶ崎の鎌倉海浜公園にあるコッホ記念碑（前述）。

前述のように、1908年にコッホ夫妻が鎌倉に1ヶ月ほど滞在したのを記念して、コッホの死後、1912年に、鎌倉稲村ヶ崎の鎌倉海浜公園にコッホ記念碑が建てられた。

ここには次のように彫られている。

コッホ博記念碑

GEDENKSTEIN FÜR

ROBERT KOCH DESSEN LIEBLINGS

AUFENTHALTSORT HIER WAR

明治四十二年七月獨國大医古弗先生偕北里博士遊鎌倉望富嶽而快之博士為設榻於靈仙山上先生昕夕縦目心甚喜之既西歸未幾而歿山之主村田君及某某等相謀立石以志遺蹟山下即稻村埼為元弘役新田左中将投刃之地海濤翻空嶽雪輝映今則為海外偉人留賞之所此亦可以傳也

大正元年九月 永坂 周 記併書

ベルリンに送られたコッホ祠の模型

ベルリンに送られたコッホ祠の模型

コッホ祠（国立伝染病研究所時代）

コッホの1年祭に伝染病研究所の一角にを設け、コッホを祀った。北里研究所創立後は、白金に移し、正門脇に鎮座。



コッホ祠の模型



コッホ祠の神域の模型



1937年の贈呈式



出典：北里記念室ホームページ

ウンガー（宮島・石川）『ローベルト・コッホ』富山房、1943。

宮島（1943）によると、北里の死後、ベルリンの国立医学史資料館からの要請があり、コッホ祠の模型が作られた。

北里研究所構内の神域の模型（左下の写真）と、コッホ祠の模型（右上の写真）が作られた。これらの模型は、1937年、ベルリンのカイゼリン・フリードリヒ館において、贈呈式が行われたという。

これらの模型はベルリンの国立医学史資料館に今でも保管されているのだろうか。

出典：宮島幹之助「追憶」．ウンガー『ローベルト・コッホ：偉大なる生涯の物語』（富山房、1943）に収録。

最後に：世界の医学の流れからみた森鷗外の留学

コッホや当時の医学研究のレベルから考えると、鷗外は、まさに世界最先端の研究室を回ったことになる。鷗外の留学プログラムを作ったのは橋本綱常という上司である。1884年10月、ベルリンに着いたばかりの鷗外に対して、軍医監の橋本は、衛生学を学ぶべきであり、その順序は①ライプチヒ大学のホフマン、②ミュンヘン大学のペッテンコーファー、③ベルリン大学のコッホだとアドバイスした。鷗外のドイツでの日程は、この橋本のプログラムどおりになったのである。当時、ドイツの大学で衛生学教室があったのはこの3つだけであり、その前に留学した緒方正規もこうしたルートを辿っていた。コッホやペッテンコーファーは、当時の医学の最前線にいたから、橋本は世界の最先端を的確につかんでいたことになる。ベルツなどの情報もあったであろうが、明治維新から20年もたっていないのに、日本の医学者は的確な世界認識を持っていた。

森鷗外のドイツ留学の研究といえば、鷗外個人のチマチマした内的世界にばかり目を向けやすい。①鷗外の個人生活（現地でのエリーゼとの恋愛）とか、②留学中にどんな文学を読んだとか、③陸軍内の人間関係とか、④ドイツでの留学生の人間関係など、個人生活に焦点がある。もちろん、鷗外は、現代人にとっては小説家・文学者としての意義が大きいので、彼の作品にかかわるベルリンでの個人的生活に焦点が当たるのは当然のことだ。しかも、前述のように、そうした研究は面白い。

しかし、こうした文学的興味をきっかけにして、鷗外のドイツでの科学研究者としての生活や人間関係を知ってみると、こちらにも大きな意義があることがわかってくる。科学的興味も十分に満たしてくれる。

鷗外の留学は、もともと医学研究（陸軍衛生制度の調査）が目的であるから、もっと視野を外に向けて、医学や社会の観点からも見るべきである。こうした観点からみた本として、下記のものが役に立った。

武智秀夫『軍医森鷗外のドイツ留学』思文閣出版、2014

浅井卓夫『軍医鷗外森林太郎の生涯』教育出版センター、1986.

世界の医学史や科学史の面から、森鷗外を考えることも重要である。科学的観点と文学的観点は、排他的ではなくて、相補的である。科学的観点からの理解は文学的観点からの理解を進めるし、その逆も真である。（本稿を書いていて強く思ったのは、コッホのことを知ると鷗外のこと理解しやすくなり、逆に鷗外のことを知るとコッホのことがより理解しやすくなったということである。つまり、ベルリンを理解すると日本を理解しやすくなるし、日本を理解することでベルリンを理解しやすくなる。両者の理解は相補的である）

また、こうした観点からみると、橋本綱常や緒方正規、北里柴三郎といった、当時の日本の医学者の慧眼には驚かされる。彼らは日本史の中でもっと高く評価されてよいだろう。

●元に戻る

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/>